
インモラルティ・コントロール

織田撫子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インモラルティ・コントロール

【Nコード】

N8837W

【作者名】

織田撫子

【あらすじ】

契約の代価 続編

”オペレーション・ヴァルプルギス” 終結後、インドへ渡ったその後のお話。

辛い経験を乗り越えようとするエルメス、そしてそれを支えるシュヴァリエたちの奮闘と日常を描く、カイの綴る報告書。

FILE 1 Comte 「伯爵」

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カル

ロ・ジエズアルド改め

カイ・ペンドラゴン

戦後におけるシュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動
報告

アンタは今どこで何やってんですか。さっさと帰ってきやがれば
力。

ああ、とりあえず、伯爵の新しい名前アーサーってことになった
から。ミナ・・・ていうか、ミナも今はエルメスって名乗ってるけ
ど、まあ、兎に角アイツが勝手に決めた。

その件に関してはおいおい言及していくとして、とりあえずアー
サーが消えてからの事をこれから書いて行こうと思う。

アーサーが帰って来た時に、それまでの事を口頭で説明すんのが面倒くせえからな。

つつても、もしかしたらその時になって「やっぱ見せるのやめよ」とか思うかもしれないけど、まあその時にならなきゃわかんねーし、書いときゃよかったって後悔するのも嫌だからとりあえず書くことにする。

アーサーが消滅した後、エルメスは戦ったよ、ジュリオ様と。裏切りは許さないって、アーサーとみんなの為に。

アイツ凄かったよ。ちゃんとアーサーの眷属としての矜持を保って、アーサーの能力を踏襲して、エルメスなりのラグナロクを発動させた。

エルメスが言うには、ラグナロクというか、アーサーの能力の根源はサイコネシスと元素を操る能力だって言って、めちゃくちゃ化学戦だった。正直俺にはわけわからん現象だったけど、とにかく壮絶だった。まさか中性子爆弾作るとは思わなかったからな。少なくとも今のエルメスには全く勝てる気がしない。

だからついた二つ名。何個があったけど、なんだっけ。

“蒼い錬金術師” “不死王の愛娘” “アンフィニサージュ” “無限の賢者”

俺的には“不死王の愛娘”って響きがいい。ぴったりじゃん。“蒼い錬金術師”ってのもあいつにはぴったりだと思っ。まさしく錬金術だったしな。“アンフィニサージュ”これはアイツにしては尊大すぎだ。どんなネーミングセンスしてんだ。フランス語なのを見

ると名付けの犯人はアレクだな。

で、まあ話を戻すけど、戦ってジュリオ様を圧倒して瀕死にまで追い込んでただけど、とどめを刺そうとしたエルメスを止めて、俺がジュリオ様を殺した。アーサーにしてみたら喜ばしい事だろ。感謝しろ。

なんでかっていうと、教皇からの命令があつたつーのが1つ。それと、エルメスにジュリオ様を殺してほしくなかったから。それに、どうしてもエルメスを殺したくなかつたし、死んでほしくなかった。まあ、俺の都合が8割だけだ。

この2人が殺し合いをしても、結局呪いの連鎖って消えねえんじやねえかと思つた。エルメスにジュリオ様を殺されたら、俺がエルメスを殺さなきゃいけないなるだろ。それに、あの時仮に形勢が逆でジュリオ様がエルメスを殺しても、俺はジュリオ様を恨むと思うし。だから俺が殺した。

それでかえってエルメスは心配してたけど、それはまあ、いい。

で、戦いは終わったけど、エルメスはアーサーもみんなも、誰も守れなかつたつてすげえ後悔してた。強くなつてみんなを守るつてクリシュナさんと約束したのにつて。もう生きていたくない、死にたい、殺してくれとか言い出した。だから、引き留めた。

そりゃ引き留めるよな。アイツに死んでほしくなくてジュリオ様を殺したのに、アイツが死んだら意味ねえし。引き留めるために、俺と死神の奴らとみんなと一緒に生きると決めた。つーか実は決めた。で、今一緒にいるわけ。

とりあえず、ミラーカさんの砂を集めて、棺に入れて城の裏庭に埋葬した。本当はオーストリアに連れて行ってあげたいつてエルメ

スは言つてたけど、今はフィレンツェで我慢してもらつて、落ち着いたら国に返してあげようつてことになった。

エルメスはミラーカさんの墓の前でずっと泣きながら謝つてた。守つてくれてありがとう、守れなくてごめんなさいつて。ミラーカさんだけじゃなくて、エルメスはクリシュナさんも北都も失つて、ボニーさんとクライドさんは行方不明で、さらにはアーサーまでいなくなつて、本当に一人ぼっちになってしまった。一夜にして大切にしていたものを全て、失つた。アイツの絶望は俺の想像もつかない程なんだと思う。

アイツ前に言つてたんだ。俺が「お前が心まで化け物になつてるようには見えない」つて言つたら、なんだかしょんぼりしてさ。

「今のままで、また大事な人を失うようなことがあつたら、その時は耐えられるのかな」

そう言つてた。一時は耐える気力すらなかつたけど、でも今は耐えてる。心も化け物にせず。すげえよな、アイツ。

状況は違つし、自分で決めて実行したことだけど、俺だつてジュリオ様を手にかけてた罪悪感で死にたいと思つた。でも、それ以上の絶望を味わつてなお、アイツは耐えてる。

そんなエルメスの姿を見て、俺が死にたいなんて言えるわけねえし、むしろダメだよな、そんなの。だから、俺がアイツの傍にいて一緒に生きてつてやりたいと思つた。なんか、俺がすっかりしないと、とか思つた。あれ、なんか俺アイツの保護者みたいじゃね？

まあ、兎に角そう言う事だ。

で、レミは地下室に隠れさせてただけど、出してやったら行くって聞かねえから一緒に連れて、偽造パスポート作って、アーサーに言われていた通り、インドに逃げた。アーサーの棺も一緒に。で、今インドでシャンティの屋敷に世話になってる。

その逃避行で何が一番面倒くさかったってパスポートだよ、パスポート。偽造するくらいなら大した作業じゃねえんだけど、まあ俺らは慣れてるしな。

どうせ作るなら名前変えようぜってことになって、エルメスが提案した。

「みんなもう死神じゃないんだから、レミと一緒にシュヴァリエになればいいじゃん」

なんかそんなこと言い出して。で、騎士と言えば円卓の騎士だろってことになって、みんな円卓の騎士から名前を取ったわけだ。偶然にもエルメス以外のメンバーはレミ入れて丁度12人だったしな。で、やっぱりアンタは王だからアーサーになったわけ。エルメスには最初王妃の名前がいいんじゃないかねーかつつたら、

「王妃は王を裏切るからダメ！」

とか言って、伝説の錬金術師の名前をシュヴァリエに倣ってフラ

ンス語読みにパクってエルメスになった。だったら、王の補佐役やつてた魔術師のマーリンでいいんじゃないかねーのとも思ってたけど、なんか知らねえけど却下された。ヘルメスをリスペクトしてるとか言つて。どうでもいいけど。

ちなみにレミはランスロットになった。まあ、ランスロットは王妃さえいなけりゃ裏切らなかつただろうからな。

ただ、納得いかないのがなんで俺がカイなのかって事なんだけど。それもエルメスが勝手に決めやがった。

「永遠の毒舌家」とか言われてるカイ卿はカルロにぴったりじゃん！」

とかなんとか言いやがって、マジあのバカ女シバキ回したい。で、他の奴らはこんな感じ。

クリステイアーノ ガウエイン

レオナルド キルシュ

クラウディオ ペレアス

ヨハン ベドウィル

エドワード パーシヴァル

アレクサンドル ライオネル

オリバー ユーウェン

ルカ デイナダン

ジョヴァンニ ガラード

ミゲル トリスタン

ついでに姓は

「私は娘でしょ？ みんなは言ってみれば孫みたいなものじゃない。

家族みたいなもんだし、同じでいいよね」

結局考えるのも面倒だったから、もうそれでいいやってなった。

とりあえずそれで全員名前が決まって、いざ作業に取り掛かろうと思ったら一大事だよ。

俺達はさっきも言ったけど慣れてるから写真とか用意してあるわけ。問題はエルメスだよ。今更写真撮れねーしどーすんのかな

結局あいつが1枚だけ写真持ってて、それで何とかしたけど。でもその写真、家族写真だったんだぞ。しかも高校の卒業式。

まあ、吸血鬼だし別に老けたりしねーけど、パスポートの写真にそれはちよつとどうかと思うよ、俺は。正直加工がめちゃくちゃ大変だった。

つくづくエルメスには手を焼かされる。

まあ、そんな感じで紆余曲折あって、パスポートの偽造は完了した。

で、城に火を放ってすべてを燃やし尽くした。もうフィレンツェっていかイタリアにもヴァチカンにも戻ってくることはないと思うし、あの城での思い出は、良い事以上に悪い事の方が強く残ってしまったから。過去には執着しない、もう、後戻りしないって言う覚悟も含めて。

そこで、アーサーが前に買ったって言ってた飛行機で、アーサーの棺も一緒にインドに行った。

で、すぐにまた一大事だよ。屋敷に着いてシャンティの顔見た瞬間エルメス号泣。で、シャンティはシャンティでアーサーたちがいないって知って号泣。俺ら呆然。ていうか、早く屋敷に入れるみないな。

二人とも全然泣き止む気配がなくて、俺らも正直困ったつつーかぶっちゃ俺はキレそうでした。

そしたらスニルが気イきかせてくれて、とりあえず屋敷に入れたんだけど、またこいつらが本当にアーサーを崇拜してたんだな。

アンタの部屋そのまま残してるんだよ、誰も手を付けずに、アーサーだけの部屋だからとか言っつて。それでまたエルメス号泣だよ。泣かせてくれるじゃねーの。いい加減俺はウンザリだけどな。

その後もウンザリの連続だよ。アーサーの部屋にとりあえずアーサーの棺を置いて、エルメスもアーサーの部屋がiiiiっつて言っつて、まあ、そこまではいい。

アーサーの傍でアーサーの帰りを待ちたいって気持ち俺にもわかるしな。インドに行く前だっつてアイツ自分の棺に寝ないで、泣きながらアーサーの棺の前で過ごしてたんだ。

アーサーの棺に伏して、アーサーの紅い結晶を握りしめながらポロポロ泣零して

「会いたいよ、早く帰ってきて」

何度も何度もそう言いながら。吸血鬼じゃなかったら病気になるんじゃないかって思う。

本当にエルメスにとってはアーサーが全てなんだよ。もし、あの時アーサーが

「必ず帰ってくるから待っていてくれ」

この一言を言わなければアイツは死んでたと思う。
その一言だけでエルメスは生きてるんだよ。パンドラの箱に残った小せえ希望に縋り付いてるみたいに。

エルメスは言ってた。アーサーの為に生きてアーサーの為に死ぬんだって。そう言う契約をしたんだって。アーサーは約束は絶対破らないから、自分が破っちゃダメなんだって。

それを言えるようになるまで、アイツもかなり悩んでただけ。最初はさ、仲間も全員居なくなっただって、こんな思いを抱えながら、帰ってくるかもわからないマスターを一人で待ち続ける事なんかできないって、そう言って死のうとしたくらいだったしな。

それでも、アイツはアーサーの為に待つことを決めたんだよ。もし、アーサーが生きてて、帰って来た時に自分が居なかったらアーサーが辛い思いをするからって。もう、アーサーを一人ぼっちはさせないんだって。

俺だって、いつまでもあんな風に泣いてるエルメスを見ていたい

わけじゃないし、アーサーが帰ってきてくれたらどんなにいいかって思う。

でもな、それを踏まえてもあり得ねーんだよ。あのバカ女の我儘炸裂だよ。

「一人じゃ寂しいから、みんな一緒の部屋でいいじゃん」

もう、ちよつと俺は本当に眩暈がしたよ。あんな面倒くせえ女とそこまで、24時間いるなんて耐えられない。俺は基本自由人だから無理。できる事なら23時間一人でいたい。俺には無理。つーかどうやったら12台もベッドが入るんだよ。野戦病院じゃあるまいし。

勿論、全員大反対だよ。シャンティ達ですら反対した位だ。当然だよな。そしたらまさかのご指名だよ。

「ランスとカイは一緒じゃなきゃ絶対イヤ！」

もう本当アイツ殴っていいか？ このメンバーの中で俺が一番嫌がってるの。一目瞭然なの、それは。それを無視しての我儘放題だよ。これは正直アーサーの監督責任だと思う。甘やかしすぎだ。

そっからはまあ想像つくと思うけど、いつもどおりの大喧嘩だ。

「いいじゃん！　なんでダメなの？」

「お前がウザいから」

「ウザくないよ！」

「いや蜘蛛の巣よりウザい。ていうか、逆になんでだよ！」

「だって、一人は寂しいし怖いもん」

「じゃあランスだけでいいじゃねーか！」

「ダメだよ！　ランスは癒し系でカイは励まし系なんだから！」

「意味わかんねえよ！　面倒くせーんだよてめーは！　ガキじゃね

ーんだから寝れるだろ！」

「無理！　もう！　なんで我儘言うの！？」

「おま・・・ちよつと待て、俺が我儘なのか？」

「そうだよ！　私に忠誠を誓うって言ったのカイじゃん！」

「いや、言っただけどよ、そう言う事じゃなくてだな。物事には限度つてもんがあんだろうが」

「忠誠を誓うってことは絶対服従って事だよ？」

「それは違う！　それはお前間違っただ認識だ！　その暴拳が許されるのはアーサーだけだ！」

「暴拳なの！？　なんで私はダメなの？」

「お前がダメじゃなくてアーサーが特殊なんだよ！　わかつたら諦める！」

このやり取りでわかってもらえると思うが、アーサー、アンタのせいだ。妙な親の背中を見て育つからこういうアホな子供に成長するわけだ。

以前ジュリオ様に部下の教育がどうのこうの言ってたけど、エルメスを見る限り、アーサーの教育方針にも十分問題があったことは明白だ。

で、何がム力つくってこれでも諦めなかったアイツの無駄な執念深さ。ずっとガキみてえにヤダ！ つつてゴネて鬱陶しいことこの上ない。しかも涙目で、段々泣きそうな顔になってくるし。え、なにこれ。俺が虐めてるみてーじゃん、みたいな。

もつさ、今がこんな状況じゃなかったらブツ叩いてるところなんだけど、状況が状況なわけじゃん。俺ら的にはこれ以上エルメスを余計なことで泣かせたくないわけじゃん。もはや今の俺はエルメスに対しては聖人の域に達してるわけじゃん。

だからアイツに泣かれるとスゲエ困るわけよ。アイツ泣かせたら犯罪者扱いなわけよ。うわー、カイ、エルメス泣かせた、みたいな視線が俺にとつては毒劇物なわけよ。今の俺にとつてはエルメスの「涙ながらの訴え」は最終兵器に等しいわけよ。頼むから泣くな！ 何でも言う事聞くから！ くらいな勢いなわけよ、実に不本意ながら！

そついうわけで、この件に関しては、こいつは折れることはないんだろうなって渋々俺の方が諦めた。

「あー！ もういいよ！ わかったよ！ そこまで言うなら一緒に部屋にしてやる！ でも、俺の眠りを妨げたり俺の生活の邪魔したら有無を言わさずお置きだからな！」
「うん！ わかった！ ありがとう！」

俺が諦めて話がまとまった瞬間、アイツお礼言つて笑ったんだけど、久しぶりにアイツの笑顔を見て、なんかすげえホツとした。

アイツあれからあんまり笑わなくなつて、まあ当然なだけども、笑う事があつても愛想笑いつつーか、営業スマイル。いかにも、な笑顔。

「みんな心配しないで、私は大丈夫だから」

つてかんじの。なんか自分に言い聞かせて、俺らに氣イ遣つてるみたいな取つてつけたような笑顔だったんだけど、その時エルメスは前みたいにちゃんと感情のある顔で笑つた。

だから、まあこの決定が本意には違いなかつたけど、それに釣り合う代価かなとは思つた。

とりあえず話がまとまつたから、俺はアーサーの部屋の寢室のベッドで寝ることにした。俺達棺持ってねえし、あつたとしても生まれた土地の土なんて無いどころか、それがどこかも覚えてねえしな。寢室が無駄に広がつたおかげで、ランスのベッドも運び込めだし、エルメスとアーサーの棺も運んだ。

で、こつからちよつと面白いんだけど、またエルメスの我儘が炸裂。

「ランス、一緒に寝よつか！」

「え？ エルメス様は棺でお休みになつた方がよろしいんじゃないですか？」

「いーの！ 私と一緒に寝るのイヤ？」

「い、イヤじゃないですけど、でも……」

「じゃあいいでしょ？」

「ダメですー！」

「どうして？ 私の事キライ？」

「好きです！ だからダメなんです！」

「意味わかんないよ！ ホラもう我儘言わないの！」

結局、エルメスは勝手にランスのベッドに潜り込んで、暴れるランスを押さえつけて一緒に寝てる。

多分ランス的には

「エルメス様と一緒に寝るなんてドキドキして眠れません！」

て事なんだと思う。アイツ残酷だよな。ランスが今まだ10歳だからいいものの、15歳とかだったら気の毒すぎる。

ていうか正直すげえウケるんだけど。アイツのああいっつ男の気持ちを理解しないところは、見る分には最高に面白い。

さすがはバカの象徴だ。やっぱりアイツのバカなところは長所だと思う。

で、それが数時間前までの話。もうそろそろ朝になるから、インド逃亡生活1日目が終わるところ。

とりあえず、今日までの流れをざっと書いてみたけど、もっと詳しく知りたいならエルメスに聞け。俺は話すの面倒くさいし、俺の主観でしか語れないからな。

今日の所はこれで終わり。これから毎日書くかはわかんねえけど、なんかあったら書くことと思う。

でも、できればこの報告書の数が増えないことを祈る。

さっさと帰ってこい。じゃねーと、その内愛想尽かされて本当にランスに横取りされるかもしんねえぞ。

以上

FILE 1 Comte 「伯爵」(後書き)

登場人物紹介

カイ「俺」

本編の主人公。エルメスのシュヴァリエ筆頭で親友。
エルメスを心底バカだと思っっているが、心底大事にも思ってる。
博学多才、頭脳明晰、眉目秀麗、品行方正、完璧と優秀の体現者、
それが俺！と思っ込む、人格の破綻した自由人。
好きな言葉 独立自尊

エルメス

今のところペンドラゴン一族のトップ。先の戦争で家族を失って傷
心中。

アーサーを見て育ったせい、傷心中なせい、我儘が加速中。

アーサーの帰りを待たため、カイ達と行動を共にする。

好きな言葉 日進月歩

アーサー

エルメスの主人。ペンドラゴン一族本来のトップ。現在消滅中。

必ず帰ってくるかと約束したものの、いつ帰ってくるかはわからない。

本当に帰ってくるのかもわからない。どこにいるのかもわからない。

アーサーの愛がどこに行くのかもわからない。

何を考えているのかもよくわからない。

作者ももてあます謎の男。

好きな言葉 難攻不落

FILE 2 Charisma 「カリスマ」

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

今日も俺は寝起き早々ウンザリさせられました。むしろ泣かされました。助ける。

いや、冗談抜きで泣いた。マジでアーサー、アンタどんな騒いでんだ。本当にどうという教育をしたんだ！俺は腹が立って仕方がない！

何がそんなに悲しいって、目が覚めたらエルメスが「おはよう」ニッコリだよ。普通だった？普通じゃねーよ。俺寝起きね。エルメス眼の前ね。おかしいだろ。

目開けて速攻ギョツとしたぞ。昨夜ランスと仲良くネンネしてたやつが目の前にいるっておかしいだろ。どういうことだ。

「いや、ていうかお前なんでいんの」
「だってランス朝になつたらいなかったから・・・」

ランスは人間だし普通に朝起きてベッドから出たようで、途中でランスがいないと気付いたエルメスは寂しくなつて俺のベッドに潜り込んできたらしい。運悪く昼間はシャンティ達は仕事でほとんど出払つてゐるらしい。さっそく俺の生活は崩壊だよ。マジ勘弁してほしい。

まさか寝起き早々涙で枕を濡らす羽目になるとは思わなかった。
マジ俺可哀想。昨日の俺を拷問の末殺してやりたい。

「ああもう！ だから嫌だつて言つたんだよ！ 超うぜえ！ 邪魔すんなつて言つただろーが！」

「邪魔なんてしてないよ！ じつとしてたよ！」
「そういうことじゃねーよ！ 勝手に人のベッドに入ってくるな！」
「だってランスがいなんだもん！ 目が覚めた時誰もいないと怖いんだもん！」

エルメスのその言葉を聞いてようやく理解できた。あいつは自分が一人ぼっちになったことが怖くて、それを体感したくなかつたんだとわかつた。

まあ、それを差し引いてもあり得ないけどな。

「いや、わかる。わかるけどな、お前はわかつてねえみたいだけど、俺一応男ね。わかるか？」

「バカにしすぎだよ！ そのくらいわかつてるよ！」

「全然わかつてねーじゃねーか！ 仮にこのタイミングでアーサーが帰ってきたら俺が殺されるんだけど！ その辺わかつてるか！？」

「え？　なんで？」
「・・・いや、もういい」

もうさ、本当さ、昨夜ランスで笑って申し訳なく思ったよ。マジでアーサー怒らないでよ、俺は全然悪くないから！　全く持って悪くないから、むしろ被害者だから！

ていうかその後も、エルメスは俺がいるのに普通に着替えるわけよ。そりゃ前にアイツとストリップ剣劇で立ち回りはたけど、だからって気を抜きすぎだと思う。多分アイツの中で俺の性別は存在してないんだな。

こんなに他人に気を遣ったのは初めてだ。多分俺ハゲるぞ。もしくは精神分裂症とかになる。

頼むから俺が発狂する前に帰ってきてくれ。今すぐ帰ってこい、頼むから。土下座するから。マジアイツうぜえ。前からウザかったけど一層ウザさに拍車がかかっている。俺の手に負えるようなレベルじゃねえ、なんとかしろ。誰か変わってほしい。

寝起き早々地獄に突き落とされた可哀想な俺だったわけだけど、唯一の救い。

「カイとランスがいてくれたから怖くなかったよ！　ありがとう！」

まあ、アイツの素直な性格は財産だと思う。正直金輪際こういう事は御免だけど、エルメスがちょっとでも元気になるなら同室くらいは許してやってもいいかなーとか思ってみたりした。

エルメスは強い奴だけど、だからってなにもかも一人で我慢させ

るのは可哀想だ。一生エルメスの傍に在るって誓った以上は、アイツが辛さとか恐怖とかを克服する手伝いをするのも俺の仕事だ。あんなんでも一応俺たちの「ご主人様」なわけだし、おもりぐらいはしてやんねえと。

「あ！ 良い事思いついた！ 今日から3人川の字で寝ればいいんだ！」

前言撤回。やっぱ無理。俺程度の才覚じゃ面倒見きれませんよご主人様。アイツの笑顔に騙された。アイツがバカだつてことを一瞬忘れてた俺が憎い。

とりあえず、その後エルメスをシカトしてシャンティ達に俺とエルメスとガライド達とで事の顛末を説明した。

アーサーの事やジュリオ様の事、スパイ活動の事なんかはそれぞれ俺たちも知らない事実もあつたわけだし、説明は分担しながらだつただけだ。

正直俺も“オペレーション・ヴァルプルギス”の事は直前まで知らされてなかつたから、ガライドから話を聞いてやっぱりちよつと辛かつたな。

最初ジュリオ様からその作戦を聞いたときは、裏切られたつて言う思いと、裏切らなければならぬつて言う罪悪と、ジュリオ様への忠誠と、エルメスへの友情とで八方塞がりになつて結局止めることが出来なかつたし。

なんといつてもこのインドの屋敷はスレシユの屋敷だし、俺の両

親を殺して俺を誘拐した犯人の家だと思うとなんとも複雑だ。まあ、今の住人は無関係だってわかってるけど。

フィレンツェにいた時は、俺は本当にジュリオ様がエルメスを愛していて、呪いから解放されたがってるんだって信じて疑わなかった。だから、あの戦争は正に寝耳に水だったんだけど、ジュリオ様の気持ちもわからなくはない。

確かにあの時ジュリオ様の言っていた通り、ジュリオ様の復讐は正当性があると思う。どう考えたって呪いの種を蒔いたのはアーサーであって、襲撃されてもしょうがないと思う。だけど、ジュリオ様のやり方は、ダメだ。

アーサーを絶望の底で殺す為に、羊のふりをしてエルメスやみんなを、俺達をも騙して、もしジュリオ様の計画通りになったとしても、その後俺はそれまでのようにジュリオ様を信頼して着いて行けたかと考えると、答えはNOだ。

俺は心底ジュリオ様を信頼していたし、だからこそエルメスまで騙していたことが悲しかった。ジュリオ様はわかっていたはずだ。俺がどれほどエルメスを大事な友達だと思っていたか。それをわかっていて、その事を利用されたことがとても悲しかった。その事を無下にされたことが辛かった。俺はあの人を父親のように思っていたから、余計に。

あの方は、アーサーに裏切られて相当辛い思いをして来たんだ。だから、化け物になった。なってしまった。

あの人を化け物にしたのはアンタだ。アンタが招いた事態だ。だけど、呪いの種を蒔いたのはアンタだけど、それを育てて呪いの花を咲かせたのはジュリオ様だ。結局ジュリオ様も弱い化け物だった

って事だな。

俺やガロードからジュリオ様の話を聞いてシャンテイ達は当然怒ってたよ。昔の事なのにつて、エルメスやミラーカさん達は関係ないのにつて。クリシユナさんを殺した黒幕だったなんて許せないつて。まあ、その感想は当然だと思う。けど、それを聞いたエルメスは驚くべきことを言った。

「それはそうなんだけど、でもジュリオさんは可哀想な人なんだよ。本当のジュリオさんはとつてもいい人なの。心の底から“ミナ”を愛してただけなんだよ。悪いのはアーサーさんと私なの。ジュリオさんに呪いの種を植え付けて、ジュリオさんの苦しみに気付いてあげられなくて、より一層ジュリオさんを苦しめた、私にも罪があるの」

それを聞いてさすがに全員絶句した。アイツはあれほどの目に遭つていながらジュリオ様を許そうとしてるんだ。そんな心情を持つことが信じられなかった。アイツが自分の愛する夫や家族を失つたのはジュリオ様のせいなのに。アイツもジュリオ様と同じように裏切られて、愛する人を殺されてしまったのに。

エルメスはアーサーやジュリオ様とは違う。いや、もしかしたら一緒ではいけないと思ったのかもしれない。きっとジュリオ様を許しても、その理不尽を許すことはないだろうとは思う。でも、それでもアイツは罪だけを憎んで人を憎んではいけないと思つたんだろう。

ジュリオ様を憎み続けても、それに囚われるだけつてのは目に見えてるから。8年前に復讐をしないと決めたということもあるんだ

ろう。アーサーやジュリオ様って言う前例があればなおのこと。それで苦しむ姿を見てきたのなら尚更。

エルメスはきつと苦しむのは自分で最後にしたいと思ったんだろう。もしエルメスがジュリオ様を憎んで、ずっとずっと憎み続けたら、呪いの種を蒔いたアーサーも、今でもジュリオ様を嫌いにならない俺たちも、ジュリオ様を憎むエルメスを見て苦しむとわかってるから。

アイツは今生きている奴らの為に、前に進む努力をしているんだ。死んだ人達に後ろ髪引かれながら、必死に。自分一人で全部を背負って。アーサーが種を蒔いてジュリオ様が育てた呪いの花を摘んだのは俺だったけど、摘んだだけならまた蕾をつけたかもしれないそれを、呪いの樹ごと切り倒して枯らせようとしている。

エルメスは本当に強いよなあ。エルメスの力になってやりてえけど、呪いの樹がデカすぎて、俺程度の才覚じゃ力になれないんじゃないかって自信失くす位だったのに。

でも、やっぱりアーサーが帰ってくるまでは、なんとかエルメスが立っていられるくらいには力になってやりたいと思う。できるかはわかんねえけど。多分そう思ったのはシャンティ達も同じだな。

「ミナ様、アンタがそう言うならあたし達はもう何も言わねえよ。でも、無理すんなよ、一人で我慢すんな。ミナ様がインドを出る時に言っただろ。復讐はしない方がいい、後悔するよって。よかつたじゃねえかよ、カイがいて。カイがいたから、復讐せずに済んだんだろ。呪いの連鎖を止めてくれたんだろ。」

「それに、こつも言ってたよな。シャンティはもう一人じゃないん

だから、みんなで幸せになることを考えてって。それはミナ様だつて同じなんだぞ。ミナ様の為に一緒に生きようって言ってくれる奴が傍にいるんだぞ。ミナ様をそれほどまでに大事に思ってくれる奴が傍にいるんだぞ。ミナ様が我慢して周りの奴らだけ幸せになつても意味ねえよ。ミナ様だつて幸せになれる様に、あたし達も傍にいるから。ミナ様は一人じゃないから、だから一人で泣くなよ」

それを聞いたエルメスはありがとつて言いながら泣き出して、シャンティはそんなエルメスを抱きしめながら一緒に泣いていた。俺達だけなら正直不安だけど、シャンティ達もいるなら大丈夫そう
だ。

アイツいい奴だな。エルメスの事が本当に好きなんだな。シャンティの言葉から察するにシャンティも色々あつて乗り越えてきたんだろつな。多分、エルメスの存在もあるんだろつ。

今のエルメスに必要なのは、同情してくれる偽善者じゃなくて共闘してくれる戦友だ。その点シャンティはいい相棒なんだと思う。

インドに行くようにあらかじめ指示してたアーサーの采配は大当たりだったわけだ。つかアンタまさかここまで予測してたのか？
自分が消えることも？ だとしたらやっぱりアンタは恐るべき策略家だな。敵わねえはずだ。

とりあえず説明を終えた後、エルメスとシャンティは話したいことがあるつつて二人でシャンティの部屋に入つて行ったもんだから、残された男どもでアーサーたちの思い出話でもすることにした。

どうでもいいけど、この屋敷における男女比率って異常だな。2

5対2つてあり得ねえ比率だよな。どうにかなんねえの？ まあ、いいんだけど。

アイツらはアーサーたちと出会ってからどういっいきさつでアーサーたちに仕えることになったのか、エルメスの結婚式とか、テロ騒動とか、イスラムの襲撃とか色々教えてくれた。

聞けば聞くほどエルメスってバカだな。とりあえず、アーサーも苦労したんだな。同情する。んで、これからは俺らが苦労するんだろうなと思うと、もう既に面倒くせえ。つーか既に苦労してる。同情しろ。

そういえば、こいつらとアーサーが出会ったいきさつを聞いて思ったんだけど、さすがだな。こいつらはみんなアーサーの事を英雄視してる節があるけど、実際違うだろ。

こいつらを雇用した理由は4つ。

- 1．化け物に仕えさせるのに不可触の民、いわゆる無戸籍の孤児の方が都合が良かった。
- 2．不可触の民は常に救いを求めているから、救ってくれる人間を裏切ることはない。
- 3．仮に裏切りを働かれても殺してしまえばいい。不可触の民なら家族も戸籍もないから周りから不審に思われることもない。
- 4．なによりシャンティを気に入った。

正解だろ？　なんでわかったって？　そりゃわかるよ。ジュリオ様と似たようなもんだからな。ただジュリオ様と違う点は、アーサーに家族がいたことだな。仮にアーサーがジュリオ様と同じようにこいつらを駒としか思っていなかったとしても、エルメスや他の人たちは違ってただろ。

こいつらが言ってたぜ。根気よく自分たちに教育を施してくれたミラーカさん、禁を犯したと知っても、それを隠して真実を教えにくれたボニーさんとクライドさん、いつも自分たちを世話して労ってくれたクリシュナさん、いつも優しくしてくれたエルメス、そして何より、自分たちを拾ってくれたアーサーに心から感謝してるって。

アーサーはさ、本当はこいつらに吸血鬼ってバレた時点で殺そうとも思ってたんだろ。でも家族がそれを許さない。こいつらに關わって、こいつらから信頼を得て、みんなもこいつらを信頼したから。特にエルメスあたりが猛反対しそうだしな。だろ？

それにアンタ自身も感化されたはずだ。レヴィが言ってた。イスラムが襲って来た時、一緒に戦いたいって申し出たシャンティにアーサーが言った言葉が忘れられないって。

「私に恩を返したいと思うなら、生きてここから逃げる」

お前たちに死なれたら辛いからって言ってもらったような気がして、すげえ嬉しかったってさ。

こいつらとアーサーたちとの関係を聞いて思ったよ。もしジュリ

才様にも家族がいたら、俺達も違っていたのかなーって。誰かがあの人の心を支えてやってたら、化け物になってなかったんじゃないかって。

もしかしたら、ジュリオ様はヴァチカンに来たのは間違いだったのかもしれない。あのまま、イギリスでヘルシング卿に仕えてた方が良かったのかもしれない。まあ今更考えてもしょうがねえけどな。

でもアーサー、アンタはやっぱリスゲエな。さすがに王様だよアンタは。アーサーにエルメスや家族がいたのはたまたまじゃねえな。アーサーはあんなに傍若無人で自己中でやな奴なのに、アンタに関わった人間はみんなアンタに着いて行きたくなる。

まさにカリスマだな。

こいつらも、シュヴァリエの奴らも、エルメスも、クリシュナさんも、ミラーカさんも、ボニーさんも、クライドさんも・・・あ、でもアンタ北都とは異常に仲悪かったよな。まあ、北都はシスコンだったからしょうがねえか。北都にしてみりゃクリシュナさん以外エルメスに近づく奴は許せねえんだろ。

そういえば、クリシュナさんはここで亡くなったんだってな。エルメスを庇って死んだって前にエルメスから聞いたな、そういえば女の為に自分の命を懸けて守るってスゲエよなあ。クリシュナさんこそ正にシュヴァリエじゃねえか。クリシュナさんも吸血鬼だったみてえだけど、あの人に限っては名前の前に“聖”がついてもいい気がする。

クリシュナさんとエルメスはそりゃもう仲が良くて、クリシュナ

さんはエルメスをすっげえ大事にしてたってこいつらも言ってたし、俺の見る限りもそうだったな。アンタ、クリシユナさんに勝てねえんじゃないの。あの人を超えるのは相当苦労しそうだぞ。

まあ、帰ってきたら目一杯エルメスを大事にしてやれ。せいぜい頑張れ。って俺は何者だよ。

とりあえず、さっきから

「カイ、何してんの？ 何書いてんの？」

ってエルメスがうぜえから、今日の所はこのへんで報告を終わる。

以上

FILE 2 Charisma 「カリスマ」(後書き)

登場人物紹介

ジュリオ

故人。カイの育ての親であり、元主人。エルメスの為にカイが殺害した。

エルメスやアーサーを裏切り、先の戦争を引き起こした張本人。

ランスロット

シュヴァリエの一人。現在10歳。ペンドラゴン一族において唯一の人間。

いずれはエルメスに吸血鬼化してもらう予定。

エルメスを慕いついてきて、次期旦那の座を虎視眈々と狙う腹黒美少年。

好きな言葉 私利私欲

ガラード

シュヴァリエの一人。エルメスの唯一の支配下の吸血鬼。

エルメスに命を助けてもらった為に忠誠を誓った。

最近まで人間だったのでまだ20歳と若く、世間知らずで青臭いところがある。

好きな言葉 雪中松柏

FILE - 3 Chat 「お喋り」

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

報告

なあ、なんで俺の周りにはムカつく奴しかいねんだ。俺が一体何をした！

発端は昨夜だよ。昨夜は結局エルメスとシャンティは夜中まで話してて、それから飯食って風呂入ってだから、部屋に戻ってきたのはもう夜中の4時を回ってたわけだ。

暇だったのか構って欲しかったのか、報告書を書く俺に付きまといつて鬱陶しかったんだけど、シカトしたらその内諦めたように寝ると言い出した。でも、その時にはすでにランスは寝てて、エルメスは困惑した。

「カイ、一緒に寝ていい？」

「ざけんなバカ！ それはもうやめろって言ったじゃねーか！」

「静かにしてよ、ランス起きちゃうじゃない」

「・・・とにかくダメだ。絶対許さん。そこまで面倒見られるか。そこまでする位なら死んだ方がマシだ」

「死ぬとか言わないでよ！ バカア！」

「お前が一番うるせえよバカ」

エルメスが見当違いなところで大声を上げるもんだから、案の定ランスが起きてきた。

「うー・・・二人とも、どうなさったんですか？ こんな夜中にケンカですか？」

「ああ、ワリーな。ホラ、ランス起きたんだから一緒に寝ればいいだろ。つーか、よく考えたらランスが寝てても一緒に寝ればいいじゃないか！」

「やだよ！ 寝てる人の隣で一人起きてるのは寂しいの！ 一緒に寝付きたいの！ 何のために二人と同室にしたと思ってるの!？」

「おま・・・計算済みかよ！ つーか交代制!？」

「そーだよ。夜はランスで、昼はカイだよ」

「ちよ、ちよつと待ってください！ どういうことですか!？」

会話が飲み込めないらしいランスに昼間のことを話してやると、ランスは顔色を変えた。まあ当然だ。

「つーわけでランス、お前エルメスが目覚めるまでベッドから出るな」

「そうですね、そうします。エルメス様ダメじゃないですか。男は狼なんですよ？」

「待て待て、ランス？ お前どこでそんな言葉覚えてきやがったんだ？ つーか迷惑してんのは俺の方なんだよ！」

「エルメス様、カイ様は前科者なんですからちゃんと気を付けましようね？」

「え？ うん、わかった」

「わかったじゃねーよ！ つーかなに前科者呼ばわりしてんだ！

つーかシカトすんな！」

「何をおっしゃるんですか。前科者なのは事実じゃないですか」

「昔の事じゃねーか！ すっかり忘れてたんだけど！」

「加害者が忘れても被害者は心に傷を負っているものですよ。カイ様は一応シユヴアリ工筆頭なんですから、ちゃんと騎士らしくしてください。さ、エルメス様寝ましようか」

「うん。カイおやすみー」

結果的には俺の望むとおりになったんだけど、全然釈然としねえ。つーか超ムカつく。あのクソガキ、シバキ回した上に吸血してブチ殺してやりてえ。

大体エルメスもその話題が出る度に「そういえば」みたいな顔してんじゃねーか。アイツも忘れてんじゃねーか。なんで俺ばかり文句言われるわけ？ スゲー腹立つ。なんなの？ つーかなんでランスが知ってたんだよ。マジ怖ええ。何者だよアイツ。

え？ ていうか俺が悪いの？ 俺が悪いの？ いや、俺は悪くない！ 仮に俺が悪かったとしたらそれは昔の俺だ！ 今の俺は悪くない！ だろ？ 頼むからそうだと言ってくれ。今の俺にはアーサーしか頼りにならん。絶対俺は悪くない。と思う。

で、今日目が覚めたらもうエルメスもランスも起きたようで部屋にはいなかった。やっぱり素晴らしいな、一人って。最高だな。昨

日が最悪だったからより幸福を感じる。孤独を愛する男、俺。そんな俺にとって今の環境は地獄と同義語なわけだ。

でも、ランスがいるなら俺は別室でもいいだろ。そう思ってシャントイに別室を賜ろうと相談したら、なんでか知らんが白い目を向けられた。

「ああ、そーだな。アンタみたいな危険人物をミナ様と同室にするのは危ねーからな」

ランス！？ てめえ何喋ってんだコノヤロー！ よく見たらほぼ全員から白い目線を感じる。なにこれ、俺はこんな孤独は望んでねえぞ。

リオ 「はーあ、なんだかんだ言っさあ、副長も結局はその程度の男なんだよね」

ガルフ 「セクハラどころか犯罪者じゃねーか。それでも聖職者？ 生殖者の間違いだろ」

ディナ 「副長最低！。2次元の趣味を3次元に持ち込むなよ」

ランス 「カイ様は本当にヒドいお方ですね」

トリス 「ていうか、副長だけズルい」

ユアン 「お前それは違うね？」

もうあり得ない。なにこれ。俺可哀想すぎじゃね？ もうこれはイジメだよ。迫害とも言う。アーサー、アンタになら俺の悲壮が分かるはずだ。

俺が何かしましたか。いや、してねーよ。うん、しようとしただ

けで実際は何もしてねえ。俺は何もしてねえ！ なのになんだこの扱いは！ 俺が何をしたって言うんだ！ 冗談じゃねえぞ！

俺 「うるせえよてめーらは！ 俺はまだ何もしてねーの！

ふざけんな！」

パーシー 「まだってなんだよ！ これからすんのか！」

気の毒な俺 「しねーよ！ つーかお前ら面倒くせえ！ 黙れ！」

キルシュ 「被告からは反省の色が窺えませんね。有罪」

可哀想な俺 「誰が被告だ！ 何様だてめーは！」

ベディ 「検事、求刑の弁論を」

ガラード 「裁判長、極刑を望みます」

何故かバカどもが裁判を始めやがって、いい加減イラついて銃を取り出そうかと思っていたところで、エルメスが間に割って入って来た。

「異議あり！ もういいじゃない。面倒くさいし。私別に怒ってないし、カイはカイなりに反省してるんだから、ねえ？」

「そーだぞお前ら！ いい加減にしろよ！ 俺は無罪だ！」

「反省してる素振り位見せようよ・・・まあいいけど。部屋はランズがいてくれるならカイの好きにしていよ」

「やった！ さすがだなお前！ さすがにこの俺様が主と認めただけはあるな」

「結局自分を褒めるんだね・・・」

「いやいや、もう本当忠誠を誓いますよ、エルメス姫」

「誰が姫・・・まあいいや」

もうさすがだな。エルメスの博愛主義は賞賛に値する。アイツがここまで寛容なのは多分アーサーの躰が行き届いていたおかげだな。アーサーが普段からエルメスに無茶ブリかましていたおかげで、ちよつとやそつとではコイツは怒ったりしない。よく調教されてる。さすがアーサーはやるのが違う。

ガルフ 「ていうかエルメス原告じゃん。なんで弁護してんの？」
ダイナ 「エルちゃんあまーい！」
ベディ 「性犯罪は再犯率高いんだぞ！」

バカどもが何か言ってるけど、エルメスが俺に着いたならただの野次に過ぎない。

従僕な俺「諸君、黙りたまえ。姫はやめると言っておられる。姫の命令に逆らうな」

ペレアス「副長がそれ言う！？ ていうか誰だお前！」
忠臣な俺「黙れ。エルメスには絶・対・服・従だ。金輪際この話題を出すな。出したら殺す。それと俺はもう副長じゃねえ。筆頭と呼べ」

ペレアス「急に忠臣ぶりやがって・・・」

アホどもはまだブーブー言ってたけど、俺圧勝。見事なまでの起死回生。さすが俺。

落ち着いたところでソファに座ったら、エルメスの隣でシャンテイとレヴィが大きく溜息を吐いていた。

「まあ、このお姫様にその手の話題が尽きないのは今に始まったことじゃねえしな」

「そうだな・・・」

「は？ なに？ どういうこと？」

俺も含めてシュヴァリエ全員がシャンティ達に振り向いて、なんかエルメスが慌てた。もう俺はこの時点で半分くらい読めた。消去法で行けば簡単なことだ。

「あーハイハイ、俺わかった。アーサーだろ」

「おお、正解。あの不倫騒動はびっくりしたよ。しかも結婚式当日に発覚してるし」

「不倫・・・エルメスお前スゲエな。大体アーサーとクリシュナさん兄弟じゃねえか。お前どんだけビッチだよ」

「誰がビッチよ！ ていうか違うし！ 誤解だって言ったじゃない！」

「でもアルカード様は認めてたし、事実があるのに誤解っておかしくねーか？」

「うっそれは・・・でも違うの！ えーと、えーと、そう！ 騙されたの！ 罠よ！」

どういうことがよくわからんけど、さすがアーサーはやることが違うな。兄貴の女に手を出すとはさすがだ。伊達にエロオヤジの称号をほしいままにしてねえな。敬意をもって呼んでやろう。このエロオヤジめ。

ていうか、罠ってなんだよ。童話に出てくるバカな小娘か？ いや、普通に普段からエルメスはバカな小娘だな。

ついでに、クリシュナさんが言っていたことも納得できた。

「っーかお前さあ、前にクリシュナさんも言ってたけど防御力低いんだよ」

「どういうこと？」

「隙だらけってことだよ。言ってたじゃねーか。付け入る隙を提供

してるって」

「え？ 私が悪いの？ 私のせいなの？」

「そーだな。お前バカだから」

「そ、そんなバカな・・・いや、バカじゃないよ！ まあ、でもいいや」

「いいのかよ！」

一瞬落ち込んだものの、すぐにエルメスは開き直った。ていうか開き直るとはどういう事だ。いやってなんだよ。いいんなら遠慮しねえぞ。と思つてたらエルメスに睨まれた。

「だって、仮にこれから何かされても、私に触れた時点で燃やすなり凍らすなりするもん」

普段バカだからすつかり忘れてたけど、コイツ強いんだった。俺らなんかよりも圧倒的に。エルメスに手を出せば間違ひなく死ぬ。下手したら爆死する。それだけは勘弁だ。

「ハハハ、心配すんな。そんなことする奴ここには一人もいないよ」

「カイ様がおつしやつても説得力ありませんね」

「ああ？ うるせえ。つーかランス、てめえ覚えてろよ」
「なにがですか？」

「クソガキが・・・まあいい。後3年もすれば苦悩に喘ぐのはお前だ。ざまあみる」

「カイ様と一緒にしないでください。僕はカイ様と違って騎士で紳士ですから」

あーもうマジ腹立つんだけど、この腹黒のクソガキ。ジユリオ様と同じようなこと言いやがって。こいつも撃ち殺してやるーかな、

マジで。

自称紳士な奴が一番厄介でムカつく。アーサーもクリシュナさんと喧嘩した時そう思っただろ。紳士なんて絶滅すればいいと思わねえ？ 好きに生きて何が悪いんだっつーの。

その後しばらくゴチャゴチャ話してたら、エルメスは部屋に戻っていった。それを見届けていたらレヴィが話しかけてきた。

「ミナ様、思ってたより元気そうでよかったな」

確かに、普通に喧嘩もするし元気そうではある。でも、それは多分人前だからだ。元気そうなだけで元気なはずがない。

クリシュナさんの時も似たような感じではあったけど、あの時とは違う。本当にいなくなってしまったんだから。それも全部一度に。

「きつとアイツは今頃アーサーの棺の前で泣いてるよ」

そう言うトレヴィたちは悲しそうな顔をしてた。心配、だよな。当然だ。でも、どうすることもできない。どうしたらいいのかが分からない。俺達はただ普通に今までどおりにエルメスと接してやることしかできない。

少なくとも、俺らがエルメスの前で悲しそうな顔をしちゃいけない。でも、それしか方法は見当たらないし、今は終戦直後だし何をしてもエルメスを元気づけてやることなんか出来ない。

無力だな、俺は。

柄にもなくちよつと落ち込んでたら、急にシャンティが立ち上がって俺を呼んだ。

「カイ、何ぼさつとしてんだよ。いくぞ」

「は？ 行くつて？」

「ミナ様のとこだよ。友達が泣いてんなら、一緒に泣いてやんのが友達だ。一人で泣かせてんじゃねえよ」

やっぱシャンティはいい奴だ。どういう風に育てばこんなアツい奴になれるんだ。こいつもスゲエ。何でもない時に出会ってたら鬱陶しい女だろうけど、今は相当頼りになる。つっても別に俺は泣かねえけど。

シャンティと一緒にエルメスの所に行くと、エルメスは泣いてるどころか読書中だった。俺達の入室に気付かない程熟読中だ。なんで普通に本読んでんだよ。なんで泣いてねえんだよ。俺の発言と立場をどうしてくれるんだ。

「カイ？ どういうことだ？」

「俺に聞くな」

「アンタがミナ様が泣いてるつつつたんだろ！」

「そう思ったただけだ！ そこまで責任持てるか！」

「アンタよくそれでシュヴアリ工筆頭とか言えるな！」

「なんでそこまで言われなきゃいけないんだよ！ このバカ女！」

「なんだと！ このエロメガネ！」

「んだとテメエ！」

ダメだ。俺こういう気の強い女は好きじゃねえ。俺は一見淑女っぽく見えて、でも計算的で高潔そうな女が好きなの。ミラー力さんがどストライクだったの！情熱的で気が強いバカ女って対極じゃねえか。アーサー、アンタこいつのどこが気に入ったわけ？

シャンティとケンカを始めたらすすがのエルメスも気づいて止めに入ってきた。しつかりと会話の内容も聞こえてたみたいで、泣いてなくてゴメンとか言う始末。アホか。

「心配して来てくれたの？ ごめんね、ありがとう」

「別に」

「プツ！ カイ照れてんじゃねーよ」

「は？ んなわけねーだろ！ そもそもお前が行くって言ったんじやねーか！」

「アンタがミナ様が泣いてるって言うからだろ！」

「はああ！？ 俺のせいだよ！ エルメスが泣いてないならソレでいいだろ！」

「二人ともやめてよー！」

申し訳ない事に傷心のエルメスにケンカを仲裁させてしまった。この時はなんも思わなかったけど、後でちよつと反省した。それもこれも全てシャンティのせいだ。俺のせいじゃねえ。

「ていうか、お前何読んでたんだ？」

少し落ちついてエルメスに尋ねたら、本を掲げてニコツと笑った。

「ダンテの神曲！ クリシュナのお気に入りだったの！ テロの時

クリシュナに面白いから読んでみてって言われたけどそのまま忘れちゃってて、今思い出したの！」

「ふーん、そうか。俺も好きだぞ、神曲」

「意外・・・」

「うるせえ。イタリア人で元聖職者なら当然だ」

「あ、そっか」

そっからなんとなく本を読む流れになって、エルメスと二人で神曲を読んでたらシャンティも覗き込んできた。

「お前読んだことあるか？」

「いや、ない」

「っーか読めんのか？」

「読めるよ！ バカにしすぎだろ！」

「あーワリーワリー」

再びケンカが勃発しそうになって面倒くさくて適当に謝ったら、エルメスが笑い出した。

「二人とも仲良しだねー！」

このバカ！ どの辺が仲良しだ！ てめーの目と耳はちゃんと機能してんのか！ もう本当俺疲れるよ・・・何とかしろよこのバカを。まあ、笑ってるならいいけどよ。

「ちよつとミナ様、冗談キツイよ」

「はああ！？ ざけんな！ お前が言うなよ！ 俺のセリフなんだけどー！」

「いや、あたしのセリフだったの！ アンタこそぶざけんな！」

「本当仲良しだねー。知り合ったばっかなのに。なんか嫉妬しちゃう」

「はあ！？ バカじゃねーの！？ ちげーつつてんだろーが！ バカ！」

もう本当ヤダ。なんでエルメスわかってくんねーの？ なんでアイツはあんなにバカなの？ もう本当疲れる。マジでインド来てから以前より溜息倍増なんだけど。エルメスと出会う前に比べて4倍なんだけど。どうしよう俺。

もー！ アーサー！ アーサー頼むよ、助けてくれ。俺溜息つきすぎて酸欠で死んじゃう。

以上

FILE - 3 Chat 「お喋り」(後書き)

登場人物紹介

シヤンティ

インドの屋敷の女主人。かつてアーサーに拾われてそのことをとても感謝している。

エルメスとも仲良し。元盗賊団のリーダーだった為、若干ガラが悪い。

好きな言葉 臥薪嘗胆

クリシュナ

故人。アーサーの兄であり、エルメスの夫。先の戦争にて戦死。

人格者で博識で愛妻家というスーパーマン。

彼の思想はエルメスに多大な影響を与えた。

エルメスにとっては幸福の象徴そのものであり、尊敬の対象でもある。

FILE - 4 Cemetery 「墓地」

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセス

シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

女二人に騙されるわ、何もできないわで今日の俺は散々だ。

確かにエルメスは言ったんだよ。部屋は俺の自由にしていいって。シヤンティも確かに言ったんだよ。別室を用意するって。なのにまだ同室だよ。

「あ、カイ悪いな。満室だ。ウツカリしてた」

8合目まで登って突き落とされた気分だよ。ていうか本当は満室どころか俺とランスがエルメスと同室でギリギリなんだと。

「ていうか、一応一部屋空いてはいるけど使い物にならねんだよ」「あ？ なんてだよ？」

「その部屋からランスのベッド持ってきたし、まあそれだけならベッド買えば済むんだけど、ガラスは割れてるし壁も穴だらけで外壁

にまで穴が開いてるからな
「なんだそれ」

シャンティにとりあえずその部屋を見せてもらったら、マジでヒドイ有様だった。片付けすらしてねえし、なんだこれ。

「修理しろよ」

「いや、記念に取っところと思って」

「記念ってなんだよ！ 意味わかんねえんだけど！」

シャンティが訳わかんねえこと言うと思って突っかかったら、シャンティはエルメスに視線を流した。

つられてエルメスを見ると、何か知らんけど涙目。

「・・・どした？」

「ここ、クリシュナが使ってた部屋なの」

なるほど、それはわかったけど、なんでこんな荒れてんだか。でもその理由はすぐに分かった。

「実は結婚式の後にクリシュナ様の部屋で二次会したんだけどさー。そんな時に不倫疑惑が発覚して、ミナ様とアルカード様が大ゲンカ始めちゃったんだよ。で、この有様ってわけ」

ああ、なるほど。何やってんだよアーサー。手加減しろよ。いい加減にしろよ。アンタのせいで俺までとばっちり受けてんじゃねーか！ 勘弁しろよマジで！

「カイ、ごめんね。本当はカイにこの部屋を使ってもらったらいいんだけど、残しておいてほしいの。だから同室で我慢してくれる？」

出た、リーサルウェポン。たーのーむーかーらー、泣きそうな顔するな。なんだよこれは。新手的脅迫か？ 「YES」としか言いようがねえだろうが！ さてはコレもアーサーの躰の賜物だな！？ あまりにもアーサーが自己中すぎてエルメスは泣き落として言うスキルを得たわけだな！ いい迷惑だ、チクショー！

渋々OKの返事をして、というかどの道そうするしかねーし。結局同室のままってわけだ。

とりあえず寝起きドッキリの件に関しては、ランスが頑張ってくれているので俺は安心だ。アーサーも安心したろ。まあ3年も経てばわかんねーけどな。3年経ってランスが助けを求めてきても絶対助けてやんねえ。せいぜい苦しめばいい。大人の階段なめんなよ。ざまあみろ。

つーか3年経ったらエルメス30歳かよ。アラサーじゃねーか。なんて頼りねえアラサーだよ。まあ見た目はその半分くらいにしか見えねえけど。つーかアイツ19で吸血鬼化したって聞いたときはびっくりしたな。やつぱ東洋人つてのは幼く見えるもんだ。

それにしてもランスの趣味が良くわからん。もっと成長したら熟女萌えになるんじゃないか。いや、もしかしてアイツ未亡人萌え？ まあどうでもいいや。

そんな未亡人は今日もアーサーの棺の前で神曲を読んでる。もうそろそろ終わりそうだな。多分今頃ダンテはベアトリーチェに再会してるころだろう。

エルメスも、今まさにダンテと同じように地獄を旅してる。ダンテと違って水先案内人のヴィルギリウスもいない、広大で忌々しい地獄と煉獄をさまよってる。悪魔と亡者に追いつめられながら、アーサーと再会できる日を心待ちにしてるんだ。それがいつかもわからずに。それがどれほどの道のりかもわからずに。それがどれほどの苦悩かだけを知りながら。

そう思うと、本当にエルメスは辛い選択をしたと思う。いや、違うな。その選択をさせたのは俺だ。俺が引き留めてアーサーを待って言ったせいだ。アーサー、頼むから帰ってきてくれ。この選択が正しかったんだと、安心させてくれ。

じゃなきゃ、エルメスが可哀想だ。もしアーサーが帰ってこなかったら、エルメスは死ぬかもしれない。そうなったら俺も生きていく意味はない。エルメスはどれくらいなら待てるんだろう。時間がたつにつれて悲しみは薄れるかもしれないけど、それに比例して焦燥は大きくなると思う。

もしエルメスが待つことを挫折しそうになっても、何とか引き留めようとは思おう。でも、10年とかあまりにも時間がかかるようなら、さすがに俺も引き留め切れねえかもしれないねえ。その時は・・・どうするんだろうな、わかんねえ。

でも、俺はアイツと一緒に生きるって決めたから、もしアイツがどうしても待てなくて死にたいって言ったら、本当にどうしてもダ

メだっというなら、その時は、許せ。

許してくれ、許してやってくれ。

それほどまでにエルメスが追いつめられてしまったら、待ち続けることを正しいと言える自信はなくなると思うから。その時は、神に謀反を企てた罪人が凍りつく地獄の最下層・コキュートスの更に奥、イスカリオテのユダが堕ちた、第4圏ジュデッカで待つことにする。つーか結局待つんじゃないか。

けど、そこならジュリオ様もいそうだな。3人で氷漬けになりつつルシフェルに食われつつ待つとくわ。つーかダンテは恐ろしい世界を考えるもんだ。冷凍された上に悪魔に食われるってなんだよ。どんだけ裏切り者が嫌いなんだ、ダンテは。

ま、一応今の所信じてるけどな。エルメスが待ってるんだし。きつとエルメスはアーサーを裏切ることはないし、俺はエルメスを裏切らないから、待つことにする。

しかし、俺はいつの間にかこんな忠臣キャラになったんだ。正直なところ不思議で仕方がない。だって俺たちはさ、ジュリオ様にごっぴどく裏切られてるわけじゃん。ぶっちゃけ人間不信つーの？ハイハイどうせ裏切るんでしょ、みたいな。信用？なにそれ美味しいの？みたいな。

でも、不思議とエルメスが俺たちを裏切ることにはありえない気がする。アイツは別格だ。

まあ、そんな奴じゃなきゃ一緒に生きようなんて言わないわけだ

けど。多分、死神として活動している間に、エルメスに何度も助けられたからだろうな。エルメスがいつも身を挺して俺たちを守ってくれて、ガロードの命を救ってくれたから。信頼、依存と言ってもいい。ジュリオ様だってさすがにそこまではしなかった、いや違うな、できなかったのかもな。

エルメス、アイツは俺たちの“アイコン”だ。

アイツには言うなよ。調子乗るから。本当もうガロードに至っては女神の様に崇めてるからな。まあ命の恩人だし当然かもしれない。ちなみに俺はバカの象徴として崇めてるけど。崇めてることに変わりはない。そう言う事にしておけ。

今夜の空模様は大荒れだ。さつき停電になった。一時保存しといてよかったぜ。また書き直すのとか超面倒くせえしな。マメな俺、さすがだ。そんな天気なのに、俺がちょっと部屋から出た間にエルメスはいなくなっていた。

屋敷の中を探してみても見当たらないし、まさかと思って外に出てみたら、案の定いやがった。

屋敷の裏庭でバケツひっくり返したみてえな土砂降りの中、傘も差さずに座り込んでた。何してんのかと思って近づいてみたらエルメスの前に小さな石碑があって、摘んだばかりのような花が添えてあった。

エルメスがインドで祈りを捧げるような石碑の持ち主と言ったらクリシュナさんしかない。そうか、これはクリシュナさんの墓なんだな。そうか、だからアーサーはインドに行けと言ったのか。

この雨の中じゃ傘なんてクソの役にも立たねえ。足元はずぶ濡れだ。でも、エルメスに歩み寄って後ろから傘をさすと、エルメスは振り返らずに呟くように言った。

「クリシュナの、お墓なの」

「そうか」

「インドを出てから、今日初めてお墓参りなの」

「そうか」

「今まで、必要なかったから」

「・・・そうだな」

「でも、これからはお墓参り、しなくちゃいけない。ここで、クリシュナが眠ってるから。私が・・・来なかったら、クリシュナ、寂しがるから」

なんて言っていていいか、わからなかった。エルメスの頬を伝うのが雨なのか涙なのかも、俺にはわからない。

「エルメス・・・」

「違うよ」

泣いてるのか？ そう尋ねようと思ったたら遮られて、またエルメ

スは呟くように震える声で言った。

「・・・雨だよ」

肩と声を震わせながらそう呟くエルメスを見て、猛烈に、憎いと思った。なんで、なんで神はエルメスにこんな酷い仕打ちをするんだ。エルメスは何も悪くないのに。エルメスが何をしたって言うんだ。あんまりだ。エルメスが可哀想だ。なんでエルメスにこんな泣き方をさせるんだ！ 頼むから、声を上げて泣かせてやれよ！ 泣くことくらい許してやってくれよ！

吸血鬼よりも、悪魔よりも、神の方が余程酷い。神はエルメスを救わない。神はエルメスに辛い試練しか与えない。神なんか死んだ方がマシだ。アーサー、アンタもそう思うだろ？ でも、それ以上に酷いのは俺かもしれない。泣いているエルメスを前にしても、どうしたらいいのかわからなくて、ただ、立ち尽くしている俺の方が酷いかもしれない。

「友達が泣いているなら一緒に泣いてやるのが友達だ」

シャンティはそう言った。でも、俺は泣けない、泣き方なんか知らない。じゃあ、エルメスが泣けるようにするしかない。せめて、素直に泣けるようにしてやりたい。

最早、無用の長物になった傘はその場に捨てた。エルメスの隣に跪いて、頭を抱えて撫でてやると、少ししたら声を上げて泣きはじめた。

今は、これしかできない。でも、これでいいんだと思いたい。土砂降りの雨が鬱陶しい。早く晴れて欲しい。

早く以前のような、晴れた日の、太陽のようなエルメスの笑顔を見たい。それまで、俺はエルメスの泣ける場所になってやりたい、いや、ならなきゃいけない。

辛いなあ。俺は何回エルメスの泣き顔を見ればいいんだろう。

でも、一人では泣かせたくない。その方が辛い。エルメスも、俺も。せめて、泣きたい時に泣けるようにしてやりたい。そうすれば、笑いたい時に笑ってくれるかもしれないから。

エルメスが泣きたい時に泣かないのは、自分を責めているのかもしれない。自分のせいでみんなを失ったと思いついて、だから自分が泣いちゃいけないと思ってるのかもしれない。

それに、ここにはエルメスが安心して泣ける場所がないのかもしれない。そんな場所があるとしたら、アーサーだけだと思う。でも、アーサーはいない。

エルメスにとって、アーサーは師であり、父であり、主君であり、神であり、すべてだ。アーサーが居なければ、エルメスは生きてはいけない。

エルメスはそう思ってるし、事実そうだと思う。

俺には、アーサーの代理は勤まらない。それはわかってるけど、

でも俺が代わりにならなきゃいけない、そう決めた。

でも、俺は無力だ。何もできない、してやれない。どうしたらいいかが分からない。なんで俺にはわからないんだろう。今まで俺は何を見て、何を感じて生きてきたんだろう。こういう時に役に立たないことしか、俺は知らない。

いつそ、ジユリオ様が憎い。結局俺は人殺ししか知らない。俺はただの兵器だ。今までの事が、エルメスにとっては微塵も役に立たない。俺のこれまでの人生は、この一瞬で、すべてが無駄なんだとわかった。

だって、そうだろ？ エルメスを救ってやれない。俺はエルメスに忠誠を誓った。エルメスの役に立たないなら、価値はない。その考えは極端かもしれない、でも、そうなんだよ。

ああ、悔しい、悔しい。

もっと前からエルメスをちゃんと見ていればよかった。エルメスを取り巻く人たちをよく見ておくべきだった。もっとエルメスの話を聞いてやればよかった。俺は知らなさすぎる。

アーサー、アンタならこういう時はどうするんだろう。エルメスの為に何をすればいいんだ。俺にはかけてやる言葉も見つからない。なんて言えばエルメスが救われるのかが分からない。

俺には、エルメスが泣き止むのを待つことしかできない。何もで

きない自分が悔しい。俺は一体何のために傍にいるんだろう。

アーサー、俺はどうしたらいいんだ。教えてくれ。

エルメスを救えるのはアーサーしかないんだ。俺じゃダメなんだよ。

アーサー、お願いだ。早く帰ってきてくれよ。エルメスを、助けてくれ。

FILE・5 Crybaby 「泣き虫」

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

報告

連日愚痴で悪いと思ってたが、今日はちょっと良い報告だ。

この前の墓参りの日から、エルメスは少しだけ弱音を吐くようになった。今までアイツは辛いとか苦しいとか俺たちに直接言う事はなかったから、多分良い事なんだと思う。

あの墓参りの後、俺も考えてみた。俺はいつも文句はポンポン言うのに、よく考えてみたらそれ以外の事をほとんど言わない。だから、言った方がいいのかなって。例えそれが見当違いの事でも、エルメス pensando 思っ て味方になる奴がちゃんとい る ん だ っ て わ か っ て く れ

るならそれでいいと思った。

前にエルメスは言っていた。

「私自分のこととか話したのカルロが初めてだし、何でも言い合える人に出会えることってそんなにないと思うから、カルロの事大事な友達だって思ってるよ」

そう言ってもらった時にスゲー嬉しかったのを覚えてる。アイツは良くも悪くも思ったことを何でも口にする。でも、今は言わない。それなら、俺が話せばアイツも話すんじゃないかって言う安直な発想だけ。

今のエルメスはまさにダイヤだ。研磨されて擦り減っていく比重と比例して、輝きを増していく。でも、その輝きはなんとというか、儂い。刹那。それが俺は、悲しい。その悲しい輝きにみんな惹きつけられて、エルメスを心配せずにはいられない。

前はアイツの周りはなんだか明るくて、温かい感じがしたけど、今は違う。目を刺すような冷たい光だ。前のアイツが太陽であったなら、今は月。吸血鬼なのに太陽と揶揄すんのはどうかと思うけど、でも俺はそう思った。

今のアイツは月のようで、自分で光ることが出来ない。光が当たらないと輝かないダイヤも同じだ。当然だけど、まだエルメスの心は上手く歩けない。月みてえにグルグル回ってる。当然だけど、仕方ないけど、なんとかかしてやりたい。一刻も早く。

墓参りの時、泣き止んだエルメスが言った。

「カイ、ごめんね。いつも心配顔させちゃうね。ごめんね。もう大丈夫だよ」

俺は謝ってほしいわけじゃない。俺に気を遣って欲しくなんかない。俺の心配なんかしてほしくない。自分のことだけ考えていてくれたらいい。なのにエルメスは自分が悪いと思った。そんな風に思わせたかったわけじゃないのに。

きつと俺が何も言わなかったからだ。お前は何も悪くないよって言うてあげればよかったのに、言えなかった。俺が言っているのかわからなかった。

俺ともあろうものがこんな後悔をするとは思わなかった。カイ卿は“永遠の毒舌家”なのに口を開くの躊躇うなんて、とんだお笑い草だ。らしくねえ。自分に腹が立つたっつーのもあるけど、なんかいてもたってもいられなくて速攻エルメスのところに行った。

エルメスはシュヴァリエの奴らとシャンティファミリーの奴らと、とにかくみんなでリビングでテレビを見てた。本当は二人の方が話しやすいけど、みんながいた方が俺がしくじった時にフォローが入るだろうと思って、そのままテレビを消してやっただけ振り向いて怒り出した。

「ああー！ 私のマハラジャ・ナイト24！ この司会の人面白

いのに！ 楽しみにしてるのに！」

エルメスの楽しみを奪ってしまったことにちよつとだけ躊躇したけど、そのままリモコンを握り潰した。

「ミナ、テレビよりも俺の話を聞け」

「ええ？ なに？ ていうか今はエルメスだよ」

「俺は作られたエルメスと話をしたいんじゃない。本当のミナと話をしたい」

「・・・どうしたの？」

「ミナ、お前は自分のせいだと思ってんのか？」

俺の言葉にエルメスは困ったようにして俯いた。どうやら正解だったらしい。

「クライドさんとボニーさんが行方不明なことも、ミラーカさんとクリシュナさんと北都とアーサーが消滅したことも、お前は自分のせいだと思ってるのか？ ジュリオ様が裏切って攻撃してきたことも、俺がジュリオ様を殺したことも、自分のせいだと思ってるのか？」

畳み掛けるように質問しても、エルメスは俯いたまま答えようとしない。

「ミナ、答えろ」

ちょっと厳しいかと思っただけど、逆に普段通りの方がいいと思っただ。むしろ怒らせた方が饒舌になるかもしれねえって言う目論見もあっただけど。すると、俺の作戦は功を奏した。

「だって、私が誘拐されたせいでジュリオさんを城に入れちゃったんだよ。私がしつかりしてなかったから、ジュリオさんの苦しみに気付いてあげられなかったから、戦いをさせちゃったんだよ。私が強くなかったから北都も消えちゃったんだよ。私が・・・私のせいで！ 私を守ってミラーカさんとクリシユナは死んじゃったの！ アーサーさんは消えちゃったの！ 私のせいでカイにジュリオさんを殺させちゃったんじゃない！ ジュリオさんはカイのお父さんなの！ 私が・・・全部私の・・・なんで、なんで私が生きてるの！」

一息に叫んで、エルメスは泣き出した。あーあ、俺泣かしちゃった。アーサー怒らないでよ、わざとじゃねえから。必要悪だから。一つ溜息を吐いて、エルメスの涙を拭いた。

「ミナ、俺を見る」

エルメスはゆっくり顔を上げて、目が合ったのを確認して、作戦を実行に移した。

「お前はどうしようもねえバカだな。お前は激しく勘違いしてる。それを俺が正してやるからよく聞け。いいか、まず誘拐についてだけど、誘拐されたのはお前だ。お前は被害者だ。自分で言っただ

る、とぼつちりだつて。お前は被害者だ。お前は何も悪くねえ」

「でも、私が・・・」

「でもじゃねえ。悪いのはジュリオ様だ。お前は何も悪くない。大体、ジュリオ様が城に行くつて言った時、お前反対しただろ。ちなみに俺も反対したしな。アーサーの気持ちを利用して、それを押し通したのはジュリオ様だ。お前は悪くない。お前が悪いなら銀行強盗に遭つた銀行も悪いつてことになる。それは違うだろ？」

「・・・うん」

「お前は悪くない。わかつたか？」

「うん」

「じゃ次。お前がジュリオ様の気持ちに気付かなかつたから戦争が起きたんじゃない。あの人はお前と出会つたその日には既に襲撃を計画してた。ジュリオ様がずっと“ミナ”を忘れられなかつたから戦争が起きた。お前は“ミナ”じゃねえだろ。別人だ。違うか？」

「・・・違わない」

「コレも悪いのはジュリオ様だ。あの人が弱かつたから悪いんだ。あの人が“ミナ”を忘れられなかつたせいだ。忘れようとしなかつたせいだ。あの人は死ぬ間際まで“ミナ”に囚われた。それほどの妄執を他人がどうこうできるはずがない。あの人自身にできないんだから当然だ。お前の意志も誰の意志も届かない次元にあつたんだ。お前がしっかりしてようがしてなからうが関係ねえ。あの戦争は、ジュリオ様の妄執が引き起こした。わかるな？」

「うん」

「それと、これが一番大事だけど、クライドさんとボニーさんが行方不明なのと、みんなが死んだのはお前のせいじゃねえ」

「でも、私が弱かつたからだよ」

「なんでお前が弱いとお前のせいなんだよ」

「私が弱かつたから、守つてあげられなくて殺されたんだもん」

「殺したのは誰だよ」

「・・・ジュリオさん」

「じゃあ悪いのはジュリオ様だな」

「・・・でも」

「でもじゃねーの！　じゃあお前が殺したのかよ」

「違うけど・・・」

「じゃあお前は何も悪くねえよな」

「・・・」

「お前のせいじゃねえ。ミラーカさんが言っただけだ。それが自分の使命なんだって。彼女は自分の使命を果たしただけだ。クリシユナさんと北都はお前を守って責任を全うしただけだ。愛する人を守りたいと思うのは当たり前だ。それをお前が讃えてやらなくてどーすんだよ。お前が自分の責任だと思ってる内は、ミラーカさんもクリシユナさんも北都も浮かばねえだろ。お前を守って死んでいった人たちに感謝こそしても、懺悔や謝罪をするな。わかったな」

「わかった」

「それと、まあ正直俺の事はどうでもいいんだけど」

「よくないよ！　カイはジュリオさんの事大好きだったじゃない！」

「まーな。俺はあの人を信頼してたし、尊敬もしてたけど」

「なのに、私のせいだ・・・」

「あんなー、お前のせいじゃねえよ。お前の為ではあるけどな。つ

ーかそもそも、教皇の命令だったし。でもそれ以上に俺の為だ」

「カイの為？」

「そーだよ。単純なことだ。お前とジュリオ様を天秤にかけて、どつちが俺にとって重要だったのか、それだけだ」

「でも・・・」

「でもじゃねえつつつてんだろ！　これに関してでもは許さねえぞ！　俺がそうだって言うんだからそうなんだよ！」

「でも、だって！ カイがジュリオさんを殺したのは呪いの連鎖を止める為でしょ！」

「言い方変えてんじゃねえよ。まあ勿論それもあるけど、それは正直付録だ」

「じゃあ、なに？」

「お前を殺したくなかった。死なれんのがヤだったから」

「なんで？」

「なんで！？　なんで・・・なんで？」

予期せぬ質問に思わずシャンティに振り向くと溜息を吐かれた。こいつに溜息つかれると異常にムカつく。

「友達だからだろ」

「あ、そうだな、それだ。友達だからに決まってるんだろ！　わかったか！」

「・・・なんか釈然としないんだけど」

「なんでだよ！　俺がそうだったついたらそうなんだよ！」

「シャンティが言ったんじゃない」

「うるせえ！　意見としては同じだ！　要するに、俺の都合なの！

お前に生きててほしかったからジュリオ様を殺したってのが実は8割くらい占めてんの！　だからお前は何も気負う必要はねえ！

わかったか！」

「・・・わかった」

「えーと、後はなんでお前が生きてんのか。バカじゃねーの。なんだそれ」

「バカじゃないもん！　だって、みんないなくなったのに私だけの

うのうと生きてるなんて許されない気がするんだもん」

「ハア、バカ。お前はのうのうとは生きてない。あの日からずっとお前は悩んで苦しんで生きてる。ずっとアーサーを待ってる。お前が一番苦しいのに、俺達にまで気を遣ってる。それでのうのうと生きてるってんなら、世の中の大半の奴は生きる価値はねえ」

「でも、クリシュナも北都もミラーカさんも、アーサーさんもいなくなっただのに・・・」

「そうだな。で、誰か一人でもお前に死ねつつったか？」
「言わない」

「てことは生きてるって事だろ。大体消えた人達はみんなお前に生きててほしかつたから、その身を賭してでもお前を守ったんだぞ。それなのに生きてるのが許されないなんて、じゃあ何のためにお前を守ったのかってことになるだろ。それは逆に申し訳ないと思わねえか？」

「・・・」
「お前は何も悪くない。お前は十分苦しんだ。お前は生きていい。生きる価値がある。それはここに居る全員が保証する。俺たちはお前と一生一緒に生きてるって誓っただろ。その誓いをお前は破るのか？」

「そうじゃないけど・・・」

「ハア。お前はさ、アーサーと約束したんだろ。アーサーの為に生きてアーサーの為に死ぬって。その誓いも破る気か？」

「破らないよ！」

「じゃあ生きるよ。お前が前に言ってただろ。誰かが生きててほしいと願っているうちは死んじやだめなんだって。俺も、コイツらも死んでいった人たちも、大勢の奴らがお前に生きててほしいと願ってる。生きてるのが許されないなんて二度と考えるな」

「・・・うん」

「要するに、総合するとお前は一つも悪くねえって事だ。わかった

な？」

「わかった」

「本当に？」

「うん」

「ミナ、お前は何にも悪くねえよ。お前のせいじゃねえ。お前が辛
いって言っても泣いても笑っても誰も怒ったりしねえよ。ここには
お前の味方しかいない。もう我慢すんなよ。誰にでもいくらでも頼
つていい、甘えていいんだぞ。大抵の事なら我儘も聞いてやるし、
ずっと傍にいてやるから。だからお前一人で何でも背負い込むな。
みんな、お前を本当に大事に思ってたんだから。その事をちゃんとわ
かってくれ。俺らを信じてくれ。頼ってくれよ、な？」

「・・・うん、カイ、ありがとう」

またしても泣き出したエルメスは、ちよつとだけ前のエルメスに
戻った気がした。とりあえず、理詰め&洗脳作戦第一段階はクリア
だ。この調子で毎日言ってる。

「ミナ、俺たちがお前を心配するのをお前が気にする必要はねえん
だからな。俺らが勝手に心配したくてしてんだから。俺らは好きで
やってんの。だから謝んな」

「う、うん」

「なんかあつたら誰でもいいから捕まえて話せ。その為に俺らは傍
にいるんだからな」

「うん」

「俺たちは絶対にお前を裏切らないから、信用してくれ」

「うん」

「ミナ、俺たちはみんなお前の味方だから。お前と一緒に生きてっ
て誓っただろ。俺は・・・いや。とにかく、わかったな」

「う？ うん。俺は、なに？」

「なんでもねえ」

「気になるよ」

「気にすんな」

「気になる！」

「うるせえ」

「きーになーるー！」

「うるせえつつつてんだろ！」

うつかり口を滑らせたせいでエライ食いつきよつだ。どうしよう、
うぜえ、叩きてえ。でも今は我慢だ。耐えろ、俺。

しかし、どうしよう。言いたくねえ。でも言った方がいいんだろ
うか、いや言いたくねえ。俺絶対恥かくし。でも、もし言ってエル
メスが元気になるならちよつとくらい恥かいてもいいか、そう思っ
た。

「ハア、いいか。一回しか言わねえ。二度と言わねえからな」

「うん」

「俺はお前が大好きだよ。お前を大事な友達だと思ってる。大事な
家族だと思ってる。お前が居なきゃ俺は生きていたくない。お前に
とつてのアーサーがそうであるように、俺に、俺たちにとってお前
がすべてだ。俺は、世界で一番お前が大事だ。だから、えーと、あ
ー・・・まあそういうことだ」

なんとか頑張った言ったら、エルメスはキョトン顔してる。周りの奴らがクスクス笑ってる。キルシュに至っては指さして笑ってる。チクショー、アイツ後で撃つ。

クソ、やっぱり恥かいた。頼むから俺のこの恥に見合うリアクションをしてくれ、と思ってたなら、エルメスは突然泣き出した。

アレ、なんで？　なんで泣くの？　って内心パニックに近いくらい慌てたらエルメスが抱き着いてきた。

「ありがとう、すごく嬉しい。私もカイが大好きだよ。私もカイは大事な家族だって思ってるよ。カイ達が居なかつたら生きてたくない、生きてられないよ。傍にいてくれて、本当にありがとう」

どうやら喜んで頂けたようだ。なんとか俺の恥に見合う反応を戴けて超安心した。エルメスの頭を撫でてたら、思った。俺はスゲー頑張った言っただけ、コイツは普通に言えるんだなって。

俺は嬉しかったし、エルメスも嬉しいって言ってくれた。エルメスが喜んでくれるなら、俺ももうちょっと頑張って、普通に言える努力を試みようと思った。

でも、もう二度と人前で言わねえ。アイツらのリアクションが心底ムカつく。あークソ、リオの奴いつまで笑ってんだコノヤロー。アイツも撃つ。

どうでもいいけど、コイツ腕力強ええ。さすがアーサーの眷属だ。

苦しい。え、プロレスじゃねえよな。どうしよう、突き飛ばしていい？ いやでも我慢だ、耐える、俺。とか思ってたら、急にエルメスが離れるもんだから何故か知らんがむせた。

「どうしたの？ 大丈夫？」

「・・・なんでもねえ。つーかまあ、兎に角そう言う事だ。家族なんだから言いたいこと言っついていいんだぞ。それが普通だろ。もう一人で悩むなよ。わかったな」

「うん、わかった！ ありがと！」

そう言っつて笑ったエルメスの顔は太陽みたいだった。少しだけ状況は好転したようだ。話が終わった後にガロードが話しかけてきた。

「何となく今まで副長とエルメスの関係をうまく形容する言葉って見つからなかったんだけど、今日の話聞いてしっくりくるのを見つけたよ」

「あ？ なに？」

「兄妹、これが一番合ってる気がする。確実に友達以上で恋人以上に信頼してる関係なんて、兄妹しかないじゃん」

それを聞いた全員が「それだ！」って満場一致で納得してた。なんか、俺的にもしっくりきた。エルメスは俺の家族、妹。思わず納得。道理で手間がかかる。道理で保護者のような気分にもなるわけだ。でも、妹なら手間をかけて、保護して当然。

このままエルメスが元気を取り戻して、穏やかにアーサーを待て

るようになればいいなと思う。アーサーが帰って来た時に、前のエ
ルメスみたいな笑顔で迎えてやれたらいい。そうなるように、俺も
頑張ります。

以上

FILE - 5 Crybaby 「泣き虫」(後書き)

登場人物紹介

ミラーカ

故人。アーサーの親友。先の戦争にて戦死。
アーサーとエルメスを守るため魂を引き替えに二人を守った。
最後まで二人を愛し死んでいった非業の美女。
エルメス以上にアーサーの理解者で、苦楽を共にした竹馬の友。

北都

故人。エルメスの弟。先の戦争にて戦死。
極度のシスコンでアーサーにすら牙をむくほどの狂犬。
クリシュナだけは仲良し。
最後まで姉と共に戦い、励まし奮起させた強い子。

ボニー&クライド

アーサーの支配下の吸血鬼カップル。眷属ではない。
先の戦争から行方不明。戦争当日に拳式予定だった。
ボニーの好きな言葉 永世中立
クライドの好きな言葉 行雲流水

LETTER 1 Cai 「カイ」

拝啓 アーサーさん

初めてお手紙書きます。なんだかわからないけど、急にアーサーさんにお手紙を書きたくなりました。

アーサーさん、あなたが消えた後、今日まで色々ありました。今はカイ達とシャンティの所にいます。あ、カイっていうのはカルロの事です。今は私もエルメスって名乗ってるんですけど。あ、ていうか勝手にアーサーって名前変えてごめんなさい。

アーサーさんが居なくなっただ後、私はジュリオさんを殺そうとしました。ジュリオさんが心の底から憎くて、彼をこの世から欠片も残さず消滅させてやろうと思いました。

でも、カイがジュリオさんを殺しました。私がジュリオさんを殺したら、カイが私を殺さなきゃいけないからって。今になって思うと本当にその通りで、“ミナ”の呪いの連鎖を止めようと思ってたのに、また自分で新しく呪いの連鎖を繋げようとしてたって気付いて悲しくなりました。

私は本当にバカです。どうしようもないくらいです。今日カイに言われました。お前は悪くないって。そう言われるまで、私は全部自分が悪いんだって思っていました。今でもちよっと自責の念はあります。でも、私に味方してくれる人がいっぱいいるんだってわかって、早く元気にならなきゃって思いました。

今日、カイに言ってもらったことを思い出してたら、クリシユナが殺された時の事を思い出しました。今日カイが言ってくれたようなことを、私はアーサーさんに言ったなあって。シャンティの時もそうだったなあって。

どうしてでしょうね。人にはそういう風に言えるのに自分の身にそういうことが降りかかってくると、言われるまで気付きもしないんです。本当バカみたいですよ。

だけど、そう言ってもらわなかったら今こんな風に思えませんでした。本当にカイやランスやガロード、シャンティ、みんなのお陰です。私本当にみんなが居なきゃ生きていけません。みんなのお陰で生きてます。みんなのお陰でアーサーさんを待てます。

あの日、私は全てを失いました。でも、その代り新しく家族が出来ました。すごく悲しいけど、でも私は幸せ者です。

だけど、すべてを失ったのは私だけじゃありません。カイだって大事なものをたくさん失いました。カイはジュリオさんを殺してしまいました。自分の都合だって言ってたけど、きっと今でも後悔してるんじゃないかなって思います。

だって、カイは本当にジュリオさんが好きだったんですよ。ジュリオさんを撃つた時のカイの顔が忘れられません。凄く苦しそうで、今にも泣きそうで、このまま自殺しちゃうんじゃないかって思うくらい、辛そうでした。

ジュリオさんが砂になって死んだ後、ごめんなさい、ごめんなさい

いって何度も謝ってたんです。

それなのに、俺の事はどうでもいいっていうんです。私の為に力はいつとも一生懸命です。カイにはいつもたくさん迷惑かけて、すごく気を遣わせてしまいます。私はもう今は前みたいにできません。もう少し時間が経たなきゃ無理です。

カイはジュリオさんを失いました。ヴァチカンを失いました。今までの人生を壊されました。信頼を裏切られました。大事にしていたものをたくさん失いました。

だからでしょうか。今カイが取り戻せるものは何もありません。だから私だけでも元に戻そうって頑張ってくれてるのかもしれない。それは私にとってすごく嬉しいけど、同時にとても悲しい。

カイはあの時、ジュリオさんを撃つた後、死んでしまったかっただと思います。カイにとってジュリオさんは全てでした。私がアーサーさんを殺すようなものです。もし、私がカイと同じだったら、誰がなんて言っても絶対死んでいると思います。カイみたいに踏みとどまって、私まで引き留めるようなことは、私にはできません。とてもじゃないけど、できません。

カイはすごく強い人だと思います。きつとすごく罪悪に苛まれていると思うんです。きつとすごく苦しいはずなんです。それなのに、私とアーサーさんの為に、私に生きると言いました。私とアーサーさんの為に一緒に生きるって言いました。

アーサーさんが待ってって言うんだからちゃんと待ってるって言いました。一緒に待っててやるからって言うてくれました。お前を一人にはしないからって言うてくれました。

カイがそう言うてくれるから、私は待つことが出来ます。でも、カイはカイですごく苦しいはずなのに、いつも私の為に気を遣って私の為に苦しそうな顔をしています。今のカイは私の為に生きてます。私のせいで、生きてます。

それが良い事なのか、悪い事なのか、よくわかりません。

アーサーさん、私は災厄のような女でしょうか。今、私は決して幸せだとは言えません。私の周りの人たちも、幸せだとは思えません。カイはただでさえ苦しいのに、私のせいで余計に苦しんでいます。私は災厄なのでしょうが。

今私の周りにいる人たちは、みんな私を心配してくれています。心配させてしまっています。カイは好きでやってるんだから気にするなって言います。そんなこと言われても気にしちゃいます。そうでしょ？

だけど、心配かけるのが嫌ならしつかりしろよって話ですよ。まあ、そう言う風に思えるのもカイ達のお陰なんですけど。

今日の事で、クリシュナの言葉を思い出しました。何もかも背負っていつまでも苦しいって言ってちゃだめだよって。理不尽は存在して当然だって、できることを考えなさいって。

本当にその通りだなって思います。こんな酷い理不尽がこの世に存在するのかと、今でも恐ろしく思います。だけど、アーサーさんは怒るかもしれないけど、私はジュリオさんを許してあげられたらいいなって思ってます。

ジュリオさんを恨んでしまつたら、100年の呪いは更に100年続くのでしょうか。それだけは、避けたいんです。呪いを絶とうとしてくれたカイの為にも、呪いを生んだことを後悔していたアーサーさんの為にも、自分の為にも。

私、前にクリシュナに言われて思ったんです。クリシュナの様になりたいなって。彼は現実主義者でした。強く優しい人でした。どうしようもないことを、いつまでもクヨクヨ考えているような人ではありませんでした。自分の為に、自分が大事に思う人の為に、いっつもできることを考えて、できることをする人でした。

今の私にできることは、みんなの思いに応えられるようにすることだと思います。カイもみんなも、私の為に一生懸命になって励ましてくれたり心配してくれたりしてます。でも、いつまでも心配がけたくないし、これ以上カイに苦しんでほしくないから。

だからって、無理に明るくふるまうのも違うかなって思いました。多分それも見抜かれちゃってるんでしょうし。だから、泣きたい時に泣く努力をしてみます。

アーサーさんに前に言いましたよね。泣きたい時に泣けるのも強さだって。自分で言っというて忘れてるんだから本当私バカです。

とりあえず、あんまり考えないように頑張ろうって思います。ミラーカさんとクリシユナと北都はもう、戻って来ません。その事を考えるだけで、胸が苦しいです。だけど、今更どうしようもありません。後悔しても仕方がないんです。後悔して戻ってくるわけじゃないから。

カイに言われました。私を守って死んでいった人たちの為に、感謝はしても謝罪や懺悔をするなって。本当、そうだなって思いました。私のしていたことは彼らに対する冒涇でした。自分を恥ずかしく思いました。

だから、これからは彼らの死を悼んで、彼らに出会えたことを感謝して生きて行けるように頑張るつもりです。本当はすごく辛いけど、自信ないけど、でもその方がやっぱりいいと思うし、そうすれば彼らはずっと私の心の中で笑ってくれると思うんです。

今、私がこんな風に思えるようになったのは、カイやみんなが支えてくれるおかげです。本当に頭が上がリません。

カイは言いました。私が世界で一番大事だと。大事な家族だと。その言葉で、私の苦しみの世界は一気に壊れました。

あれほど自分を責めていたのに、誰かに必要とされていることがわかっただけで、赦されたような気がしました。本当に心の底から嬉しかった。そう言う風に思ってくれる人がこの世に存在することが死ぬほど嬉しかった。涙が出るほど嬉しかった。ていうか、泣きましたけど。そりゃ泣きますよ。泣くでしょ、普通に。

カイはまるでヴィルギリウスのように私を地獄から導いてくれます。

私は地獄をさまようダンテです。地獄の悪魔と亡者に怯えて、迷って、泣きながら出口を探す憐れな吸血鬼です。今日の事がなかったら、地獄の恐ろしさに目を閉じて耳を塞いで、隣で導いてくれるヴィルギリウスの存在にさえ気づかなかったかもしれない。

カイは私の道標です。彼が居なかったら生きていけません。きっと、ずっと地獄から出ることが出来ないでしょう。だけど、カイがいてくれるなら、いつか地獄から抜け出して、煉獄を上って、ベアトリーチェに会えると思うんです。

アーサーさん、早くあなたに会いたい。アーサーさんのいない世界はとても怖くて寂しいです。アーサーさんに会って、その声を聴きたい。色んなことを話して、笑って、怒ってほしいです。

でも、その時に私も前の私に戻っていられるように頑張ります。今のままの私でアーサーさんに会うのは、アーサーさんに申し訳が立ちません。

アーサーさんはきつと、私が生きているかどうか分からずに不安だと思えます。状況もわからずに今頃苦しんでいるんじゃないかと心配です。だから、帰って来た時に安心できるように、あなたの居場所はどこにちゃんとあるんだとわかってもらえるように、私とみんなで、笑顔でお帰りって言います。

ずっと、ずっと、待ってます。あなたが約束を破ったことはないから、ずっと信じて待ってます。

だから、私が笑顔でお帰りって言ったら、ただいまって笑ってください。

また、何かあったらお手紙書きます。でも、デスクの引き出しがいっぱいになる前に帰ってきてくださいね。待ってますから。

敬具

FILE 6 Change 「気分転換」

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

明けましておめでとう。今年もよろしく。つかランスに言われるまで忘れてた。もう正月じゃん。ていうか、コイツら正月らしいこと一切しねえの。

79

「あたしらスラム育ちだし？」

「どうでもいいよな」

「わかんねえし」

「ていうか、仕事忙しいし」

こついうところは共感できるな。実をいうと俺もイベントとか大嫌い。面倒くせえもん。実は世の中で一番嫌いなイベントがクリスマスだったりする。あの浮かれっぷりが腹立つ。

去年戦争まで起きたせいでより嫌いになった。クリスマス死ぬ。キリストもう起きてくんない。てめえの誕生日なんざどーでもいいんだ。知ったこつちやねえ。

正月なんてどうでもよくて、仕事が忙しいシャンティ達は今日も仕事だったみてえだ。つーか、言うの忘れてたんだけど、シャンティあれで社長だ。部下は今んとこ身内だけらしいけど。何やってるかっつーと人材派遣会社なんだと。

なんで人材派遣かって言うと、ここでまたアーサーが絡んできやがる。

アーサーは自分たちを拾って人並みの仕事を与えてくれた。誰だってその機会さえあれば、才能のある奴だっているし、誰かの役に立てる。特にスラムの奴らなんてその最たる例だ。仕事ができないわけじゃない。機会がないからできない。仕事がないからできない。

だからいずれもつと会社をデカくして、そういう奴らに働く場所と、能力とやる気を生かせる場所を提供したいんだと。アーサーがそうしてくれたようにな。

そう言うのを考えると、アーサーってさあ、蒔いたのって呪いの種だけじゃないんじゃないかねえの。良い方の奴も蒔いてんじゃない。まあ、それをシャンティたちがこれからどう育てるかっつのが課題だけど、なんとかなんだろ。

シャンティからその話聞いてエルメスは嬉しそうにしてたぞ。いねえのに言ばせられるってなんだよ。もう、なんなんだよ。なんか腹立つ。別にいいけどよ。

そつからまた話が正月の事に戻ったんだけど、正月だったのに実は俺らは密かに頭を抱えてた。

血のストックが底を尽きかけてた。以前は餌なんて喰いきれない程に手に入ってたから、ぶっちゃけ余裕ぶっこいてたっつーか、現実ナメてた。

その辺の奴殺して持ってこようかとも考えたが、それじゃシャンティ達に迷惑がかかるだろうし、今妙な騒ぎを起こしたら逃げた意味ねえしな。

本来なら心配かけんのが嫌だったんだけど、手に詰まったもんだから、エルメスに相談することにした。

「うーん、私達が前にインドにいた時の入手先って、病院か大学の医学部から輸血用とかを盗んでただけど」

「大学？」

「そう。クリシュナが大学にいたから」

「吸血鬼なのに大学生!？」

「ううん、博士。准教授」

「マジか」

吸血鬼に戸籍がある意味もよくわかんなかったけど、人格者でしかもインテリってクリシュナさんはどんだけスーパーマンだよ。よくエルメス相手にしてこれたな。

いや、もしかすると、だからこそバカなエルメスに惹かれたのか？ 想像を絶するバカっぷりが面白かったとかならまだ納得できるけど。

いや、今はそれはいいとして、病院は盲点だったな。

「なるほどな。じゃあ今夜あたり盗みに行くわ」

「私も行く!」

「いや、お前は留守番してろ」

「なんで?」

「お前連れて行くと必ずと言っていいほど不測の事態が起きるから。最早そのこと自体は不測じゃねえ」

エルメスはブーブー言ってたけど、シュヴァリエ全員が俺に着いたもんだから諦めたようだ。

シャンティにデケエ病院の場所を聞いて、俺とガルフとリオとベディとで行くことになった。他の奴はエルメスと留守番だ。

「カイ、誰かに見つかったても殺しちゃダメだよ?」

「言われなくてもわかってますが」

「隠密行動の時は慎重にね?」

「だから言われなくてもわかってますが」

「好き嫌いしちゃうダメだよ? でもAB型は数が少ないから取って来ちゃダメだからね?」

「だから言われなくてもわかってるっつってんだろーが！」
「もう、すぐ怒るんだから。ベディ、ナスさん見つけてもついで
つちゃダメだからね？」
「な！ ちよつと待って！ なんでエルメスが知ってんの！？」
「あ、ワリ、俺が教えた」
「なんで副長は変なところで口が軽いんだよ！」
「ハハハハハハ」
「また笑って誤魔化す！」

そう言うわけで、俺ら4人でプラプラ歩きながら病院に向かった。
車で行ってナンバー控えられたりしたらダリーし。走りゃ車よりは
ええし。

ガルフ「なんかこういうの久しぶりじゃね？」
ベディ「しかも盗みに入るだけって超平和じゃね？」
リオ「つか手ブラとか初じゃね？」
ガルフ「つかクーラーボックスとか持ってこなくてよかったわけ？」
俺「あ、忘れてた。戻んの面倒くせえから途中で買ってたか」
ベディ「はあ？ 今何時だと思っただよ」
俺「知らね。じゃあそれも病院で盗みゃいいだろ」

正月ボケしてるだのなんだの文句を言われたが、帰りの短時間で
腐るわけねえだろっつって結局そのまま病院に着いた。で、やっぱり
病院に潜入ついたらコレだろ。

俺「俺超カッコよくな？ 超似合っただろ？」
リオ「似合いすぎて逆に怖ええ」

ガルフ「マッドサイエンティストにしか見えねえ」

ベディ「コレ持って帰っていいかな」

俺「実用の機会ねえだろ。つか、どんだけお医者さんゴッコやりてえんだ、てめーは。いつそ引くわ」

ベディ「うるせーな！」

俺「てめーがな」

素敵に白衣を着こなした俺らは、無線を繋いで散開してそれぞれ血を探しに行った。しばらくウロチヨロしてそれっぽい部屋を見つけたらビンゴ。早速血を持って部屋から出ようとしたら、ガルフから無線が入った。

ガルフ「お、俺どうしよう」

俺「あ？ どした？ 今どこだ？」

ガルフ「西棟の壁に掴まってる」

俺「は？」

勿論無線はみんな聞こえてたから、ソッコー外に出て西棟に行ったら4階の壁にガルフがぶら下がってた。なにやってんのアイツ。つかウケるんだけど。

俺「ギャハハハ！ お前何やってんの！」

リオ「何それ？ 楽しい？」

ガルフ「笑い事じゃねえんだって。助けるよ！」

ベディ「飛び降りりゃいいじゃん」

ガルフ「・・・それもそうだな」

結局ガルフだけ成果を得られなかったんだけど、結構収穫はあったからそのまま帰りながら何があったのか聞いてみた。

「入った部屋自体は良かったんだよ。準備室みてーなき。で、血を探してたら人が入って来たから、慌てて外に出て隠れてたわけよ。で、いつまで待っても出ていかねえから何してんだろと思ったたら、医者とナースがイチヤツついてやがった」

白衣4人組が深夜のスラムで大爆笑だよ。そしてそれを羨ましがるベデイ。だからお前どんだけだよ。つーか、エルメスイなくても不測の事態起きてんじゃねえか。もしかしてトラブルメーカーって感染症か？

ヒーハー笑いながら屋敷に着いたら、そのままの格好で帰ったの忘れててコスプレだのなんだの笑われた。

「似合うだろ？」

「似合ってるけど、金髪メガネで白衣つて3つもクリシュナと共通点あるのに、どうしてカイはそんなに邪悪なの？」

「てめー、クリシュナさんと比較してんじゃねえよ。あの人と比較されたら大概の奴は邪悪だろ」

「他の3人はカイほど邪悪じゃないよ」

「うるせえ」

結局屋敷に帰ってからマッドサイエンティスト呼ばわりされたんだが、思いついてエルメスに白衣を着せてみた。

「似合わなさすぎる」

「そんなことないよ。保健室の先生くらいには見えるよ」

「どのへんが？ 袖余ってるし、なんか親父のシャツ着たガキみてえ」

「せめて大人にしてよ！」

「じゃあスゲエ間抜けな助手」

「間抜けは余計！」

「いや、不可欠」

エルメスはキーキー言ってたが、他の奴らは「あー」つつて納得してた。コレとっというてアーサー帰って来た時にも見せてやる。

あーでも、なんか今日は久々笑ったなー。結構楽に血も手に入っ
たし、ずっとこんな感じで毎日楽しけりゃな。なんかいい気分転換
になった。俺だけ気分転換するのも悪いし、次はエルメスも連れて
行ってやるか。つーかたまには外に連れ出してやんねーとな。

「じゃあ、その時私はナースさんだね！」

「お前にだけは看護されたくねえな」

言いながら思わずベディを見たら、なんか打ちのめされてた。何

を想像してんだ、何を。なんかバカばっかりだな。まさかバカも感
染症か？

いかにも間抜けそうなナースエルメスはアーサーに献上してやる。
楽しみにしてる。

以上

FILE 6 Change 「気分転換」(後書き)

登場人物紹介

ガウエイン(ガルフ)旧:クリステイアーノ
シュヴァリエの一人。カイの副官的存在な人。
頭も性格も割といいのに苦勞人。
好きな言葉 初志貫徹

リオ(ライオネル)旧:アレクサンドル
シュヴァリエの一人で、チャラ男3兄弟の一人。
とにかくチャライ。ウソや詐欺が得意な人を騙すプロ。
好きな言葉 自由闊達

ベディ(ベドウィル)旧:ヨハン
シュヴァリエの一人。チャラ男3兄弟を抑止する人。
止められた試しはない。結構真面目な奴。武器萌えで制服萌え。
好きな言葉 質実剛健

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

今日早速エルメスを外に連れてってやったんだが、なんかスゲー疲れた。今度は別の奴に付き合わせる。もう俺は一緒に出歩きたくなえ。

「なあエルメス、今日どっか行かねえ？」

「どこかって？」

「どこかだよ」

「……行かない」

序盤からエルメスにフラれた俺にみんなは大爆笑だよ。いきなり可哀想な俺。まあ、ノープランな俺も悪いけど。つーか本当はどこかなんてどうでもいいんだけど。

「うるせえ。俺が行くつつたら行くんだよ。さつさと支度しろ」
「横暴！ ていうか、カイが行きたいところあるんでしょ？ どこに行きたいの？」

「別に」

「別について・・・意味わかんないよ。行きたいの？ 行きたくないの？ どっち？」

「むしろお前一人でいいから出かけてこい」

「全然意味わかんないよ！？」

「うるせえ、さつさと支度しろ・・・ああ、もうそのままでもいいや、面倒くせえ」

「え！？ ちょ、うあー！」

で、無理やりエルメスを連れ出したんだが、さすがにノープランだ。さて、どうしようと考えてたら、気付いたら後ろからついてきてたはずのエルメスがいねえ。早速迷子。

あーマジかよ。屋敷出てまだ10分だぞ、ありえねー。渋々来た道に戻ったら、アイツ、スラムの孤児に捕まってた。

「ごめんね、お金持ってる人とはぐれちゃって何も持ってないの」

俺は金ヅルか。飛び蹴りしたい衝動を何とか抑えて、エルメス引き摺ってスラムを抜けたところでアイツが離せって暴れるから離してやった。

「もう！ 扱いがヒドイ！」

「じゃあはぐれんな」

「カイが歩くの早いんだよ！ 勝手に連れ出しといて一人で引っつちやうから！」

「お前が遅いんだよ。ダックスみてえに足短えから」

「ヒド・・・それでもシユヴァリエなの？ 紳士なの？」

「役職は一応シユヴァリエだが、残念ながら紳士じゃねえ」

「それを偉そうに言う人初めて見たよ」

「つーかどこ行こっかなー。どこ行きてえんだ？」

「こっちのセリフだよ！」

キャンキャン吠えるエルメス無視して、適当にプラプラしてたらなんか大通りに出て、そしたら急に目の前にあるシヨッピングモールに行きたいとエルメスが言い出した。

「ここテロ現場！ 今どうなってるのを見たい！」

ああ、例の。エルメスが一人で乗り込むと言う暴挙を犯したって噂の。まあいいかと思って中に入ってしばらくウロついてたら、またしてもエルメスがいねえ。もう俺、帰っていいかな。アイツ置いて帰っていいかな。

探すのが心底面倒くさかったから、企業の良心に頼ることにした。

ピンポンパンポーン

「ナリマン・ポイントからお越しのエルメス・ペンドラゴン様、エルメス・ペンドラゴン様。お連れ様がお待ちです。サービスカウンターまでお越しく下さい」

アナウンスを流して貰ったら、アイツ顔真つ赤にしてソッコー走ってきやがった。マジ面白れえ。アイツ最高。

「もー！ もー！ ヒドイよ！ 恥ずかしいでしょ！」

「アハハハ！ お前最高！」

「最悪だよ！ もー！」

顔を真つ赤にして怒るエルメスに俺は腹抱えて笑っただけど。しかし、コイツの迷子癖は本当に何とかなんねえのか。アーサー、本当に苦労したんだな。なんかしみじみと同情する。

さて、どうしたもんかと考えてたら良い事を思いついた。

「エルメス、ペットショップ行くぞ」

「え？ 蛇買うの？」

「どっから蛇が湧いて出た？」

「だってカイ蛇っばい」

もうコイツの思考は意味わかんねえよ。何？ 蛇っばいって。最早ツッコむ気力も起きねえよ。アーサー始終こういうのに晒されて

たの？ 本当気の毒だな。本当心底同情する。だから今は俺に同情しろ。

「わけわかんねえ事言っつんな。動物なんていらねえよ」

「じゃあ何？ 見たいの？」

「いや、買い物」

「なにを？ ペットなんていないじゃん」

「いや、うるせえ犬が一匹いる」

そう言ったらエルメスは少し考え込んで、すぐにハツとした顔をした。

「まさかと思うけど私のこと言っつんの？」

「そーだけど？」

「私犬じゃないもん！ 犬嫌いなのに！」

「キャンキャンうるせえよ。室内犬かてめーは。オラ、二度と迷子なんねえように首輪買ってやつからさっさと来い」

「ヤダよ！ バカじゃないのー！」

「お前がな。何度も迷子になりやがって。わざわざこの俺が買ってやるんだから有難く受け取れ」

「有難迷惑だよー！」

「迷惑はお前な」

あまりにもエルメスがキャンキャンうるせえから首輪は諦めた。まあ折角デケエとこ来たんだし買い物でもさせてやるうと思っつて聞いてみた。

「お前はどっか行きてえとことか見てえとことかねーの？」

「えー？ うーん、うーんとねー・・・」

「あ、俺煙草吸いてえ。バルコニー行くぞ」

「結局カイの都合なんだ・・・」

不服そうにするエルメスを迷子にならねえように引き摺ってバルコニーのベンチに座った。煙草吸ってたらなんかエルメスがじーつと見てる。

「なんだよ？」

「何歳から吸ってるの？」

「12」

「不良・・・ていうか、カイって本当は何歳なの？」

「ヒミツ」

「ケチ！ でも、アーサーさんが私より一回りは上って言ってたっけ・・・ん？ じゃあ40歳くらい！？ なんて落ち着きのないアラフォー・・・」

「黙れ小娘、生意気だ。お前もアラサーにしてはガキみてえじゃねーか」

「アラサー言うな！」

そーいや、俺が同い年だったからこいつは馴れ馴れしくなったんだ。なのに、年上だと判明したのにいつまでも馴れ馴れしいのはどういうことだ。そっちはいいのかよ。エルメスは本当に意味わからん。つーか一日に何回意味わからんって感想を述べさせる気だ。いい加減しつけーぞ。

「そういえばミラーカさんが割った窓ガラスとか全部綺麗になつたなあ。従業員通路とかどうなってるんだらう？」

「従業員通路？」

「そう、そこで私爆破されちゃって。アーサーさんが助けてくれたんだけど、クリシュナとアーサーさんに怒られちゃった！」

「……だろうな」

アーサー……かける言葉も見つからねえよ。本当に苦労したんだなあ。俺もそんな苦労をするんだらうか。あーヤダヤダ。

「でも、私もまた血も力もなくなっちゃったから本当に気をつけなきゃなあ」

しみじみと日が暮れた街を見下ろしながら呟くエルメス。紫色の空はあの日の夜明けみてえだ。

あの日大事な仲間も何もかも失ったエルメスは能力こそ覚醒したけど、血と共に力は失ってしまった。教訓は最高の教師だと言うが、教訓と呼ぶにはあまりにも酷だ。

でも、だからこそわかってもらう必要がある。

「そーだぞ、お前。今またお前が単独で戦うようなことしたら、今はアーサー程の奴はいねえんだから、俺らの命と引き換えにお前助けなきゃいけねーんだからな」

アーサーとの再会を果たす前にエルメスを死なせるわけにはいかねえし、それに俺らが誰か一人でも死んじまったら、エルメスは再び地獄の底に突き落とされる。

勿論死ぬ気はねえし俺らも気を付けるけど、エルメスにも気を付けてもらわねえと、思ってたんだが。

「いや、お前何笑ってんの」

「だって、カイがそんなこと言うなんて意外過ぎる」

「あ？・・・いやバカ、そういうことじゃなくてだな」

「命かけて私を守るなんてアーサーさんかクリシユナみたい！」

「喜ぶな！　ちげーつつつてんだろ！　俺がそんな気持ちワリー宣言するか！」

「気持ち悪い？　ちよつと、それはあの二人に失礼じゃない？」

「あの二人はいいんだよ！　俺的に気持ちワリーの！　つーか、ちげーつつてんだろ！　面倒くせえ！　もういい、絶対え助けてやんねえ」

「えー！　ケチ！」

「ケチじゃねえ。甘えんな」

激しく勘違いしてやがる。いくつになっても甘えん坊なこのバカには、多少厳しく躰しとかねえと後が面倒くせえな。

「何でもいう事聞いてくれるって言ったのにー！　ウソつき！」

「そんなこと言った覚えはねーよ！　多少の我儘は聞いてやるつつたの！　勝手に俺の発言を捏造するな！」

「一緒じゃない」

「何でもと多少じゃ大違いだ、バカ！」

どうやらエルメスの脳と耳には自分に都合よく変換する、悪魔のようなフィルターがついているらしい。こっちが気を付けねえとウソつき呼ばわりだ。

イヤ待て。それはおかしい。それは違うだろ。なんで俺がそこまです気をつけなきゃいけないんだよ、腹立つ。

アーサー、ウマイ事エルメスを飼い馴らす方法を教えてくれ。俺の手には負えない。

以上

FILE - 8 Calling 「天職」

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動
報告

クリシュナさんにはもちろん、アーサーにも謝罪させてください。本当にすいません。エルメスに対してそういう感情を持つことはあってはならないと思います。本当にすいません。全ては俺の責任です。

「ピーピー」

「へへ、キロちゃん可愛い！」

先日連れまわした先でエルメスはカナリアを買って帰ってきた。キロって名前は日本語の「黄色」から来ているらしい。微妙にネーミングセンスねえ。でもまあ気晴らしにはなったみてえだし、本来の目的が達成できたならいい。俺は疲れたけど。

ガロードと二人でキ口を愛でてたんだけど、ポツリとエルメスが言った。

「私の羽根ね、北都が作ってたんだけど、カナリアの羽根なんだって。北都が学校で飼育係してたからって」

それを聞いてなるほどな、と思ってたんだけど、突然横で別の声が聞こえた。

「カナリアと戯れるエルメス。超萌える」

「あ？」

「どうしよう、俺エルメスの事好きかも」

そう言ってきたキルシュを思わずブン殴ってやりました。褒める。

「ウソウソ！ 冗談！ 冗談だって！」

「てめえ、冗談でも言っただけ良い事と悪い事があるんだよ。つかそもそもそんな事を冗談で言うな」

「ていうか、何も殴ることねーじゃん！」

「殴るだろ。そりゃ殴るだろ。一応あれでもエルメスは主人だぞ。それはあつてはいけないことだ。許されん」

「副長、相変わらず厳しい・・・」

「当たり前だ」

「夢くらい見させてよ」

「夢を見るのは許すが、二度と起きてこれなくすんぞ」

「・・・すいません」

俺的には、エルメスが跪くべきはアーサーで、隣にはクリシュナさんが居るべきだ。ベきつつつても今は不可能なわけだけど、俺的にはいずれ隣もアーサーに占領して戴きたい。理由は単純。落ち着くだろ。やっぱそうこなくつちやなーみたいな。

今の所エルメスは隣の席をクリシュナさん以外に譲る気はねえみてーだけど。まあ正直その方があのバカどもの暴走を抑制できるから、それはそれでいい。

前にも言ったがこの屋敷の男女比率を考えると、それも心配の一つだ。ちなみに俺の心配は無用だ。俺には全っ然理解できねえから。エルメスがとか他人がどうこうじゃなくて、そう言う感情が理解出来ねえ。むしろ邪魔。

そう言うわけで、キルシュの件もあつたしちょっとだけ目を光らせてたわけだ。まーそしたら、叩きやぁ埃つてのは出てくるもんだな。

この際もうランスはいい。ある意味アイツは公認だ。ガライドもいいだろ。ガライドの場合はその域スツ飛ばして崇拜まで行ってる位だ。

基本的にほとんどの奴らは元聖職者なだけあってしっかりしてる。

微妙にわかりづれえのがあのチャラ男ども。パーシーとリオ。キルシユはもうブン殴ったからいい。

アイツらは昔からチャラかったし、隙あらばエルメスを口説こうとしてたから微妙にわからん。ある意味そついう性格なんだろうから、ほつといて平気な気もするけど念のため見張ってた。そしたらまずパーシーが網にかかりやがった。

「エルっち、デートしようか」

「ヤダ」

「いーじゃん、副長とはデートしたじゃん。今度は俺」

「強制連行されて引きずり回されるのをデートって言わないよ」

「・・・言わないな」

確かに言わねえ。引きこもりの室内犬を無理やり散歩に連れてった、の方が正解だ。つーか俺的には俺以外の誰かがエルメスの相手してくれんなら楽だから、それはそれでいいんだけど。でもパーシーは明らかに動機が不純だ。

「じゃあ俺が本当のデートしたげるよ」

「えー、いいよ」

「楽しいって」

「やだ！ 私にはクリシユナがいるからダメ！」

「俺がクリシユナさんのかわブツ！」

なんとなくそれ以上喋らせちゃマズイ気がして、パーシーに飛び

蹴りをお見舞いした。褒める。

「テメエ今何言おうとした？ ああ？」

「聞くくらいなら遮んなよ！ ていうか痛いし！」

「痛みを伴わない教訓に価値はない」

「だからってそんな渾身の力で蹴ることねーじゃん！」

「渾身の一撃を食らうような真似をするお前が悪い。お前ごときがクリシュナさんの代理なんざ笑止千万。身の程を知れ」

「う、ごとき・・・」

とりあえず、これでパーシーはちったあ大人しくなった。目の前で急に俺に蹴られたパーシー見てエルメスはびっくりしてたが、まあいい。どうせやるなら徹底だ。出る杭は打ち込みまくって叩き潰す。そんぐれえしねえと、バカには通用しねえ。

一方のリオは意外となかなか網にかからねえ。チャライにはチャライが、いつも微妙なところで引き下がる。さすがに以前潜入とかやらせてたせいとか、引き際が分かってるのか。

もしくは、パーシーとキルシュに俺に殴られるから気をつけろって警告を受けて警戒してるのかもしれない。まあ、それならそれでいい。むしろそれでこそ、だ。

が、アイツは人を騙すプロだ。完全に俺は油断してた。今日はエルメスとリオと二人で出かけてた。まあその時は特になんも言っていないで、キ口の餌を買いに行くつつつただけだったから放つてたんだが。帰ってきたエルメスが言った。

「カイ、どうしよう。なんか私、リオの彼女になっちゃったみたい
なんだけど」

「・・・は？」

事の顛末はこうだ。買い物しながらリオが言った。

「エルちゃん、最近ほラーな夢とか見たりしない？」

「まだ時々。でも大丈夫だよ」

「それならよかった。なんかあつたら俺にすぐ言っただよ」

「うん、ありがとう」

「俺はエルちゃんの味方だからね」

「うん」

「ずっと傍にいるからね」

「うん」

「何かあつたら頼ってね」

「うん」

「些細なことでも何でも言っただよ」

「うん」

「俺の女になりなよ」

「うん・・・ん？」

「うん、て言っただよ」

「え」

どうもその会話の流れに騙されたらしい。エルメスはバカだから
その流れでうっかり肯定の返事をしてしまったわけだ。で、困って
泣きついてきた。

ある程度はわかってたけど、そんな手管に騙されるとはどんだけバカなんだアイツは。エルメスの防御力の低さには改めて落胆させられる。

でも、それを一緒に聞いてたランスとガラードは速攻リオん所言つて文句言い始めた。

「この詐欺師！ 卑怯者！」

「ライオネル様には心底失望しました」

「なにになにー？ 二人ともヤキモチ？」

「誰が！ 恐れ多いっつもの！ 俺は絶対認めない！ 絶対許さないぞ！」

「ガラードの許可とか必要ないしー」

「なんだとおおお！？」

「まあまあガラード様、落ち着きましょう。ライオネル様はこんな手段でもとらないと一生相手にされないんですから。必死なんですよ」

「え、ちょ、ランス、それはヒドクね？」

「ランス良い事言うな！ その通りだ！ リオなんかエルメスから見たら使用済みティッシュだ！」

あの二人、意外に使える。エルメスの近衛に任命してやろう。しかし、リオはしぶとかった。

「ムカつくなー。でも二人が何言ってもエルメスはうんって言ったもんね。その事は事実じゃん」

バン！

「ぎゃあああ！！ 痛ええ！」

「不届き者が。恥を知れ」

「ちょ、副長！ 普通撃つか！？」

「撃つ。もしくは撃ち殺す」

いい加減しつけれから撃った。褒める。厚顔無恥な奴には近衛長官、俺が直々に説教だ。

「いいかお前らよく聞け。どうしてもエルメスを手に入れたいなら、越えなきゃいけない壁が3つある。まずは近衛のランスとガライド。次に長官、俺。最後に帝王アーサーだ。この壁を超えるのはまず不可能だ。どうしても越えたいなら死ぬ覚悟をするんだな」

俺の話聞きながら、撃たれたリオに視線を注いだバカどもは大にしく頷いた。さすが俺、超かっけえ。

ユアン 「リオ、諦める。見るよあの番犬」

ディナ 「メチャクチャおつかねえ。ケルベロスかよ」

俺 「地獄の番犬、ケルベロス。いーねえ、良い響きだ」

ガライド 「ちょうど3人だしね」

ランス 「エルメス様に近づいたら噛み殺しますよ」

エルメスの近衛部隊「ケルベロス」ここに結成。王族の親衛警備隊である近衛隊と近衛長官、もはや俺らには天職だな。

しかし、あのバカエルメスのせいで近衛長官から一気に転落する羽目になった。

「3人もありがと。助かった」

「つか、お前ももうちょっとしっかりしろ。アーサー泣くぞ」

「アーサーさんが？ 泣かないよお。ていうか、なんか3人も北都みたいだねー」

言われて見れば、北都はアーサーにすら牙をむく狂犬だったな。実は北都ってケルベロスの再来？

トリス 「そういえば、ガラードは副長とエルメス兄妹みたいだったな」

パーシー「あれ？ てことは」

キルシュ「副長って単なるシスコンじゃね？」

リオ 「ガラードとランスはマザコンじゃね？」

キルシュ「やーい！ シスコン！」

パーシー「やーい！ マザコン！」

俺 「誰がシスコンだゴルア！ ざけんな！」

キルシュ「副長がだよ」

俺 「んな訳ねーだろ！ ブツ殺すぞゴルア！」

パーシー「怖！ このシスコン兄貴めっちゃ怖ええ！」

俺 「テメエら・・・つかガライド、ランス！ お前らもなんとか言え！」

ガライド「・・・うーん、別にいいかな」

ランス 「そうですね」

俺 「ナニイイ！？」

近衛部隊「ケルベロス」は「エルメス・コンプレックス」に改名だよ。もうあり得ない。俺泣きたい。

「なんか嬉しい！ これからは3人がシスコンやってくれるんだね！」

「シスコンやるっておかしいだろ！ 職業みてえに言ってるんじゃないよ！」

「意外と天職だと思うよ」

「んな訳ねーだろ！ バカ！ もう・・・バカ！」

「んもー、すぐ怒るんだから。私にまで噛みつかないですよ。狂犬病の予防接種受ける？」

「受けるか！」

本当信じられん。あり得ねえ。なんでエルメスがノリノリなんだよ。意味わかんねえよ。天職とか言われても意味わかんねえよ。職業じゃねえだろ。

つーか何でランスとガライドは容認してんだよ。意味わかんねえよ。もう本当意味わかんねえ。

以上

FILE - 9 Caritas 「愛」

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行

動報告

檻の中で餌をついばむキロを見て、泣いていた。

「私は北都から人間としての死を奪って、最後にはあんな可哀想な死に方をさせてしまった」

カナリアの羽根は北都の羽根。キロを見て北都を思い出したエルメスは、そう言って涙を零す。

エルメスは二度も北都に死なれてしまった。一度目は目の前で、二度目は自分の中で。エルメスも北都をととも大事にしていた。本当に仲のいい兄弟で、大事な弟だった。

あの日、北都は最後の一片で、エルメスの最後の砦だった。最後の拠り所だった。アーサーを失って自暴自棄になりかけたエルメスを救ったのは北都だった。

北都が一生懸命エルメスに語りかけた。立て、戦え、みんなの思いを無駄にするな、そう言っただけ。その言葉にエルメスは涙を拭いて立ち上がった。

あの時北都がそう言わなければ、エルメスはきつとそのまま殺されてた。アーサーを失ったという絶望、地獄にもたらされた蜘蛛の糸。

細く光るその糸は、何よりも強い兄弟の絆。北都が地獄からエルメスを引き上げた。その北都も、もういない。

再び地獄に突き落とされたエルメスに、蜘蛛の糸を垂らしてくれる者ももう、いない。エルメスはこれから自力で這い上がってこなければならぬ。俺が手を伸ばしても、届かない。地獄が、深く、深淵、底が見えない程に。

「私、お父さんとお母さんに合わせる顔がない。あの日お父さんは北都を助けられなかったことを、自分をすごく責めてた。だけど、私の中で生きてるってわかって救われたって言うだけ。それなのに、私はまた北都を、本当に死なせちゃった。私はお父さんとお母さん

に、なんて謝ればいいの？」

答えが、見つからない。どうしたらいい、なんて言えばいい、どうすればエルメスが救われるのか。わからない、わからない。

困惑してエルメスを見つめる事しかできない俺に、エルメスは尋ねる。

「こんなこと聞いて怒るかもしれないけど、カイは家族を失った時、どうやって乗り越えたの？」

俺にとってはもうずいぶん昔の話だ。あの頃俺はまだガキで、目の前で繰り広げられた惨劇が何なのかもよくわかっていなかった。自分の足元まで流れてきた母さんの血が恐ろしくて、ただ、泣いていた。

あの日以来、俺は泣かなくなった。泣けなくなった。それ以上に悲しい事など、今までなかったから。今こんなことになって、エルメスを見てとても悲しく思うのに、泣き方すら忘れて一緒に泣いてやることもできない。

少なくとも今こうなるまでは、それでいいと思っていた。必要のない事だと。俺はもうただ泣いていた頃のガキじゃない、強くなっただ。そう、思ってた。

あの日、両親を目の前で殺されて殴られて気絶した。気が付いたらジュリオ様の屋敷にいて、頭が痛くて、両親がいないことが怖くて、そこがどこかもわからなくて、恐怖した。

「大丈夫だよ。ここはヴァチカン」

「ヴァチカン？」

「神様のいるところだよ」

「神様が住んでるの？」

「そうだよ。これからは君をずっと神様が守ってくれる。だから、

大丈夫。怖くないよ」

「だいじょうぶ・・・」

大丈夫、そう言ったジュリオ様の言葉に安堵した。その言葉はガキの俺に、お守りの様に響いた。

夢を見る。あの日の夢、怖い夢。飛び起きる度に呟く。

大丈夫、大丈夫、ここには神様がいるから、大丈夫。神様が守ってくれるから、大丈夫。

まじないのように、呟く言葉。

しばらくして、ガルフやペレアス達も屋敷にやってきた。それから少しずつ増える、同族。自分の身に起きたことを知らない奴も、知っている奴も、理解していない奴も、支え合った。同じ苦しみを分かち合う、兄弟のように。

その中で俺は一番年上で、誕生日も一番早かったから自然と長兄のような立場になっていく。

すっかりしなきゃ、コイツらを守ってやらなきゃ、俺は兄ちゃんなんだから。大丈夫、神様が見守ってくれてる。大丈夫、神様が頑張ってくれてくれる。大丈夫、俺には神様がついてる。

自分に、言い聞かせた。

「カルロがいつもみんなを引っ張ってくれてくれるから助かるよ。カルロはえらいね」

「はい、ジュリオ様。ありがとうございます」

ジュリオ様に褒められるのが、嬉しかった。

10歳になって、初めて銃を握った。構えて、標的に照準を定めて引き金を引いた。衝撃、硝煙の匂い、破裂音。初めてだったのに、弾は標的に命中した。

「すごいね。カルロは才能あるね」

甘い響き。もっとジュリオ様に褒められたい。それから俺は銃の訓練に没頭するようになる。

連続して撃てるようになったら褒めてくれるかな。命中率を上げたら、早撃ちができる様になったら、色んな銃を使いこなせたら、褒めてくれるかな。

ただ、ただ、ジュリオ様に褒められたくて、それだけの為に銃の腕を磨いた。そんな幸福な少年時代は、終わりを告げる。

14歳の誕生日を迎えたその日に、ジュリオ様は言った。

「カルロ、君は本当に優秀だ。俺の仕事を手伝わない？」

「仕事、ですか？」

「そう、エクソシスト。カルロがいてくれたらきつとみんな助かるよ。カルロは才能あるから、困っている人の役に立てる。俺を助けると思っ、ね？」

ジュリオ様を助ける、俺が、ジュリオ様の助けになる。大人になったみたいで、認めてもらえたような気がして、嬉しかった。

初めて出陣した戦場で、殺すべき相手は人間だった。エクソシストは悪魔を祓う仕事なのに、なぜ、人間を？ 疑問に思う。俺の質問にジュリオ様は笑って答えた。

「いいんだよ、大丈夫。異教徒は人間じゃないから、殺していいんだよ」

大丈夫という言葉に、初めて違和感を感じた。震える手で、引き金を引いた。初めて、人を殺した。殺した女が死にゆくさまを見て、

母さんを思い出した。

俺のしたことは、母さんを殺した人間と同じことなんじゃないか。父さんと母さんはカトリックだったけど殺された。宗派の違いに何の意味があるのか。

神を、疑った。

でも、次第に麻痺していく「正常」な感覚。破裂音と硝煙の匂い。それは人の感覚を麻痺させるものだと、後から知った。

その後、精鋭部隊「死神」が組織され、その隊長に就任し、以前よりも圧倒的に活動の機会は増える。今まで何人殺したかなんて、数える必要もない。数なんて、意味はない。ただ、ジュリオ様の為に、ただ、仲間を守るために、敵が邪魔だから、殺す。

大丈夫、俺のしていることは悪じゃない。大丈夫、俺は、隊長なんだから。大丈夫、俺はなんだってやれる。

子供の頃から変わらない、大丈夫、の祈り。その祈りが、ある日突然、嫌いになった。

「ラルフ！　しっかりしろ！」

「隊長、すいません・・・」

「大丈夫だ、すぐ助けが来るから！」

仲間の一人が撃たれて重傷を負った。

「猊下！ 救援の要請をお願いします！ ラルフが撃たれました！」

「カルロ、今からでは間に合わない。諦めるんだ」

「諦める！？ このままではラルフが・・・」

「大丈夫、神に召されるんだよ。ラルフは天国に行ける」

ジュリオ様の言った通り、ラルフは天に召された。

大丈夫、大丈夫、大丈夫って、どういう意味だったっけ。助かるから、大丈夫？ 死ぬから、大丈夫？ 天国に行けたら、大丈夫？

死んじまえば、同じじゃねえか。なにもなくなる。全然、大丈夫じゃねえ。

祈りを、やめた。

そして運命は変わる。

「ラルフみたいなことが今後起きないように、洗礼を受けてもらう。大丈夫、ちゃんと人間には戻してあげるよ。約束する」

神を疑った報いか、俺は吸血鬼になった。いつかは人間に戻る、

その約束にすがって。

ラルフが死んでしばらくして、ジュリオ様は赤ん坊を連れて来た。

「カルロ、新しい兄弟だよ。この子の名前はジョヴァンニ。カルロが面倒見てあげて」

手渡された赤ん坊は俺を見て笑った。血に濡れた、人でなくなつた人殺しの腕の中で。

兄弟と言つても俺にとつては子供と言つてもいいほどの年齢差。俺も普通の人生を歩んでいたら、子供がいてもおかしくねえよな。そう思つて腕の中のガラーダの笑顔を見て実感した。

これが、命。

可愛いな。この子も、人殺しになるのか。人殺しなんかさせたくねえな。

俺の願いを、運命は聞き入れない。呪われた存在の祈りを、神は聞いてくれない。

俺の指導でメキメキと銃の腕を上げたガライドは、やはり戦線に投入される。初戦を終えたガライドは、俺と同じ人殺しの目をしていた。

この子も、あの小さくて可愛かった子も、人殺しになっちまったけど、せめて俺と同じ呪われた存在にはしたくねえ。

ガライドの吸血鬼化は、まだ未熟だと言う理由をつけて待っててもらっていた。

そして出会う、俺の神。エルメスによってガライドは吸血鬼化された。

エルメスを恨んだ。俺の希望を、殺した。

だが、神は言う。生きていてほしい、大事だから。生きていくれるなら、なんだっていい。それが私の願いだから。死んでほしくないから。ジョヴァンニの心は、私が守るから。

それを聞いて知る。それが、それこそが愛。

エルメスはガライドを守ると、俺に約束した。言葉の通り、愛を注ぐ。聖母のように。

ジョヴァンニは俺と同じにならずに済みそうだ。母親がいるから。

「ガラードが言った。」

「伯爵にすぐ泣くのはミナの遺伝か？　って言われた！」

この子には、未だ感情がある。まだ若い、世間知らずな子供。ミラーカさんの墓の前で泣くエルメスをみて、涙をこぼすガラードに羨望すら覚えた。

よかった、この子にエルメスがいて。よかった、この子に母親がいて。俺の母親は死んでしまったけど、俺が育てた子に母親ができて、運命の呪いに苦しまずに済んで、本当に良かった。

俺の祈りは、初めて神に聞き届けられた。俺の願いを、俺の神が叶えてくれた。この時になってようやく俺は、救われた。

俺のクソ暗い昔話を聞いて、エルメスは涙をこぼした。

「何泣いてんだよ」

「カイが、泣かないから」

「同情するなっつっつたる」

「カイが泣かないから、私が代わりに泣くの。同情なんかじゃないよ。私はガラードのお母さんで、カイがガラードを育てたお父さんなら、私達は同じ気持ちのはずだよ」

「・・・バカな奴」

俺の代わりだと言って泣くエルメスの涙を拭いたら、俺の手を取ってエルメスは言った。

「カイにはみんながいたから、ガラードがいたから、乗り越えられたんだね。じゃあ、私もきつと乗り越えられる。みんなが、ガラードが、カイがいるから。家族がいるから。きつと、大丈夫。みんなが私を大事にしてくれるから、大丈夫」

俺が嫌いになってしまった大丈夫という言葉を使って、泣きながら微笑んだエルメスは続けてこう言った。

「みんなは私の大事な家族。私の愛する家族。お父さんとお母さんがどれほど私と北都を愛してくれていたか、今ならわかる。きつとこの世界に生まれたこと、それだけで幸せだと思えるほどに愛は深かった。カイのご両親もきつとそう。」

「カイがガラードやみんなを大事にして愛していたから、ガラードやみんなは苦しまなくて済んだんだね。そして今は私を大事にして守ってくれる。カイが大事にした人たちに、今私は大事にされてる。愛は、繋がっていくんだね」

エルメスのその言葉に、俺の神の愛に、あの日以来忘れてたはずの涙が、頬を伝った。

何度でも俺を救う神は、俺の涙を見て嬉しそうに笑う。

「カイの心も、愛も、ちゃんと生きてる。よかった」

こういう時、つくづく思う。アーサーは大した王様だったが、その娘も大した女だ。

親の存在というのは、偉大だ。

以上

LETTER 2 Cian 「一族」

拝啓 アーサーさん

とても悲しくて、とても驚いて、とても嬉しい事がありました。

この前、カイとお出かけして、ていうか連れまわされたんですけど。その時に金糸雀を買ってもらったんです。お店で見かけた時に北都を思い出して。

その後も、カイとランスとガラードはシスコン呼ばわりされたりして、なんだか北都を思い出さずにはいられませんでした。

金糸雀にキ口ちゃんって言う名前を付けて、籠の中で餌を食べているのを見ていたら、北都を思い出してどうしようもなく悲しくなりました。大好きだったのに、大好きでいてくれたのに、2回も死の恐怖を味わわせてしまって、本当に可哀想なことをしてしまいました。

それに、アーサーさんも一緒だったからわかると思うけど、お父さんとお母さんの事を思うと、胸が張り裂けそうになりました。あと7年で時効が成立したら日本に帰れるかもしれないのに、帰った時に両親になんて謝罪したらいいんだろうって。

そう考えると、帰りたいけど、帰るのが怖いと思ったりしてどうしようもなく辛くなりました。

そしたらカイが来て、だからそのことを話したんだけど、さすがに困ったような顔をして。だけど、よく考えてみたら私だけじゃないんだって思っつて。シャンティも、カイ達も、みんな家族を奪われてる。家族から奪われてる。

でも、みんな頑張っつて乗り越えてる。その事に気付いて、怒られるかなっつて思っつたけど、カイに聞いたんです。そしたら、カイは怒らなっつに昔話をしてくれました。

カイの過去は、とても悲しいものでした。とても辛いものでした。とても辛い運命でした。それでも生きていられたのは、信仰とジュリオさんとシュヴァリエのみんなの存在だったみたいです。

その中でも、特にガライドの存在が大きかった。私は知らなかつたんですけど、ガライドはカイが面倒を見て育てたそうです。それを聞いて納得がいきました。

私がガライドを吸血鬼化した時に、カイはすごく怒りました。本当に私を本気で殺そうとするくらいに。本当に怒っていました。

その時はジュリオさんへの忠誠とか誓いだと言っつてたんです。それが嘘だとも思えませんが。多分、ジュリオさんは吸血鬼化を今のところはしなっつて約束してくれてたのになっつて、そう言っつ意味だつたのかなっつて思います。

あの時言われたんです。ガロードには神はいなくなっただから、お前が祈りも懺悔も呪いも何もかも引き受けると約束しろって。だから、絶対にガロードの心は守るって、それがマスターの責任だからって言ったら許してくれたんです。

あの時のカイは本当に怒ってて、少し疑問に思うくらいでした。だけど、カイの話聞いてようやくわかりました。カイがガロードに自分と同じような辛い思いをしてほしくなかったんだって。自分が大事に育てた子に、辛い運命を歩ませたくなかったんだって。

カイは神様を信仰してたから、吸血鬼になったことがすごく嫌だったんだと思います。辛かったんだと思います。それを私に隠していたのも、そのせい。私が友達だから、自分の本心を知られたら私が傷つくと思ったのかもしれない。相変わらず、カイは自分が辛くてもいっつも後回しです。

でも、カイの昔話を聞く限り昔からそうだったみたいです。みんなの為に頑張って、ジュリオさんの為に頑張って、ガロードの為に頑張って、今は私の為に。

カイの過去はとても辛く悲しいものだったけど、カイは救われたんだと言っていました。ガロードが今、苦しんでないから。私がガロードに愛を注いで心を守ったからって。私もそれを聞いて凄く嬉しかったです。

カイの話聞いて思いました。連鎖は呪いだけじゃないって。愛も連鎖するんだって思いました。カイが愛した兄弟たちが、今は私を大事にしてくれます。アーサーさんの愛した娘は、今みんなを大事に思っています。アーサーさんの救った孤児たちは、別の孤児たちを救おうとしています。

本当に辛い事があって、理不尽しかないと思っていたこの世界にも、こんな素晴らしい事があるんですね。私はそれがとても嬉しくて、今生きていることを、今周りにいる人たちの事をとっても愛しく思いました。その事に、とても、とても、救われました。

カイは、泣かないんじゃないって泣けなかったんだって言うてました。ご両親を殺された時以上の悲しみを感じることはなかったからって。ジュリオさんを殺した時でさえ、凄く辛そうにしていたけど、泣かなかった。みんなは泣いていたけど、カイだけは泣かなかった。

だから私がカイの代わりになって泣いたら、バカな奴って言われたんですけど、話の最後に愛も繋がっていくんだねって言ったら、カイは一筋だけ涙を零しました。

カイの涙を見て思いました。カイはガードやみんなを本当に大事に思ってるんだなって。だから、カイの与えた愛が連鎖して、今私の救いになってることが嬉しかったのかなって。自分の与えた愛が連鎖して、今誰かを救っていることが嬉しかったのかなって。

カイのガードに対する思いを聞いて、カイが私をガードの母親だつて言うのを聞いて、お父さんとお母さんの事を思いました。その時に思い出しました。この世に存在するもので一番美しいものは、親から子供への無償の愛だと。

それはきつと空よりも広くて、海よりも深いものなのでしょう。きつと我が子がこの世に生を受けたことが、至上の喜びであるほどに。それほど深く強い愛情、絆。

ガードがいることで、今になってわかるようになりました。ただ、ただ、存在することが、嬉しい。些細なことでも、笑ってくることが嬉しい。例えば本当の親子じゃなくても、本当の兄弟じゃなくても、血縁を凌駕するほどの、それほどの、愛情。

それほどの愛情を抱く私の両親が、北都を死なせてしまった私を責める事なんてないだろうし、悲しむと思っけど、きつと一緒に泣いてくれるんだらうって、私と同じ気持ちで泣いてくれるんだらうって、そう思いました。

私、本当に今日カイとこの話をする事が出来て良かったです。カイは救われたって言ってたけど、私も本当に救われました。とてもとても嬉しかった。

アーサーさんが私に向ける愛情も、きっとそれに近いものなんじゃないかって思います。アーサーさんはいつも私が笑っていられるように、いつも私の事を考えていてくれました。

有償の愛ならできないことさえ、苦しい決断も、悲しい別れも、辛い選択も、アーサーさんは私の為にしてくれた。それはきっと無償の愛なのですね。

これと言ったらアーサーさんは怒るかもしれないけど、やっぱり私にはアーサーさんは偉大なる父です。畏怖すべき、敬愛すべき、偉大なる父です。

私達だけでなく、シャンティ達や、トリン、ツァン達の上にも愛情の連鎖を振りまいたあなたは、私達みんなにとって、偉大なる父です。私達の愛の連鎖の生みの親です。あなたが私の、私達ペンドラゴン一族の父であることを、心から誇りに思います。

敬具

P・S

カイが泣いたって書いちゃったこと内緒にしてくださいね。喋

ったらブッ殺すって言われてるから。後が怖いので。

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

ちよつとちよつと。それはないんじゃないの。それはないんじゃないの！

さて寝るか、と思って寝室入ったらエルメスに先に寝られてた。俺のベッドで。あれ、なんで？ なんでランスのところに寝ないの？ 疑問と共に怒りがこみあげてきて、文字通り叩き起こした。

「うや……いたい……」

「おはよう、エルメス。てめえ何してんだコラ」

「寝てたの」

「ランスンとこ行け」

「やーだ」

瞬間的に相当イラついたぞ。なんって我儘な娘だ。マジどんな騷
したんだよ。腹立つ！ と思ったんだが、話を聞いてみると意外な
事実が発覚。

「エルメス様、今夜はカイ様とお休みください」

「どうして？」

「色々諸事情がありました」

「ふーん？ わかった」

先日11歳を迎えたランスはとうとう大人の階段を上り始めたよ
うだ。つーか諦め早っ！ 騎士で紳士なんじゃなかったのかよ。も
うちよつと頑張れや。

「そういうことなら棺で寝ろ」

「やーだ」

「ヤダじゃねえ。お前の本来の寝床は棺だろ」

「まだ怖いからヤダ」

「じゃあ勝手にランスンとこいけ」

「カイは私の事嫌い？」

「いや、別に嫌いとかじゃなくて」

「嫌いなんだ・・・」

「い、いや、そうじゃなくて」

「私嫌われちゃったんだ・・・しくしく」

「ご、ゴメン！ 嫌いじゃねえから！ うん、いいから。ここで寝ていいから！」

「本当？ ありがとう！」

しょうがねえから渋々許可した。だって泣かれたんだぞ！ なにも泣く事ねえのに！

「つーか俺、騙されたのか。もしかして騙されたのか。あれはワザとなんじゃねえか、後からそう思い至ってイラついた。本当は蹴っ飛ばしてでも追い出したいところなんだが、そうもいかない。」

「カイと一緒に寝るとクリシユナ思い出す」

「オイオイ、恐ろしい事言ってるじゃねえよ」

「カイ、腕枕」

「ざけんな。俺はクリシユナさんじゃねーし」

「ちえつ、ケチ」

「ケチじゃねえ」

俺はエルメスに背中向けてたんだけど、少ししたら後ろからシクシク聞こえてきて、ビックリしてエルメスの方向いたら泣きつかれた。キヤー！ 俺貞操の危機！

「背中向けないでよ。寂しい」

「うん、わかった。わかりました。だからちょっと離れてもらえませんかね。お兄ちゃんからのお願い」

「ねえ、どうしてカイはいつも自分のことを後回しにするの？」

「シカトかよ・・・っーかしてねーし。俺はいつも自分最優先だけど」

「してるよ。カイだって辛いのにいつもどうでもいいって言って後回しにするじゃん」

「いや、してねえ。するはずがねえ」

「でもジュリオさんの話した時はそう言った。ガラードの話の時もそう」

「まあ、それは・・・ていうかお前は何に泣いてるわけ？」

「だって、私はいっぱいカイに助けてもらってるのに、私はカイを助けてあげられないの？」

正直、何言ってるんだこの小娘は、と思った。正直なところ、イタリアにまだいた頃から俺はエルメスにかなり助けてもらってた。コイツが気付いてないだけで、色々と救われたことは沢山あった。

それこそ、ガラードの件にしても、ジュリオ様の件にしても。むしろ、エルメスを救ってやれないのは俺の方だ。エルメスを救えるのはアーサーしかいねえから、俺の存在はその場凌ぎでしかない。

俺はエルメスの助けにはならない。アーサーの代理すらも勤まらないんだから。エルメスを助けてやれないのは、俺の方。

「俺はもう既にお前に助けられてるよ。たくさん」

「ウソ、私には何もできないもん」

「んなことねえ。お前はいつも俺が欲しい時に欲しい言葉をくれるし、俺の為に泣いてくれるだろ。ガラードの件にしてもそうだし、ランスも大事にしてくれるし、ジュリオ様の時だって安らかに死なせてくれて、俺の話を聞いて慰めてくれたし。それ以外にも、それ

以前からたくさん」

「でも、カイは苦しそうにしてる」

「・・・そうだな。贅沢言うなら否定はしない」

「今は何が辛いのか？」

「アーサーがいなくてお前が泣いてるから」

「アーサーさんが居ないのはカイのせいじゃないよ」

「ああ、俺のせいじゃねえし、俺にはどうしようもねえ。お前が泣くのを止められるのはアーサーしかいねえし、俺にはそれはできない。俺にはどうしようもない事が、俺にお前を救えないことが、今は辛いかな」

「そんなことない。私いっぱいカイに救われたよ」

「でも、お前は泣いてる」

「けど、それは・・・」

「いつも救われてるのは俺の方だ。俺は救われてるのに、お前を救ってやれない。ゴメンな。ただ、傍にいる事しかできなくて、ゴメン」

自分で言いながら、自分の無力さにいつそ泣けてくる。アーサーが帰ってきてくれたら、エルメスを閉じ込めてる悲しみの繭は一瞬で燃え落ちるのに。俺には北都の様に蜘蛛の糸を垂らしてあげることも、クリシユナさんの様に存在するだけで幸せの象徴になれる力もない。俺には何も無い、何もしてやれない。ただ、傍にいる事しかできない自分が悔しい。

俺がエルメスを救わなきゃいけないのに、いつも救われるのは俺の方で、俺だけが救われる。誰もエルメスを救ってあげられない。俺はエルメスを救ってあげられない。その事が、辛くて悲しくて仕方がない。

アイツが自力で地獄から這い上がって、悲しみの繭を突き破って出てくるのを見守ることしかできない、自分の無力さが悲しい。

もういつそ、エルメスに俺を救ってほしくない。いつそ、傍にいるのが辛い。俺の無力さが、浮き彫りになるから。エルメスを置いて、俺だけが幸せになるような気がして、嫌なんだ。

「カイのバカ」

「は？」

「カイはいつも私の事考えてくれてるけど、全然私の事見てくれない」

「・・・ん？」

「私、本当にカイにたくさん助けられたよ。カイが私を世界で一番大事にしてくれるから、すごく救われてるよ。カイの存在が、救い。いつも傍にいてくれて、ありがとう」

「まただ。また、救われる。俺が救われる。何度でも、俺は救われる。俺だけが救われる。俺は、何もしてやれないのに。この心に同時に発生する悲壮と歓喜を、なんと呼ぶんだらうか。」

「エルメス、ゴメンな、ゴメンな。傍にいてやることしかできなくて、ゴメン。お前が元気になれるなら、俺はアーサーの代わりに、クリシュナさんの代わりに、北都の代わりに、なんにだってなる。お前が幸せになれるなら、俺は何にでもなるから」

「ありがとう。でも、カイは、カイだよ」

俺はアーサーになりたい。クリシュナさんになりたい。北都になりたい。エルメスを救う事の出来る誰かになりたい。

俺は、俺でいたくない。エルメスを救えない無力な自分が、大嫌いだ。

FILE・11 Chronicle 「年代記」

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

一日10万な。で、今日で300万だ。キツチリ払えよ、延滞料
金。

「マジあり得ねえ」

「もう1か月だよお」

アーサーを待つこと既に今日で1か月経過。ふざけんな。ていう
かさあ、せめていつ帰ってくるかわかんないわけ？ 自分の事だ
る？ ああ？

「ねえ、カイ、そろそろ一回イタリアに戻らない？」

「ミラーカさんか？」

「うん」

「うーん、まだ少し早い気がするな。ヴァチカンの調査はまだ入ってるかもしれないし、それにオーストリアについてもそのどこかもわかんねえからな」

「そっか、そうだよな」

「まあ、ミラーカさんの出生地に関してはトリスに調べさせるから」
「うん、ありがとう」

あれからちょうど一か月経って、その間にエルメスも少しだけ落ち着いたようだ。悲しみに時間は最高の薬だと聞いたことがあるが、全くその通りだ。

けど、それと比例して色んなことに目が行くようになった分、新しく悲しみの種を拾ってくることもある。みんながないという事を実感して、死んだという事を改めて実感して、アイツは時折泣いてる。拾って来た種を一粒ずつ潰していつてる。隠れて、独りで。

本来なら一人で泣かせたくねえけど、アイツの方が俺から逃げってしまう。この前エルメスが泣いていることが辛いつてしまったせいかもしれない。俺を苦しめたくないと思って、隠れて一人で泣くんだ、アイツは。

俺はアイツを助けてやりてえのに、支えになりてえのに、余計な

苦しみを背負わせてしまった。最悪だ。俺は一体どこまで役立たずなんだ。

アーサーは笑ってるエルメスが好きで、エルメスの笑顔を守る為にエルメスを大事にしたのに、その為に俺に仲良くしてやれって言っただのに、俺はアイツを苦しめる事しかできねえ。いつも、泣かせてしまう。

俺だってエルメスの笑顔を取り戻してえし、大事に思ってるのに。

アーサーに当たり前にできることが、俺には全然できねえ。アーサーと俺にはきつと決定的な違いがあるんだろうけど、それがなんなのかわかんねえ。

わかれば、俺にもアーサーの代わりに務まるかもしれないと思ってんだけど。

まあ、仮にそれが愛情と友情の差だと言われたら、正直俺にはお手上げだ。さすがにそこまで模倣してやる事はできん。無理だし、あり得ねえし、ぶっちゃけ嫌だし。断固拒否。

まあ、愚痴はこの辺にしておこう。最近愚痴ってばっかだな。ちよつと反省。

知らない間に俺に一方的にフラれたエルメスは、トリスの部屋でミラーカさんの事を調べてる。けど、中々それらしい情報が出てこなくて、かなり苦戦してる。

エルメスの話ではミラーカさんも300歳超えてたらしいし、貴族と言っても何かやらかした人が英雄でもない限りは、そんな昔の人の情報なんか出てこなくても仕方ねえんだけど。

「ていうかそもそもさあ、ミラーカさんって本名なの？」

「・・・あ」

トリスに言われるまで俺も気づかなかった。そうだよな、アーサーだって偽名なんだし、ミラーカさんだって本名とは限らねえじゃねえか。本名がわかんねえ以上、完全に迷宮入りだ。

「しまったあ、ミラーカさんの本名聞いとくべきだった」

「偽名使ってる人に聞いて教えてくれると思えねえけど？」

「あ、それもそうだよな。アーサーさんも教えてくれなかったし」

「そりゃそうだよ・・・」

「でも聞いちゃったけど」

エルメスの言葉に俺とトリス興味津々。アーサーの正体めっちゃ知りてえ！ それはエルメスも同様だったらしい。

「トリスちょっとパソコン貸して！」

「いーよー」

みんなには本名内緒！ つって自分で検索を始めたエルメスは、

少ししたら結果に辿り着いたようだった。

「マジでえええ！？」

「どした！ どした！？」

「ちょ、ヤバい。ちょ、ヤバい」

なんかエルメスの動揺が半端ねえ。こっち振り向いてワタワタしてる。ますます俺ら興味津々。

「見せて！」

「どれ……」

『マジでええええ！？』

危づく腰抜かしそうになったぞコノヤロー！ いえ、すみません。今まで生意気な口きいてすいません。

「まさかアーサー様があの世界一有名な吸血鬼だったなんて……」

「まさかアーサーさんがあの串刺し公だったなんて……」

「まさかアーサーがあのワラキアの英雄だったなんて……」

俺らしばらくボーゼン。いまだに信じられんが、そう言われてみれば確かに最強の吸血鬼で、化け物たちの中で神格化するほどの吸血鬼つつつたらもうアンタしかいねえじゃねえか！

まさかアンタがあのだらキュラだったとは驚きだよ！

「す、すごい・・・私何も知らないで、今までとんでもない人に仕えてたんだ。ヤバイ！ 超スゴイ！」

「フーかお前、伝説の吸血鬼の眷属とかマジスゲエ！」

「フーか俺らも血族じゃん！ うわー、マジスゲエ！」

俺ら大興奮。ハリウッドスターに知り合いがいるとかよりも自慢できるじゃん。マジスゲエ。マジヤベエ。

興奮しすぎてエルメスに至っては、名字ドラキュラに変えちゃおうとか言いだすほどだ。それはちょっとさすがにあんまりだから却下したけど。

少しして興奮が落ち着いてきた頃に、改めてパソコンの画面を見つめてたトリスがあれ？ つつって俺らを呼んだ。

「アーサー様の名前、アナグラムだ」

「え？」

「ほら、DRACULA、これ逆から読んでみて」

「え？ ALUCARD・・・アルカードさんになった！」

「おー！ こんなトリックが！」

思わず拍手だよ。アンタすげえな。存在が魔術じゃねえか。その後もアンタの謎解きで大盛り上がりだよ。

つーか今更だけど、隠してたところ探ったりして悪かったな。心配するな、誰にも言つてねえから。俺らだけで盛大に楽しんでやったから！　ハハハハハ！　やべえ、みんなに喋りてえ！　・・・・・・・・

しかし、アンタも色々あったんだな。俺らが知ったことは史実上のアンタでしかないし、本当の事はわかんねえけど、それでも俺なんかよりも遥かに辛い人生だったんだな。トリスがなんかしみじみ言ってた。

「俺らが500年前に臣下にいたら吸血鬼になってなかったって、こういう事だったんだ」

アーサーも裏切られ続けて、それでも戦い続けてきたんだな。絶望してそれでも尚、生き続けてきたんだな。500年以上も、ずっと孤独でも、それでも生き続けてきたんだな。

アーサー、アンタは本当にすげえよ。エルメスの父親だけあって、エルメス以上に強ええ。弱い化け物なんかじゃねえ。本当に弱いなら、とつくに生きることから逃げてる。

アーサーは本当に立派な王様だ。今俺達に、アーサーの血がわずかにでも流れていることを、本当に誇りに思う程だ。

正直俺は吸血鬼になったことがすげえイヤだったんだけど、アーサーの事を知って、この事があって、なんかイヤじゃなくなった。

うーん、まさかアーサーにまで救われるとは。アーサー親子、恐るべし。

以上

FILE - 12 C U I T 「熱狂的崇拜」

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

報告

エルメスがうざい。

「カイー、アーサーさんまだ帰ってこないの？」
「さーなー」
「アーサーさん早く帰ってこないかなあ」
「そーだなー」
「アーサーさんに会いたいなあ」
「そーだなー」
「カイも会いたいでしょ？」
「別にー」
「でも帰ってきてほしいでしょ？」

「まーなー」

「じゃあ会いたいでしょ？」

「別にー」

「意味わかんない！」

わかれよバカ。確かに俺はアーサーに一日でも早く帰ってきてほしいと思ってるけど、別にアーサーに会いたいわけじゃねえからな。勘違いすんなよ。エルメスの為だからな、言っとくけど！

「カイー、アーサーさん今どこにいるのかなあ」

「さーなー」

「アーサーさん何してるのかなあ」

「さーなー」

「アーサーさんに会いたいよお」

「さーなー」

「そこでさあな、はおかしいよ！ もー！ さっきから返事が適当過ぎだよ！」

「そりゃそうだろ！ 俺の相槌のキャパ越えてんだよ！ お前この会話何ラウンド目だと思ってるんだ！」

「そんなのしょうがないでしょ！」

「しょうがなくねえよ！ 一日に10回も20回も同じこと言いやがって！ いい加減しつけーんだよ！」

「だって！ だって！ 会いたいんだもん！」

先日の件でアーサーに惚れ直した様子のエルメスは、更にアーサーが恋しくなったらしい。よかったな。

しかし、そのとぼっちりがコレだ。この会話を毎日毎日一日に何十回も繰り返される俺の身にもなってみろ。

勿論、エルメスがアーサーに会いたい気持ちはよくわかる。うん、わかる。けどもだ・け・ど、人には我慢の限界と言う物があるのだよ。人じゃねえからってのはこの際無しだ。

元々サツパリ風呂上り気質な俺には、今のエルメスのようにベツトベトした粘着ローション気質は耐え難いわけだ。そりゃもう苦痛なわけだ。わかる？

例えるなら酔っぱらって調子に乗ったオッサンが、若い女に何度も同じ自慢を繰り返しているのと同じ状況だ。な、うぜえだろ？
実にわかりやすい解説。さすが、インテリジェンス俺。

「はあ・・・アーサーさん、会いたいな・・・」
「また始まった・・・ハア」

そりゃゲンナリもするぜ。溜息も出るさ。そんな俺の気も知らないで、シュヴァリエの奴らったら笑うのよ。ひどいじゃない。

リオ 「プクク、副長、アーサー様に嫉妬してんだぜ」
パーシー 「可愛い妹取られたとか思ってたんだぜ、あのシスコン」

こいつらは死ねばいいと思う。ていうか、殺そうと思う。

俺 「テメエら・・・人の気も知らねえで好き勝手言いやがって」

ペレアス「んなことねえよ？ 副長の気持ちはよくわかってるから！ なあ？」

トリス 「そうだよー。なんてったって世界一大事な妹だもんないー」
ダイナ 「大好きな妹だもんないー」

ユアン 「そりゃアーサー様の話ばかりされたら寂しいよないー」
キルシュ「シスコンの副長には耐え難いよないー」

俺 「そーかそーか、お前らがそんなに死にたがってたとは知らなかったぜ。すぐ楽にしてやる」
バカども『ギヤアアアア！』

ふう、スッキリした。いいストレス解消になった。とりあえず喋った奴は全員撃った。黙って苦笑いしてただけの奴らは見逃してやった。神のごとき慈愛を持つ俺、さすがだ。

でもさ、でもさ、その後がもっとヒドイのよ。もっと可哀想なのよ、俺。

「ちょっと！ 何も撃つことないじゃない！ みんなに謝りなさい！」

え、この子お母さん？ 俺のお母さん？

エルメス激怒。まさかの命令口調。あまりの剣幕に思わず怯んじやった俺。

「カイはいつもすぐ撃つんだから！ やめなさいって何回言われたらわかるの！」

「いや、でもこいつらが……」

「言い訳しない！ 今度やったら爆破するわよ！」

「ご、ごめんなさい」

「謝る相手が違う！ みんなに謝りなさい！」

「ごめん……」

完全にお母さんに怒られるガキだよ俺。つーかブチギレたエルメス超怖ええ。普段が温和なだけに温度差が半端ねえ。爆破するって言われた時マジ冷や汗かいたぞ。

しかしエルメスは俺に言っではいけないことを言ってしまった。

「どうしてそんなにバカみたいに撃つの！？ 全く！ 変なとこばかりアーサーさんに似て！」

一瞬、どこの世界のホームドラマ？ と思っただけど、聞き捨てならないセリフにアドレナリンが再活性。本来の俺、復活。

俺 「テメエ、今なんつった？ 誰が誰に似てるって？」

エルメス 「カイの変なとこがアーサーさんに似てるって言ったの！」

俺 「そりゃ聞き捨てならねえな。眉目秀丽・豪放磊落・品行方正な俺様があんな自己中横暴吸血鬼と似てるわけねえだろ！」

エルメス 「品行方正の方が聞き捨てならないけど！？ 自己中横暴

吸血鬼なんて、カイの為にあるような言葉じゃない！ 加えて鬼畜！

ガルフ 「更に付け加えると狂犬」

パーシー 「歩く嫉妬心」

デイナ 「歩く独占欲」

リオ 「つまり極度のシスコン」

俺 「更に言うなら優秀・有能・秀才・完璧！ それが俺！」

エルメス 「カイはどこまで強欲なの！？ バカじゃない！？」

ガラード 「ていうかシスコンは否定しなくていいの？」

俺 「忘れてた！ する！ 全否定！」

ベデイ 「全否定したらバカしか残らねえじゃん」

エルメス 「カイって結構バカだよな」

俺 「黙れ！ お前に言われたくねーんだよ！ アルティメツ

トバカ！」

エルメス 「アルティメツト！？」

このバカは究極のバカなだけに、とんでもねえ事を言いやがる。似てる？ 俺が？ アーサーに？ 冗談じゃねえ。欠片も似てねえよ。共通点があるとしたら性別くらいなもんだっつもの。

「お前よお、冗談は顔だけにしろよ、マジで」

「ヒド！ なんでそう言うこと言うかな！」

「事実だから。大体アーサーつつたらさあ、自己中・性悪・人格破綻者・傲岸不遜・陰険・卑怯・横暴・乱暴・粗野・エロオヤジ。どこも俺と共通点ねえよ」

「全部該当するよ！？ 今のまるつきりカイの自己紹介じゃん！」

「んなわけねえだろ！ あんな化け物と一緒にすんな！ 俺は地上に舞い降りた高尚かつ崇高な天使だぞ！」

「よ、よくそんな事を恥ずかしげもなく言えるね・・・ある意味尊敬するよ」

「おう、尊敬しろ。俺に跪き傳き敬い崇め、奉れ」

「・・・カイツて、すごいね」

「ようやくパーフェクトバカにも理解できたか。引き続き俺を敬愛しろ」

「うん、もう相当引いてる」

何なんだこのクソ生意気でバカな小娘は。アーサーの躰がなつてねえから俺はこんな不当な言い様をされてんだぞ。アンタみてえなのをモンスターペアレンツと呼ぶんだ。そのガキも親に似てモンスターだ。こっちはたまつたもんじゃねえ。

エルメスといいシユヴァリエといい、俺の周りはバカばつかだ。

嫌がらせか。もしくはこれが俺に対する神の報いか。冗談じゃねえ。

でもとりあえずバカどもは一応大人しくなつたから俺もソファに腰かけたら、ずっと黙ってたランスが隣に座ってきて俺に耳打ちした。

「本当はアーサー様に似てると言っていただけで嬉しいでしょう？」

急に何を言いやがるんだこのクソガキは。何を根拠にそんなイカれた発言をしゃがるんだこのクソガキは。

俺の目から放たれるふざけんなビームに気づいたランスは再び耳

打ちした。

「エルメス様の為に何にでもなりたいカイ様には本望でしょう？」
「は！？ なに！？ 何言ってるの！？」
「アーサー様の代わりになるとおっしゃったじゃありませんか」
「おま、お前聞いてたのか！」
「ええ、カイ様のメソメソ言う声で目が覚めましたから」
「メソメソなんてしてねえ！」
「しましたよ」

俺としたことがなんたる失態。あれを他人に、よりによってこの腹黒のクソガキに盗み聞きされるとは、大失態にも程がある。自殺級シヨック。

慌ててランスを引つ掴んでその場から逃亡すると、案の定、悪魔の囁き。

「みなさんに知られたくはないでしょう？」
「テメエ今度は何が目当てだ。金か？」
「お金なんて要りません。僕の頼みを聞いてほしいだけですよ」
「要求はなんだ」
「勿論エルメス様です」
「出た・・・とうとう本性表しやがって。お前がエルメスをオトすのを黙認もしくは協力しろってか」
「察しが良くて助かります」
「お前見た目草食系なのに、なんでそんなに獰猛なんだよ。いつそお前の野生が恐ろしい」
「カイ様だって野獣の様にエルメス様に襲い掛かったじゃないです」

か

「お前・・・お前本当いい加減忘れる。俺は今それどころじゃねえんだよ。なんでお前が当人以上に根に持ってんだよ」

「勿論わかってますよ。今のカイ様にそんな気が微塵もない事も、エルメス様を大事にしてらっしゃることも。ですが、僕はそれが許せません」

「は？　なんでだよ。これ以上のノープロブレムは存在しねえ」

「いいえ、大問題です。できる事ならエルメス様に近づいてほしくもありません。ですが、それがエルメス様の望みなので、僕は渋々容認しているにすぎません」

「お前本当どんだけだよ・・・」

アーサー、ヤベエよこのガキ。相当だよ。もう病気だろ。アンタ本当にうかうかしてらんねえぞ。コイツの策略好きと腹黒さと卑怯さはアーサーを彷彿とさせるな。

ていうかさあ、まあ人には色々欠点なり長所なりあるわけじゃん。でさあ、よく考えてみたらさあ、別にアーサーに似てるところがあるのって俺だけじゃない気がする。

ただ単にアーサーが人の悪い部分の集大成ってだけであって、たまたま一致するようなところはみんなあるぞ。

要するにアーサーは悪の代名詞。OK？　仮にアーサーの資質を継ぐ奴がいるとしたら、俺の目の前でニヤリと笑うこの薄気味悪い腹黒のクソガキだろう。間違いねえ。

「っーかお前、さっさと諦めやがった上に卑怯くせえ。騎士で紳士

「じゃねえの？ 恥ずかしくねえの？」

「カイ様、ご存じないんですか？ 本物の騎士あるいは紳士は、悪にすら喜んで手を染めるものです」

「それは主人の為にだろ。お前は自分の本能に忠実なだけじゃねえか」

「いずれエルメス様は、僕なしでは生きていられないようにして差上げます。それこそがエルメス様の幸せですよ」

「おま……どこでそんなセリフ仕入れて来るんだよ。お前本当に11歳？」

恐ろしい……一応上司としてコイツの面倒を見てきたが、こんな恐ろしい奴に育つとは……ガラードと何が違ったんだろう、コイツ。

ガラードは俺に似てあんなに素直でいい奴に育つたのにコイツときたら。多分コイツの企み好きはジュリオ様の影響だな。間違いない。

アーサー、このガキヤバいぞ。本当にヤバいぞ。弱みを握られた以上、俺はもうエルメスに賭けるしかないぞ。今はまだアーサー、アーサーってばかり言ってるけど、その内寝取られるぞ、文字通り。

あ、でもエルメスがウザくなくなるなら、それはそれでいい気もするな。うん。やっぱ俺ランスに着くわ、悪いけど。決めんのはエルメスだ。せいぜい頑張れ！ 八八八八八！

以上

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

報告

結局あれからどれほど頭を悩ませてモミラーカさんの本名はわからなくて、まあ当たり前なんだけど。どうせならインドに連れてきて、クリシュナさんと一緒に眠らせてあげようという事になった。

「本来ならちゃんと生まれたところの方がいいんだらうけど、クリシュナと一緒にならミラーカさんも寂しくないよね」

「そうだな。お前も毎日会いに行つてあげられるしな」
「うん」

実際にミラーカさんを迎えに行けるのはまだ少し先になりそうだが、今あの城に行つて、ヴァチカンの調査員にバッタリ遭遇、なんてことになったら本末転倒だからな。

話の流れで、エルメスがミラーカさんのことを話してくれた。

「ミラーカさんはアーサーさんの次に出会つた吸血鬼で、私が吸血鬼化したばかりの頃からずっと一緒だったんだ」

「ふーん、じゃあ付き合い長いんだな」

「そうだよ。アーサーさんと暮らし始めた当日に紹介してもらつたから。その頃はね、ミラーカさんアンティークショップやってたの。無許可営業だったけど」

そう言うところエルメスは壊れてしまったコバルトブルーの髪飾りを取り出した。これが壊れてしまったのはあの戦いのせい。ジュリオ様に髪の毛を掴まれた時に一緒に握りしめられて割れてしまった。

「これはね、その時にミラーカさんがくれたの。出会つた記念に、お友達になつた記念につて。私すつごく嬉しくて、使うのが勿体なさ過ぎて、自分の結婚式とあの時しか使つたことなかったんだよ。だけど、壊れちゃうならもつと普段から使つてあげればよかった」

エルメスは髪飾りを握りしめて悲しそうに俯く。あの日の彼女の死は、彼女の死に方は俺の目から見てもエルメスにとっては恐らく一番心残りだ。ミラーカさんはエルメスとアーサーを守るために、ずっと封印してた力を解放してしまった。そのせいで死んでしまった。

彼女はそれが使命なんだと言ってたし、それは讃えてあげるべきだ。彼女は立派に使命を全うして、そのおかげで今エルメスは生きてる。彼女のあの決断があつたからこそ、今のエルメスがある。だけど、わかつてはいてもエルメスは後悔せずにはいられない。

「アーサーさんにとってのミラーカさんは、私にとってのカイと同じだったのよ。100年前からずっとアーサーさんを支え続けて、私の事にしても他の事にしても、私達に相談できないような事でもミラーカさんには頼ってた。本当にアーサーさんにとってミラーカさんはとても大事な人で、特別な人だったの。あの時のアーサーさんの辛そうな顔が忘れられないの。あの時のミラーカさんの涙が忘れられないの」

あの時の事を思い出す。涙ながらに微笑んで幸せだったと言いながら消滅したミラーカさん。普段の様子からは想像もつかない程取り乱して、ミラーカさんの砂に縋り付いていたアーサー。その隣で慟哭するエルメスの姿。

エルメスの言う通り、アーサーにとってミラーカさんは唯一無二の親友だったんだろう。後になってガードから聞いた話だと、スパイ活動の事もミラーカさんだけは最初から関与してたと言ってた

し、立場的にも心理的にも彼女はアーサーの相談役だったんだな。

「ミラーカさんにとってもアーサーさんは本当に特別だった。あの二人が並んだところは綺麗で、とても綺麗だけどなんだか悲しくてきつと二人とも同じ悲しみを背負って、二人で乗り越えてきたんだと思う。だから私の事もとても大事にしてくれたの。いつも可愛がつてくれて、妹みたいに大事にしてくれた。大好きな優しいお姉さんだった」

泣きながらそう言うエルメスにとっても、ミラーカさんは特別だったんだろう。吸血鬼になったばかりの時から傍にいた姉。そういえば俺とエルメスがケンカした時も、真っ先に文句言ってきたのはいつもミラーカさんだった。

そう思い返してみると本当にエルメスを大事にしてたんだなあ。
・
・
・
もしかして、俺嫌われてたかも。

「私とアーサーさんの為に命を張って、魂を代価にして使命を果たしたミラーカさんには本当に感謝してもしきれない、謝罪してもしきれない」

「そうだな。でも、お前もわかってると思うけど彼女は立派に使命を果たしたんだから、ちゃんと讃えてやれよ」

「うん。でも、できることならアーサーさんの為に、ミラーカさんには生きていてほしかった。ミラーカさんが居なくなってしまつて、アーサーさんは心の拠り所をなくしてしまった。帰ってきて、きつとミラーカさんが居ないことはアーサーさんにはとっても辛い事だと思う」

「確かにそうかもしれないな。100年以上もずっと傍にいた親友

がいなくなるなんて、想像するだけでも辛いな。それほどの時間を一緒に過ごしてきて、きつとあの二人は友達の域なんて超えてたんだろっな」

「そうだね。きつとあの二人は心で深く繋がってたんだよ。心で繋がった兄妹、心友だったんだよ」

「心友か・・・」

話ながら考えた。もし、同様に俺の前からエルメスががいなくなってしまうたら？ 想像すらしたくねえ。エルメスのいない世界を想像できねえ。想像するだけで辛い。俺が想像だけで味わう以上の辛さを、アーサーは帰ってきてから実際に体験しなきゃいけない。

きつとアーサーはとても辛い思いをするだろうし、きつと一生忘れられなくて後悔もするんだろう。そんなアーサーを見て、エルメスがどれほど悲しむか。

「それほどの人がいなくなってしまうって、アーサーさんはきつと帰ってきてもすごく悲しむ。ミラーカさんが居ないことはアーサーさんにはきつと耐え難いこと。だから私が支えてあげなきゃ。私がミラーカさんの代わりにならなきゃ」

エルメスは、本当にアーサーの為に生きている。だからこそきつとエルメスはアーサーの支えになれると思う。でも決意をしたような眼でそう言ったエルメスは、すぐに落ち込んだような顔をした。

エルメスはミラーカさんじゃないから、及ばない部分もあるとわかってる。だからその事で、すごく苦悩すると思う。考えればすぐにわかることだ。

でも、そう考えていて気付いた。俺とアーサーとの決定的な違い。エルメスがミラーカさんの代わりに、俺がアーサーの代わりにならない理由。

「お前は多分ミラーカさんの代わりにはなれないんだろうな」

「・・・そうだと思う」

「でも、それはお前の力不足とかじゃないぞ」

「え？　じゃあ、なに？」

「元々の関係が違うからだ。人にはそれぞれ役割があるだろ。友達には親にはなれない。家族は恋人にはなれない。人には決まった相手にしか見せない決まった顔がある。ミラーカさんの席はミラーカさんだけの物だ。アーサーにとってのお前はお前でしかない。お前以外にはなれないんだよ。だからこそお前にしかできないこともあるんじゃないか。お前にしか見せない顔もあるだろ」

「・・・そっか、そうだね。そうだよな」

他人が他人の席を補うことは、その関係が深ければ深いほど不可能だ。その人はその人でしかない。その人の席は空けておかなければならない。本人がその席を整理できるようになるまで。

それができるようになるまではきつと苦しむ。心に穴が開いたみたい言葉があるけど、本当にそうなんだろう。けど、それは自分で乗り越えなきゃいけない事だ。むしろ誰かを代理に立てるなんてことはするべきじゃねえ。それは、本来の席の持ち主に対して、代理にしようとした人に対しても冒涇以外の何物でもない。

それこそかつてエルメスは経験している。“ミナ”の人形。人形が手に入れば楽だろう、自分から人形に成り下がって、人形になりきってしまえば楽だろう。でも、人は人形じゃねえ。エルメスはエルメスだ。俺は俺だ。

エルメスにとってのアーサーは、師であり父であり主人だ。エルメスにとつての俺は友達であり家族であり臣下だ。最初から決定的に違うんだ。根本的に違う。俺がアーサーになることは最初から不可能だった。俺が俺以外になることは、最初から無理なことだった。

「カイはいつも私の事を考えてくれてるけど、全然私の事見てくれてない」

あの時のエルメスの言葉の意味がようやく分かった。俺が見ていたのはエルメスの向こう側にいるアーサーで、アーサーならどうするかって事ばかり考えて、エルメスが俺に求めているものに目が向いてなかったんだと気付いた。俺が俺であることを忘れていた。

でも、それなら俺にしかできないことだってちゃんとあるはずだ。エルメスが俺にしか見せない顔があるはずだ。それに俺がちゃんと気づいてやらなきゃ。

とりあえず、一つだけアーサーに頼みがある。エルメスは以前アーサーに人形扱いされていた時に傷ついたと言ってた。それでも今

アーサーの為にミラーカさんの代わりになりたいと思った。

きつとアーサーはミラーカさんが居ないことにとても傷ついて辛い思いを思うけど、できることならエルメスの思いを汲んでやってほしい。傷ついて尚、自ら人形に墮ちようとしたほどの思いを、いつかわかってやってほしい。すぐには無理でもな。とりあえず、それだけ。

以上

拝啓 アーサーさん

今日はちょっと私の悩みを聞いてください。

カイは普段からいつも私の事を考えてくれて、自分のことを後回しにして、辛い思いを押し込んで、私を励まそうとしてくれます。いつもたくさん心配かけて、いつもたくさん助けてもらってます。

だけど、私は助けてもらってばかりで、カイを助けてあげられません。カイが背負うジュリオさんへの罪悪とか、あの戦争で受けた悲しみを私が癒してあげることが出来ません。

それをカイに話したらやっぱりいつも通り別に、みたいな、俺はいつも自分最優先だ、みたいな感じで。私じゃ助けにならないのって聞いたら、バツカじゃねーの、みたいな顔されて。

だけど、カイは私にいつぱい助けてもらったって、救われたからって言ってくれたんです。でもカイはずっと辛そうな顔してるから、今は何が辛いのかって聞いたら、アーサーさんが居なくて私が泣いてることが辛いつて言ってたんです。

私はそれを聞いてとても嬉しかったけど、とても悲しく思いました。カイは何にも悪くないのに、私の悲しみをカイにまで背負わせてしまっていると思うと、とても悲しくなりました。

私はやっぱり災厄だったようです。私はいつも助けてもらってるのに、私がカイを苦しめてたんです。その事が、すごく悲しかった。

それなのにカイは、いつも助けてもらってるのは自分だからって、お前を救ってやれなくてゴメンって、傍にいる事しかできなくてゴメンって謝るんです。私にはそれがとてもとても辛かったです。

私には、カイが傍にいてくれるだけで十分なのに、たくさん助けてもらってるよって言うてるのに、カイは全然わかってくれないんです。

ずっと自分を責め続けて、アーサーさんの代わりに、クリシユナと北都の代わりに、私の幸せの為になら何にでもなるとまで言って。そこまでカイを追い詰めてしまった自分が、許せない。

だから、せめて私の泣き顔をカイに見られないように、と頑張ります。それに気づかれたら怒られちゃうかもしれないけど、気付かれなきゃいいかと思って。

でも、問題はここからです。

この前ちょっと色々あって、なんだか最近とてもアーサーさんに会いたくて、本当にどうしようもないくらい会いたくて。それをずーっとカイに言っていたら、さすがにうぜえって呆れられたんですけど。

そしたら、それを見てたシュヴァリエのみんながまたシスコンとか言い出して、それでカイが怒ってみんなを撃っちゃったんです。それはさすがにあまりだと思って、私が怒ったら一応おとなしくなっただんです。

でも、前から思ってたけど、アーサーさんとカイって普段は仲悪かったけど、妙なところで意気投合してたじゃないですか。なんか変なところばかり似てると思ってて。

アーサーさんもちよとしたことですぐクライドさんをランチしたりしてたし。だからそれを言ったらカイがものすごい怒り出して。

なんか色々言っていましたけど、自分は優秀で完璧で品行方正だから、あんな自己中横暴吸血鬼と一緒にすんな！ とか言い出して。もう、何を言ってるんだこの人、と。

しまいには、俺は地上に舞い降りた天使だとかアホみたいなこと言いだして、本当にこの自信は一体どこからやってくるのかと呆れました。というか、引きました。

この前はあんなにメソメソ言っていたのに、相変わらずキャラに定まりがないと言つか、いつそ二重人格なんじゃないかと思う程です。というか、絶対二重人格です。良い人の時と悪い人の時でギャップが激しすぎます。いつそ異常者です。

メソメソしてる時のカイはあり得ない程自信喪失してるのに、普段が異常なほど自信満々なのはなぜですか？ どっちが本物なんですか、あの人。もう私にはわかりません。意味がわかりません。

どっちも共通してるのは、結局私の話を聞いてないことです。普段はまあ当然ですけど、メソメソバージョンの時だって、私は助けてもらってるって何度も言ってるのに、全然聞いてなくて助けてやれないって言い張るし。結局私の意見無視ですよ。

つまるところ、あの人自分の考えに絶対の自信があるんですよ。それがいい事でも悪い事でも。しかも思い込みも激しい。俺がそうだったつたらそうなんだよ！ですよ。

私の意見なんか聞きやしないんですよ。私が私のこと言ってるのに完全シカトですよ。世界はカイを中心に回ってるみたいです。

なんかそう考えると、カイの為にと思って隠れて泣いたりしてたのがバカみたいに思えてきました。私は何しても、何もしなくても、カイが考えを改めない以上は変わらない気がする……。そう思いませんか？

あ、でも一つだけ改まったみたいでした。さっきも書いたけど、カイは自分がアーサーさんの代わりにならなきゃってずっと思ってたみたいだったんですけど、それは考え直したようです。

実はミラーカさんの事で少し話したんですけど。ミラーカさんはアーサーさんにとって本当に特別な人で、大事な友達だったでしょう？ だから、アーサーさんがすごく辛い思いをするだろうって思ってます。

だから、アーサーさんが帰ってきたら私がミラーカさんの代わりにアーサーさんを支えてあげなきゃって言ったんです。

そしたらカイが、人には役割があって、その人にしか見せない顔があるから、その人の席はその人の物でしかないって。私は私でしかなくて、だからこそ私にしかできないことがあるって言うてくれたんです。

そう言われて、確かにそうだなあって思って。私は逆立ちしたってミラーカさんにはなれないし、逆にミラーカさんも私にはなれないですもんね。

だから、私は私なりにアーサーさんを支えようって。私にしかできないことをしようって思いました。

そう言えば以前クリシュナに、自分にできる事、自分にしかできないことを考えて実行した方が建設的ですよって言われたのを思い出しました。なるほど、こういうことなのね、と思いました。

カイも自分で言いながら、それだ！ みたいな顔してたので、少しはカイの肩の荷も降りたんじゃないかな、と思います。

私もカイも今は五里霧中を試行錯誤しながら歩いてるけど、この1か月で色んなことを考えて、色んなことが見えてきました。少しだけ、霧が晴れてきた気がします。

アーサーさん、今カイが傍にいてくれることで、より強く思います。ミラーカさんが亡くなってしまったことが本当に心残りで、残念でなりません。

アーサーさんが帰って来た時に、もう今まで支え合ってきた親友はここにはいない。その事を思うと、アーサーさんがどれほど悲しむかと思うと、苦しくて仕方がありません。

アーサーさん、残念だけど、私ではミラーカさんの代わりにはなれません。私はミラーカさんほど世界の事も人の事もわからないし、アーサーさんの事にしてもその気持ちを深く理解してあげられないかもしれません。

だけど、私は私なりにあなたの支えになります。前に約束した通り、ずっと傍にいます。どこにもいきません。一生あなたの為に生き続けます。

私ではあまりアーサーさんの役には立てないかもしれないけど、絶対にあなたを一人にはしません。ずっと傍にいますから。それだけは約束します。それだけは私の役目、私の使命です。誰にも譲つてあげないんです。

きっと私は前の様に一生懸命あなたの背中を追いかけるんだろうけど、あなたの後ろで背中を見守って支えるのが、私の使命です。そこが私の席です。たまに振り返って呆れたように笑う、あなたのその笑顔を絶やさないようにずっと傍にいますから。

アーサーさん、あなたに早く会いたいです。もう1か月も経ってしまいました。あなたに会いたくて、会いたくて、会いたくて、どうにかなってしまいそう。

あなたはいつ帰ってくるんですか？ もう1か月も経ったのに、まだ私は待つんですか？ まだ、ただいまと言ってくれないんですか？

早くあなたに会いたい。早く帰ってきてください。じゃないと、アーサーさんが帰って来た時に話すことが多すぎて、話す方も聞く方も大変ですよ？

まあ、いつまでも待ちますけどね。でも、ホントに帰ってきてくださいよ？ 絶対ですよ！ じゃなきゃアーサーさんの正体みんなバラしちゃいますからね！

敬具

FILE - 14 Cigarette 「煙草」

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動報告

やはり、俺は間違っていたようだ。俺の教育方針も、考えも。俺が甘かった。でも俺は悪くねえ。

「カイー、明日お買い物行きたーい」

「そーか。行って来い」

「一緒に行こうよ」

「断る」

「行こうよー!」

「断固拒否」

「行くの! 命令なの!」

「お断りします」

「んもー! ケチ!」

「ケチじゃねえ。ランスと行け」

我儘でうぜえこのバカなお嬢ちゃんは、買い物に行くのだとうるさい。前回の事があるから、俺は二度とコイツと外出したくないんだけど。

そんなやり取りをしてランスに押し付けようとしたら、ランスが傍まで寄ってきた。

「僕が同伴するのは構いませんが、それでもカイ様にはご同行頂きたいと思います」

「ああ？　なんでだよ」

「エルメス様になにかあつたらどうなさるんですか？　シユヴァリ工なんですからちゃんとお守りするのモ仕事のはずですよ」

「アイツが人間に負けるわけねえだろ」

「それだけではありません。また以前の様に警察沙汰にでもなったら、僕には対処しかねます」

そうだった。忘れてた。以前こいつはランスと出かけた際に迷子になった拳銃、ギヤングを壊滅させた上に警察沙汰にまでなったんだった。

あの後大変だったな・・・教理省の枢機卿（表）のジーサンから

「さすが、と言っておきましょう。さすがに殲滅機関を率いるキング枢機卿の部下だけに、大したじゃじゃ馬ですな。しっかり手綱を握って、調教するがよろしいでしょう」

とか嫌味言われて、特務機関聖堂騎士ハラティンの機関長からも文句言われて。散々だったな・・・

全く、何がどうなったらそうなるんだ。アーサーの躰がなくなってねえせいだぞ。あんな面倒事は金輪際ごめんだ。コイツを野放しにしておくのは危険だな。

そう言う結論に至って、俺も渋々同伴することにした。

んで、翌日。

「カイ様！ 歩くのが早いです！ エルメス様に合わせてください！」

「ああ？ 何言ってるんだ。お前らが俺に合わせる」

「何をおっしゃるんですか。それでもシユヴァリエですか？ それでも筆頭なんですか？」

「これでもシユヴァリエ筆頭だ」

チクシヨ―腹立つ、このクソガキ！ こいつのせいで終始険悪ムードだよ。コイツ空気読むとかそう言うのしないわけ？ 面倒くせえ。腹立つ。

で、イライラしながらもなんとか一度も迷子にならずに、エルメスの行きたがってた靴屋に到着。迷子にならなかったのはよかった。そこは。

椅子に座ってポケーっと買い物をするランスとエルメスを眺めて

たら気付いた。ランス、デカくなったなあ。ガキは成長が早ええな。

「カイ、お待たせー」

「お待たされ。エルメスお前身長いくつ？」

「ん？ 150だよ」

「ちっさ！ ガキか！」

「東洋人は西洋人に比べたら小さいものなの！」

「だとしてもチビだろ」

「まあ、だとしてもチビだけど」

「ちよつとお前ら二人背中合わせに並んでみる」

買い物を済ませて戻ってきた二人を早速比較してみることにした。二人を背中合わせに並ばせて、頭を合わせてみる。

「お、ランスもう少してエルメス追い抜くんじゃねえか」

「本当ですか！？」

「ああ、あと3センチ位」

「ウツソ！ もうランスに追い抜かれちゃうんだ。やっぱり子供は成長早いねえ」

「来年なつたらとつくに追い越してんだろうな」

「うわあ、嬉しいです。僕も早く大人になりたいなあ」

「今から大人んなるのなんかあつという間だぞ」

「へえー・・・」

エルメスと出会ったばかりの頃、約3年前はまだほんのガキだったんだけどなあ。ガキの成長はいつ見てもいいもんだ。ランスは自

分の成長が嬉しいようでも終始ニコニコだ。10代の時間なんて本当にあつという間だから、コイツもすぐに大人になっちまうんだろうな。

「カイ様は身長いくつですか？」

「180ちよい」

「デカ！ ムダに！」

「ムダじゃねえ」

「じゃあ僕は185目指します」

「目指したからってなれるもんでもねえけどな。つーか何そのムダな負けず嫌い」

「大人になつてまでカイ様より劣る部分があるなんて、自分が許せません」

「どつという意味だコラ」

なんでコイツこんなにムカつくの？　なんで俺に負けたくないの？　もしかして俺見下されてんの？　俺はコイツ喜ばせてやったのに、この言いようはどついうことだ。なんなんだよ、腹立つ。

店を出てそんなことを考えながら歩いてたら、通りすがりに男に肩がぶつかった。サーセン、と声をかけてそのまま行くとしたら急に大声でまくしたてられた。が、何を言ってるのかが分からん。

「エルメス、アイツ何言ってるの。何語？」

「あれはヒンディ語だね。ぶつかつていて謝罪もなしかつて」

「あー、じゃあゴメンって言っとけ」

「うん」

エルメスが間に入ってその男を宥めはじめた。でも、事態は俺の予想だにしない展開に。エルメスとその男が段々険悪になってきて、大声で口ゲンカを始めた。

「ちょ、エルメス！？ 何やってんだお前！」

「だってコイツ調子乗るんだもん！ 病院行くから金出せとか言うから！」

「ああ？ 面倒くせえ。んなもんやりやいいだろ。ホラよ、拾え」

財布から金を抜き取って男の前にはら撒いてやった。で、男が金を拾ってる間にエルメス引き摺ってその場から退散。

「なんかカイ、成金の超ムカつくオッサンみたいだったよ」

「お前ね、誰のせいだと思ってるんだ。しなくて済むケンカ始めたのは誰だ。なんでもかんでも拾ってくんじゃねえよ、バカ犬が」

「そうですねよ、エルメス様に何かあったらどうするんですか。ケンカはダメですよ」

ランスにまで説教されたエルメスは、くっ、みたいな顔してる。そりゃランスでも説教すんだろ。この点に関して俺に同意しない奴はいねーはずだ。

しかし、街を見ていて気付いた。首都なだけに色んな地方から人が集まるものなんだろうが、さっきのヒンディ語と云い、街中では

色々な言語で会話がなされてる。洋服を着た男、サリーを着た女。近代的な建物にムガル帝国時代の名残を残す建造物。混在する文明に目を奪われる。

「インドは文化が多样だな」

「そうだよ。インドは国と言うより大陸だって言葉がある位だもん。人種も文化も言語も多種多様。面白いよねえ」

「ふーん、すげえな」

「そういう多種多様なインドの文化とかが面白くて、クリシュナは宗教とか歴史とかを研究してたんだよ」

「ふーん、つか吸血鬼なのに宗教研究してたのか」

「そうなの。クリシュナって変わってるよねえ」

クリシュナさんを思い出しながら笑うエルメスに何となく可哀想な気がしてきたが、それ以上に嫉妬むき出しの視線をぶつけるランスが気になる。

しょうがねえだろそこは。お前、思い出位ひたらせてやれよ、と内心呆れた。

思わずランスに溜息を吐いて次の店に入ると、蒸せかえるような香の匂い。

「うっ！ くっさ！ 気持ち悪！」

「本当・・・どうしよう」

「お二人ともどうなさったんですか？」

「この香が気持ち悪い」

「……そうでしょうか？」

「前に同じの嗅いだことある。ミラーカさんが言った。サンダル
ウツドっていう儀式に使われる香だって」

「なるほど、道理で。オイ、さつさと済ませてさつさと出てこい」

「え？ カイは？」

「こんな臭えとこいられるか。俺は外で待ってる」

「わかったー」

しばらく外で待っていると、青ざめた顔をしたエルメスと、その後から心配顔をしたランスが出てきた。

「気持ち悪い……」

「どっかで休むか？」

「うん……」

近くに公園を見つけてベンチに座ると、エルメスはランスに膝枕
されながらうだりはじめた。煙草に火をつけてその様子を見てい
たら、エルメスがファイとこっちに顔を向ける。

「うう、今はその煙草の匂いがすごくいい匂いに感じるよ」

「さっきのアレに比べりゃあ、だろうな」

「カイ様、煙草って美味しいんですか？」

「吸う奴にはな。ランス、お前も吸ってみろ」

吸っていた煙草をホレ、とランスに向けると、ランスは慌てて首を横に振る。

「い、いいです！」

「お前早く大人になりてーんだろ？ 俺にできることができないまままでいいわけ？ 俺はお前くらいの歳にはもう吸ってたけどなあ。非喫煙者はシユヴアリエン中じゃお前だけだぞ」

「ええー……」

「ちよつとカイ、ダメよ。ランスはまだ子供なんだから」

出た、お母さんエルメス。うぜえ。

起き上がってきたエルメスは俺の手から煙草を取り上げ横に離すと、煙草は一瞬で灰になってその場にサラサラと散っていった。

「エルメス様すごい」

「っーかソレまだ吸ってたんだけど」

「あ、ゴメン、つい」

怒られた上に一瞬で灰になったマイハニー。エルメス許すまじ。でも慈愛にあふれる俺はあっさり許して新しく火をつけた。

「そういえば、煙草変えた？ なんか匂いが違う」

「そりゃな。こっちで同じの売ってねえから」

「それもそっかあ。ていうか、やめようと思ったことないの？」

「ねーな。コイツと共に生きてコイツと共に死ぬの、俺は。俺が死

んだら棺に煙草10カートン入れろ。墓にも花じゃなくて煙草を供えろ」

「どんだけ・・・仮に私がやめてって言ったらやめる?」

「絶対やめねえ。意地でもやめねえ。つーかやめてほしいわけ?」

「んーん、別にどうでもいい」

「どうでもいいのかよ」

日の暮れた公園で紫煙をくゆらせる俺。素敵すぎる。ハードボイルド、俺。いや、ハードボイルドではないな。ニヒリスト、俺。いや、ニヒリズムに煙草は関係ねえ。ワイルドビューティ、俺。そうだ、これでいこう。

そーいや、吸い始めた頃はよくジュリオ様に隠れてみんなでコソコソやったなあ。で、ソッコー見つかって怒られたっけ。懐かしい。ジュリオ様は煙草、嫌いだったからなあ・・・

「!」

「カイ? どうしたの?」

「いや・・・なんでもねえ」

「でも、なんか顔色悪いよ?」

「なんでもねえよ」

煙草から昔の事を思い出して、ジュリオ様の事を考えた瞬間に、あの日、ジュリオ様を殺した瞬間の映像がフラッシュバックした。

エルメスの手前と言つのもあるけど、それ以上に自分の為に見て

見ぬふりをしている感情、罪悪感。言い訳をしようもないほど、俺はジュリオ様を殺した事を心底後悔してる。

でも、その事をいつまでも引き摺ってたらエルメスが苦しむし、俺も苦しい。早く、忘れてしまいたい。早く、消えて欲しい。

もう二度と、大事な人を手にかけることはしないと誓うから、もう二度と、誰も裏切らないと誓うから、無理やりにも俺の選択を正当化させてくれ。

悪いのはジュリオ様だ。俺達を裏切って、エルメス達を裏切って、俺達を騙して、エルメス達を騙して、俺達の思いを蹂躪して、エルメスの家族を殺した。

悪いのはジュリオ様だ、俺のやったことは間違いなんかじゃない。主人の間違った判断を是正したに過ぎない。そうだ、俺は悪くない、俺は悪くない。

俺は悪くない・・・けど、あの人が好きだった。俺の、好きな父親。

正義の為に親を殺すのは、本当に正しい事なんだろうか。正義なんて立場が変われば悪にもなる。俺のやったことは本当に間違いじゃなかったのか。

仮に誰から見ても正義だ、と言ってもらっても、あの人に受けた恩を仇で返したことに変わりはない。俺達の出自がなんであれ、育ててくれたのはあの人だ。その事実が変わりはないのに。

何度も同じ葛藤を繰り返す。今まで毎日のように同じ問答を繰り返して、このメビウスの輪から抜け出された試しはない。

時間が忘れさせてくれるのを、待つしかないのか。

「カイ様、火、消えちゃってますよ？」

ランスに言われて煙草を見ると、根元まで短くなってとっくに火は消えていた。その場にポイと放り投げて足で踏みつけると、再びランスが口を開く。

「ジュリオ様の事ですか？」

「・・・別に」

「やっぱりまだ後悔してますか？」

「うるせえ」

「・・・カイ様、もしカイ様がジュリオ様で、僕やガラード様がカイ様だったら、あの時、あの瞬間、カイ様はどう思われますか？」

無駄な鋭さと不躰なランスにかなり腹が立ったが、言われて考えてみた。

もし俺がジュリオ様と同じように、どうしようもない憎悪に憑りつかれて同じことをして、ランスやガラードに殺されるとしたら、それはきつと、本望だ。

目的を果たすよりも、それほどの事をしても尚家族に看取られるなら、泣いてくれたなら、幸せなのかもしれねえ。

ジュリオ様は俺が嫌いになつてないって言つたら、じゃあいいや、
と言つてた。実に曖昧なニュアンスではあるけど、それは、そう言
う事なのかもしれない。

でも、それ以上にとりつかそれ以前に、自分の息子にそんな責を
負わせたくはねえから、そもそもそんなことしねえけど。

「元気でな、つてジュリオ様は最後に言つたんだよなあ」

「じゃあ元気じゃなきゃいけませんね。ジュリオ様を裏切つたと思
つて後悔してるなら、これ以上の裏切りはダメですよ」

「お前、生意気」

驚いたことに、全く持つてランスの言う通りだ。コイツの言う通
りだと思つのは相当癪なんだが、非常に遺憾ながら、なんか気が楽
になった。

しかし相当不本意だ。チクショー。エルメスはなんかニコニコし
てるし、腹立つ。部屋でサンダルウッド焚くぞ。あ、俺が嫌だ。煙
草の煙を充満させた棺にランスもろとも押し込んで、釘で棺の蓋を
打ちつけてやるう。そうしよう。

こんな風に、コイツらと楽しく元気に生きてりゃ、その内煙みた
い後悔も消えちまうんだろうな。

今日は、素直にそう思えた。

でも、その帰り道。

野良猫に魅了されたエルメスはまんまと迷子になった。

その内ヤキ入れてやる。

以上

FILE - 15 Cash 「現金」

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

第1期決算報告

これは由々しき事態である。

ペレアス「ヤバいな」

キルシュ「ああヤバいな」

ガラード「どうすんの？」

ガルフ「どうしょつか」

俺 「またトリスの力を借りるか」

ランス 「何をおっしゃるんですか。働けばいいでしょう。皆さん無職じゃないですか」

幹部一同 『シュヴァリエだ！』

シュヴァリエ幹部会議中。全員で頭を抱える原因は、金欠だ。

俺 「折角トリスが大金用意してくれたたつてのによお、お前ら湯水のように使いすぎなんだよ！」

キルシュ「あると使うもの、それが金じゃんよ」

俺 「だからつてお前ら限度つてもんがあんだろ。毎晩のように夜遊びしやがつて」

キルシュ「それ以外に俺ら楽しみないじゃん」

ガルフ 「まあ、確かにな。つーかカイだつて何から何まで全部アルマーニで揃えやがつて。人の事言えねえだろ」

ペレアス「しかもエルメスのもそのレディースラインで揃えてるし」

俺 「それは俺じゃなくてアーサーだよ！俺がやったのはアルマーニのエクステンジ！アイツにアルマーニは早ええ！」

ガラード「一緒じゃん」

俺 「一緒じゃねえよ！ ジョルジオ・アルマーニはエクステンジとは格が・・・」

ペレアス「ハイハイわかったわかった。副長のブランド解説は置いて、どうすんの」

シャンティファミリーに支払う迷惑料及び水道光熱費 月400万
シュヴァリエの遊興費 月800万

被服、日用品費 月500万
その他 700万

残金 150万

ガルフ 「どう考えても使いすぎだな」

ペレアス「どんだけインド経済に貢献してんだ」

キルシュ「お陰で俺ら繁華街では既に有名人だぜ」

ガラード「自慢してる場合じゃねーし」

ランス 「本当ですよ。遊ぶことしか能がないんですか？」

キルシュ「ランス、もうちよっと齒に衣着せようか」

俺 「バカ、ランスの言う通りだ。どんな遊び方してんだお前ら。これからは自重しろ」

キルシュ「なんだよー、自分はエルメスに貢いでるくせにさあ」

俺 「貢いでねーよ！ アイツが買えつてうるせーから渋々買
い与えてんじゃねーか！」

ガルフ 「それを世間では貢いでるっつーの。全く、どいつもこい
つも・・・」

この調子だと150万なんて3日で飛ぶ。金は天下の回り物と言
うが、どう考えても流してばっかで帰ってきやしねえ。

俺 「おい、お前らホストクラブでも働け。毎日が遊びだぞ」
キルシュ「やだよ。相手したいんじゃないかってされてーの。第一酒飲
めねーし。お陰でキャバクラ行ったら嫌な顔されんだからな」

ペレアス「キャバクラでもねえのにこの金額はすげえよ。一体どんな店で何時間延長して何件ハシゴしてんだよ」

キルシュ「ランスの前じゃ言えねー」

ランス「僕も聞きたくありません。虫酸が走ります」

キルシュ「ランス、もしかして俺のこと嫌いななの？」

ランス「僕は本来エルメス様しか好きじゃありませんし、エルメス様に色目を使う人は誰だって嫌いです。いつそ死ねばいいです。

この下種野郎」

キルシュ「クソー！ なんだよお前！ 超ムカつくんだけど！」

ペレアス「ランス、その辺にしとけ。泣くからコイツ。っーかお前も子供相手にキレんな」

俺「っーかランスの性悪っぷりはいつそ将来性を感じるな。

アーサーの後継はランスで決まりだ」

ガルフ「何言ってるんだよ。カイに似たんだろ」

俺「どこが！？ 俺に似たのはガラード！ ランスは微塵も似てねえ！」

ガラード「いや、俺はエルメス似だから。どうでもいいけど、何度脱線したら気が済むんだよ」

ガラードが溜息を吐きながらそう言って、思わずみんなで、そうだった、と現実を思い出した。その時会議室（という名のガルフの部屋）にノックの音が響く。

「カイー、いるー？」

「ああ、なんだ？」

エルメスがドアから顔を覗かせてきた。部屋に入ってきたエルメ

又は申し訳なさそうにしながら、俺に一枚の紙を差し出した。

「おま・・・俺は今この類の紙を見ると頭痛がするんだけど
「ごめんねえ」

エルメスの持ってきた紙はまさかの請求書。その額15万。こっ
ちの気も知らないで残金は135万に減少。

「てめえ15万も何に使いやがった」

「本」

「本!? 本で15万!?」

「うん。100冊くらい買ったよ!」

「買った買った! じゃねえよ! テメエ本ばっか買いやがって、
もう本棚入りきらねえだろ!」

「心配ご無用! 本棚も買ったよ!」

「そう言う事じゃねえよ! つーか余計な出費すんな!」

「うん、ゴメンね・・・これからは気を付けるよ。だから怒らない
で。ごめんね?」

「ハア・・・たくお前は・・・しょうがねえな。俺が払っという
やるから」

「わーい! ありがとうー! じゃあお願いね!」

「ハイハイ」

上機嫌で部屋から出ていくエルメスに深い溜息を吐いて振り返
ると、なぜか白い目線。

ペレアス「副長、エルメス甘やかしすぎ」

ガラード「なるほど、確かに貢いでる」

キルシュ「涙目の上目遣いとごめんね？ に騙されてんだぜ、このシスコン」

ランス「さすがエルメス様。カイ様をウマイ事手懐けましたね」

俺「は！？ 手懐けるってなんだよ！ 騙されてもいねーし！」

ガラード「それ否定したら副長が率先して貢いでる事になるよ」

俺「貢いでねーし！」

ペレアス「貢がされてんだよ」

ガルフ「エルメス意外と悪女だな。カイがエルメスにお願いされたら断れないってちゃんとわかってるぜ、アレ」

俺「そんなバカな・・・」

ガルフ「バカはお前な」

なんとということだ。したたか！ 女つてしたたかでズルい！ 畜生、俺の慈愛を弄びやがって、エルメス許すまじ！

怒りと悲しみに打ちひしがれる俺の気も知らねえで、シユヴァリエの奴らは何故か笑いだす。

ガラード「こんなに他人に振り回される副長見るの初めてだ」

キルシュ「確かに。俺らは女で遊んでたけど、副長は遊ばれてるよな」

ペレアス「確かに。俺も女には気を付けるわ。いい勉強になった」

ガルフ「確かに。でもカイは既に手遅れだな」

ランス「確かにそうですね。まあ、エルメス様がどれほどカイ様

を弄ぼうが全く問題ありませんが」

俺 「バカ言え！ 大問題だコノヤロー！ ざけんなよ、クツソオオオ！ 冗談じゃねえぞコノヤロー・・・アイツ、あのバカ女、その内目にモノ見せてやる。ヤツてやる、泣いて気絶するまでヤツてやる！」

エルメス「そんなことしたら芥子炭にするよ？」

幹部一同「ギヤアアア！」

突然現れたエルメスに一同仰天。エルメスは本当に突然、ガルフのベッドの上に正座して座っていた。

「おま、お前どつから・・・」

「その前に。あなた、謝罪と焼死、どつちにする？ それとも、バ・

ク・ハ？」

「すみませんでした」

「わかればよろしい」

思わぬ真相を突きつけられた上に、盛大に驚かされた上に、謝罪までさせられた。俺ちよつと可哀想すぎる気がする。アーサーは本当にどういう教育をしたんですかね。バカかと思えば変なところで妙に頭使いやがって。ムカつく。

ガラード「ていうかエルメス急にどつから、いつの間に？」

エルメス「エへへ、ジュリオさんにできることが私にできないはずがないと思って、本で勉強したのだ！」

キルシュ「もしかして瞬間移動？」

エルメス「うん！ 体を量子まで分解して自分の認識した座標で観測したの！」

ペレアス「量子力学か？」

ガルフ「ゴメン、全然意味わからん」

エルメス「要するに行つたことある所なら行けるって事！」

ランス「それはすごいですね。迷子の心配ないじゃないですか」

エルメス「うん。でも人前じゃ使えないけど」

俺「んなことより何の用ですかね」

俺の質問にエルメスは思い出したような顔をして、デケエケースを目の前に2つ置いた。

エルメス「お金盗つてきたよ」

キルシュ「は？」

エルメス「お金」

ガルフ「え、ていうか、盗つてきた？」

エルメス「うん。銀行から」

ランス「ご、強盗したんですか？」

エルメス「やだなあ、泥棒だよ！」

ペレアス「相変わらず悪趣味だな」

エルメス「趣味じゃないよ！」

そう言つてエルメスが開けたケースには札束がギッシリ詰まっていた。アーサー・・・アンタ本当にどんな教育したんだよ。まんま、本物の悪女じゃねえか。笑顔で泥棒したとか普通は言わねえよ。

「テメエ、なにやってんだよ。なんで勝手にそう言うことすんだお前は！」

「だって、お金ないって言ってたから」

「だからってお前、やって良い事と悪い事があんだらうが！」

「でも困ってたでしょ？」

「だからってこんな金使えるか！返してこい！」

「でも私達はいつも泥棒してたよ」

「マジか」

「マジ。それにホラ、いつも色々買ってくれるでしょ。貰うばかりって悪いし、私もたまにはみんなの役に立たなきゃと思って。だからそんなに怒らないですよ。ごめんね？」

「ハア・・・たくもう、本当お前はしょうがねえな。今回だけだぞ」

「うん！ありがとうございます！」

元気よく返事をしたエルメスはその場からフツと消えていなくなった。それに少し驚いたけど、さすがアーサーの眷属だな。何でもアリか。

エルメスも反省してるようだし、それに俺らの為にと考えてやってくれたみてえだから、今回は許してやることにした。次回からはやっぱりトリスに助力願う。まあ、結果的には一緒だけど。

ガラード「ていうかやっぱり副長エルメスに甘いよ」

ペレアス「エルメス甘やかすなって言ったの誰だよ」

キルシュ「俺らにはいつも厳しいくせに」

俺「バカ言え。今回だけだ。それに俺らの為だってんならしようがねえだろ」

ガルフ 「だからお前騙されんだよ。バーカ」

俺 「ああ!?!」

ランス 「カイ様は完全にエルメス様の傀儡ですね。アハハ最高！マジウケる！」

俺 「ランス、テメエ素に戻ってんじゃねえよ」

ランス 「次期息子、そして次期旦那候補のこの僕がマリオネットのカイより格上なのは当然じゃん。敬語遣ってやる義理ねーし」

俺 「誰がマリオネットだコルア！　っーか敬称くらいつけやがれ！　このクソガキが！」

ガルフ 「やっぱランスはカイ似だな」

俺 「黙れ！　うつせー！　クソボケチクシヨー！」

ペレアス 「副長が一番うるせーよ」

アーサー、俺もう本当どうしよう。タスケテ・・・泣きたい。色々ムカつきすぎてわけわかんなくなってきた。

俺はもう本当、なんなんですかね。どうしたらいいんですか。どうすればいいんですか。全員殺せばいいんですか。そうですか。わかりました。あ、心配するな。エルメスだけは見逃してやつから。

幹部のバカども「ギャアアアアアアア！」

アーサーの助言のお陰で、心の平穏を取り戻しました。だいぶスッキリしました。ありがとう。

ストレスフリーな俺、プライストレス。

以上

FILE - 16 Couple 「カップル」

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

【重要】アーサーへのクレーム報告

疲れた・・・俺にはね、正直理解できないんだよ、そういうの。
だから余計面倒くさい。

インドに来て既に一か月を経過。それで最近やっと少しだけ落ち
着いてきて、インドの生活にも慣れてきた。それで気づいた。

どうやら俺はシャンティファミリーの一人、アジメールに嫌われ
ているらしい。

なんで？ 俺は何かしたか？ 全く身に覚えがない。でもアイツ

は俺と目が合った瞬間に逸らしたり睨んだりする。なんだよ、スゲエムカつくんだけど。

別にほっといてもいいんだけど、それにエルメスが気付いたら余計に気を遣わせるだろうと思って、シャンティに聞いてみた。

「ああ、そーみたい。なんか文句言ってたもん」

「なんで!? 俺何もしてねーじゃん!」

「アハハハハ! 確かにね。まあでもしよーうがねえよ」

「なんでだよ」

「嫉妬だよ、嫉妬」

「はあ? なにが? なんで?」

「カイはミナ様と同室で、いつつもつきつきり。ミナ様はカイに頼りつきり。まるで夫婦」

「はああ!? 同室は俺の意志じゃねえし、しよーうがねえだろ! つーか俺的には病気で入院中の娘を心配する父親の気分なんだけど!」

「あ、そつちのがしつくりくるな。まあ、一応あたしはわかってっけどさ、ミナ様に一番近いのはカイだし、ミナ様がカイを傍に置きたがるのが気に入らないんだよ」

「それ、俺のせいじゃねえじゃん・・・」

「まーね。でもしよーうがねーじゃん。アジメールはミナ様大好きだし。ライバルだと思われてんじゃねーの」

「あり得ねー・・・大体エルメスにはクリシユナさんとアーサーがいるんだし、つーか俺無関係なんだけど! つーかクリシユナさんとアーサーは良いのに、俺が目をつけられる意味が分からん!」

「まあ、あの二人にはみんな感謝してるし、尊敬してるから。アンタにはしてない」

「デメエ・・・」

要するにとぼっちりだ。最悪だ。超面倒くせえ。やっぱほっとこ
う。

シャンティと話が終わって部屋に入ろうと思ったら、ディナが慌
てて走ってきた。

「副長！ 大変大変！」

「だから副長じゃねえって。筆頭もしくはカイ様と呼べ」

「それどころじゃないんだって！ ケンカ！」

「は？」

「ガードとアジメールがケンカはじめてんの！ 止めて！」

「はあああ！？」

普段大人しいガードがケンカするなんてどうい風風の吹き回し
だ。ていうか面倒くさいんだけど。

「いや！ お前なんかまだまだだね！」

「お前みたいな新参者に何が分かるんだ！」

「わかるに決まってんだろ！ 俺はエルメスの息子なんだから！」

何を言ってるんだこいつらは。何をやってるんだこいつらは。

「何？ つーかなんでケンカしてんの？」

傍でケンカの様子を眺めてたパーシーに聞いてみると、パーシーは笑って答えた。

「ああ、どつちがエルメスをより崇拜してるか競ってんだよ」

「バツカじゃねえの！！ そんなこと競ってどうすんの！？ アホか！

もう俺やだ・・・面倒くせえ。アーサーさえいてくれたらこんなアホどもが活発になることもなかったのに。もういつそ、これはアーサーのせいだぞ。マジで。」

俺 「あーお前らもうやめろ、うぜえ」

ガラード「ゲツ！ 副長！」

アジ 「つーかアンタが一番ムカつくんだよ！」

俺 「あーハイハイわかったから。うるせえ、黙れ」

ガラード「副長も何とか言っちゃってよ！ 俺エルメスの唯一の支配下の吸血鬼じゃん！ 特別じゃん！？」

俺 「あーハイハイそうだな」

アジ 「ていうかガラードもただけどカイが一番ムカつくんだよ！ 急に現れて当たり前みたいになん様につきつきりできあ！」

俺 「あーハイハイすんませんね」

ガラード「ていうか、そうだよな！ 副長ズルい！」

アジ 「だよな！ なんなんだよアンタ！ カイよりも俺の方がミナ様好きなんだからな！」

俺 「あーハイハイそうですね」

なにこれ超うぜえんだけど。もう本当どうでもいいんだけど。なんでケンカしてた二人が俺に突っかかってくんだよ。俺が一体何をした。うるせーし、マジうるせーし。

正直俺は呆れて物も言えない的な感じなんだけど、このバカどもは容赦なく文句を連ねてくる。さすがに腹が立ってきた。

俺 「つーかお前らよお、そんなにエルメスが好きなら言えればいいじゃねーか。それで白黒はつきりさせりやいいだろ」

ガロード「俺のはアジメールと違って不純な好意じゃねーの！ 大体近衛の俺がそんなことしたら本末転倒じゃん！ アーサー様に殺されるじゃん！」

アジ 「誰が不純だ！ つーかできるか！ 俺はアンタと違って厚顔無恥じゃねえんだよ！ ミナ様にはクリシユナ様とアルカード様がいらつしやるんだぞ！」

俺 「誰が厚顔無恥だ。つーか、わかってんならケンカする理由もねえだろ。大体お前らがケンカして一番嫌がるのは誰か考える」

バカ二人「……」

俺 「わかったらバカみてえなことでケンカすんな。お前らがどんなに競っても、エルメスはみんなを平等に見てるぞ、アーサー以外はな」

アジ 「……アンタもか？」

俺 「当然だ。アイツの博愛主義は徹底してるからな。こいつは嫌い、こいつは好きみたいなことをエルメスは出来ない。今俺が一番アイツに近いのは、俺が言い出したから、友達だから、筆頭だから、それだけだ」

やっこのことで黙ってくれた。さすが俺、さすが管理職の威厳。しかし、クリシュナさんにランス、アーサーにコイツら、エルメスがこんだけ愛されてるのは良い事なんだろうけど、そのとぼっちりを食らうのは心底面倒くせえ。アイツの博愛主義は八方美人とも言うな。その内絶対自分で責任を取らせる。

ケンカが収束してリビングの人口が減ってきた頃に屋敷のインターホンが鳴った。シャンティが連れて来たのは一組のカップル。

「ミナ様にお客様だ。呼んできてくれねーか？」

「ああ、ランス」

「はい」

ランスに呼ばれてリビングにやってきたエルメスは急に涙目になって、そのカップルに抱き着いた。

「@ ¥ ○ ¥ 。 @ ○ # \$ % ○ # \$ % # ○ !」
「# \$ # \$ % ○ # % & !」

何語？ なんて言ってるかわかんねえんだけど・・・ひとしきり抱き合って不思議語で語り合ってた3人は少しすると落ち着いたようにソファに座った。

「あ、紹介するね。この二人はベトナムでの友達なの。女の子がトリン、男の子がツァン。ベトナムのセーフハウスの守護者たちだよ」
「あーなるほどね。んじゃさっきのはベトナム語か」

「うん。ていうか、トリンとツァンって英語しゃべれた？」

「あたしは喋れるよ。お父さんアメリカ人だしね」

「俺は今義父さんに習って勉強中」

「ツァン上手じゃない！ ていうか、義父さんってまさか！」

目を輝かせたエルメスの前にトリンとツァンはにっこり笑って左手を差し出した。その左手の薬指には光る指輪。

「うわあ！ 結婚したんだ！ おめでとう！」

「えへへ、ありがとう！ もう、アミン連絡つかないから知らせる事も出来なくて困ったよ」

「ごめんね・・・ていうか私も結婚したんだよね、一応」

「マジで！？ いつの間に!？」

目を輝かせる二人の前で、エルメスは寂しそうに笑った。話すのはまだ辛い、か。だけど、この二人が友達だってんなら話して慰めてもらうのもいい。

「エルメス、積もる話もあるだろうから部屋でゆっくり話せ」

「あ、そうだね、ありがとう。カイも一緒に来てよ」

「あ？ なんてだよ」

「私一人じゃ話せないから」

「・・・わかった」

「

そっか、アルも・・・」

泣きながら一生懸命言葉を繋ぐエルメスの話を聞いて、ツァンは寂しそうに呟いて、トリンは泣いていた。話はベトナムを出国してから今日の事まで。でも序盤からエルメスの顔は曇った。インドに来てすぐにクリシュナさんと出会ったから。

エルメスの話を聞いて思った。本当にエルメスとクリシュナさんは運命の出会いだったんだな。

昔なんかの雑誌で読んだことがある。お互いに一目惚れして出会った男女は、遺伝子で惹かれあってるんだと。遺伝子の引力とでもいうのか。まあ、運命って言うには夢のない話かもしれねえけど。

でもそれは本当に砂漠から砂金を見つけたような確率で、そんな相手に出会えたら運命としか言えねえと思う。

エルメスはアーサーと出会ったからクリシュナさんと運命的な出会いをして、アーサーとジュリオ様が宿命の再会を果たしたから俺たちと出会って、今ここにいる。人の生つてのはわかんねえもんだ。

「でもね、アーサーさんは帰ってくるって言ったの。だから待つてるの。ここでカイやみんなと一緒に、クリシュナのお墓を守りながらずっと待つ。きつと帰ってきてくれるから」

泣きながらそう言って、エルメスは二人に笑顔を向けた。その笑顔はやっぱり営業スマイルで、トリンとツァンはすぐにそれに気づいたようだ。

「辛いな、辛いよな。よく耐えてきたな。でも、無理すんなよ」
「そうだよ。辛い時には辛いって言うていいんだよ。あたしたちにできることがあつたら何でも言つてね？」

つくづく、エルメスは周りに恵まれてると思う。多分それもエルメスの人徳なんだろうけど。二人の言葉を聞いてやっぱりエルメスは泣き出して、ありがとう、と小さく言った。

しばらく経つて落ち着いたエルメスは、二人に何故ここに来たのか尋ねた。

「実はシャンティから連絡を貰つたのよ。会いに来てあげて欲しいつて」

「え？ シャンティが？ なんて知ってるんだろっ？」

「俺同様にシャンティにも継承したんだろ？ 譲渡書と別に連絡先を残してあつたみたいだよ。アルに何かあつたら連絡するようにつて」

「ウソ・・・」

エルメスと共に俺も驚いたぞ。アーサー、アンタいつから予測してたんだ。それとも念のためレベルの杞憂か？ いや、アンタのことだ。そんなはずはない。

いつからこうなるとわかってた？ もしかして、今消滅してるのは計算の内なのか？ それなら何故、エルメスに何も話してないんだ？

驚いていたエルメスは徐々に考え込むような顔をしてブツブツ言いだした。

「そう言えばアーサーさん、インドを出る時にすぐにまた戻ってくるとか言ってた。その時、その内話すとか言ってた。そう言えばなんかミラーカさんとコソコソしてた。そう言えばなんか対策があるのどのの言ってた！ そう言えば私を眷属にしたのは理由があるとか言ってた！ そう言えば消える瞬間、時が来てしまったとか言ってた！ てことは私に出会う前から、8年前からわかってたの？ まさか、まさか、今いないのって計算通りなの！？」
「そーみたいだな」

なぜか俺に突っかかってきたエルメスに俺は肯定してやりました。ざまあみる。全くアーサーは大した奴だよ。何重に策を弄してやるんだ。

ていうか、エルメスには話しとけよ！ どんだけエルメスが辛い思いしてると思ってるんだ！ このボケ！ アホ！ バカ！

「んもー！ アーサーさん相変わらずヒドイよー！ 教えないって言ったのはこの事だったのか！ そりゃ計算通りなら帰ってくるって言えるよね！ 全くもー！ 本当にあの人はー！ バカマスタ
ー！」

「全くだな」

「本当だね。相変わらずアルは性格悪いな」

「ドンマイ、アミン」

ソファに伏せて暴れるエルメスに俺らは苦笑いですよ。あーでも、ムカつくけど、ちゃんとアーサーが帰ってくるってわかって、正直スゲエ安心した。

「つーか話しとけよ！ この件に関しては100回文句言っても足りねえ！ このバカ！ 陰険クソオヤジ！」

ひとしきり暴れて起き上がったエルメスは怒ってたけど、でも嬉しそうに言った。

「全くもう、しょうがないなー。待っててやるかぁ」

全然しょうがないって感じじゃなかったけどな。いつ帰ってくるのかはわかんねえけど、帰ってくる可能性が高いつて言う保証は、随分エルメスを楽にしてくれた。

帰ってくるかどうかかわからないって不安は、本当にエルメスにとっては辛いものだったから、本当に良かったと思う。つーかマジこのバカ！ ざけんな！

しばらく話して再び4人でリビングに戻った。さっきの話をシュ

ヴアリエやシャンティ達に話して聞かせると、なんだよー！　つて
やっぱ怒ってたぞ。でも、みんな安心してた。

当然だ。俺らだってアーサーが帰ってくるのを本当に心待ちにし
てんだからな。つっても別にアンタに会いたいわけじゃねーからな。
言っとくけど。

つーか、トリンとツァンが結局、爆撃機だった件。

「ていうか、最初アミンが結婚したって言った時、あたしカイくん
が旦那さんだと思った」

「あー俺も」

「んなわけねーだろ。たまたま近くにいただけじゃねーか」

「それもだけど、なんていうか雰囲気？」

「そうそう。カイくんがアミンを見る目が超優しいから」

「イヤイヤイヤ、やめてくれ。本当にやめろ」

「えー？　カイが旦那さん？　想像できなーい」

「しなくていい！　あり得ねえから！　お断りだから！　断固拒否
！」

「・・・ちよつとシヨックなんだけど」

「黙れ！　むしろ喜べ！　バカ！」

「もぉ、何怒つてんの？　ていうか、喜ぶわけないじゃない！　カ
イが一番仲良しなのに！　カイは特別なのに！」

「うおお！　マジやめるバカ！　空気読めバカ！　喋んなバカ！」

「な、何もそこまで言うことないのに・・・」

夕方のことがなきや普通に嬉しかったと思いますよ。でもね、視

線がね。痛いんですよ。もうアジメールとガラードがめっちゃ睨んでるしさあ、ランスとかスゲエ形相してるしさあ。マジあのバカ女勘弁してほしい。

「あ、じゃああたし達帰るね」

「アミン、また来るからな」

「二人ともありがと！送ってくよ！」

「あたしも一緒に行くよ」

どうも雰囲気を感じたらしいトリンとツァンは足早に立ち去って、エルメスとシャンティも二人と一緒に屋敷を出て行った。俺も着いて行こうと立ち上がると、にっこり笑ったランスに引き留められた。

ガラード「ふーん、副長は特別なんだってさ」

アジ「ウソつき」

ランス「まさかそう言う作戦？僕たちを安心させといて、裏から虎視眈々と・・・」

おれ「なわけねーだろ！エルメスが言ったのはそう言う事じゃねえよ！」

アジ「じゃあなんだよ」

俺「え？えーと・・・あ、そうだ。付き合い長えし！」

アジ「それなら俺たちの方が付き合い長いけど」

俺「あー・・・えーと、あ、仕事で一緒だったからだ！」

ガラード「それなら俺らも一緒だったけど」

俺「・・・っ！かお前から面倒くせーよ！元々友達なんだから普通だろ！いいじゃねーか別に！」

ランス「よくない！カイが同室なだけでも僕は嫌なんだから！」

俺 「それは俺の意志じゃねえよ！」

アジ 「だからム力つくんだろーが！　なんでミナ様はアンタを指名してんだよ！」

俺 「部屋が空いてねえからだろ！　つーかランスも指名されてんだろ！」

ガラード 「それはランスが子供だからじゃん。なんで副長なの？」

俺 「知るか！　エルメスに聞けよ！　つーか俺はむしろ誰かに変わってほしいんだけど！」

ガラード 「そんなこと言ったらエルメスが可哀想。それ聞いたらエルメス悲しむよ」

アジ 「ミナ様のご指名なのに逆らうのかよ！　反逆者め！」

ランス 「カイは筆頭なのに命令の一つも聞けないわけ？」

俺 「なにをおおお！？　つーかお前らどっちだよ！　もう面倒くせーよ！」

もー！　アーサー！　アーサー！　何とかしろよコイツらを！

付き合いきれねえし、面倒くせーし、もう面倒くせえ！

念のため言つとくけど、俺はエルメスには興味ないからね！？

忠誠と友情しかないからね！　エルメスも俺にはそう言う興味はないからね！

大体さあ、そう言う嫌疑をかけるのって俺にもエルメスにも失礼だと思わねえ？　俺もエルメスも友達だって言ってるわけじゃん。俺はエルメスのシュヴァリエとして忠誠を誓ってるわけじゃん。その友情と忠誠を疑われたと思うと、俺は悲しくてしょうがねーよ。

もう本当俺の味方になってくれんのシャンティくらいしかいねえ。アイツはその辺分かってくれてるみたいだからな。やっぱアイツは

いい奴だ。

アジ 「とか何とか言って実際嬉しいくせに」

ガラード 「さすが副長。ポーカーフェイスが上手だな」

ランス 「カイはジュリオ様によく似てウソつきだもんね」

アーサー、アンタ帰ってきたらこいつらを速攻シバキ回してくれ。
生きてることを後悔するほどにシバキ回してくれ。頼むわ。

以上

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

報告

210

何に囚われて、何に縛りつけられているのか。俺は、分からない。

あれからしばらくトリンとツァンはインドに留まっていた。大体1週間くらいか。その間毎日屋敷に遊びに来ては、エルメスを元気づけてくれた。

その時に、トリンの救出作戦だの、デイヴィスファミリーとの抗

争だの、トリンに射殺された話だのいろいろ聞いた。

アイツすげーな。こんなにネタに困らねえ奴なんてそうそういねえぞ。なんなのアイツ。ネタ製造機？

「あたしを助けに来てくれた時のアルはさすがだったよ。あたしベツドに手錠で捕まってただけけど、鍵かかったドアをバーンって壊して、手錠ブチって引きちぎって「立てるか？」って。危うくホレそうだった」

「もう、その事何度思い出してもムカつくよ。その間私撃たれてただけだし」

「まさしく撃たれ損だよな」

思い出話に花を咲かせて笑うエルメスは、以前のエルメスに戻ったような笑顔だ。この二人のお陰で、だいぶ元氣を取り戻せたみたいだ。やっぱ持つべきものは友達だな。

ツアン 「でも俺アミンが死んだって聞いたとき本気で泣きそうだったよ」

トリン 「あー・・・ごめんね」

エルメス 「もう済んだことじゃない！ 友達に射殺されるなんて中々経験できな・・・あ、今でもしてるわ」

ツアン 「ええ！？ どゆこと!？」

エルメス 「カイに何度か殺されそうになったし、殺し合いもして何度か撃たれた」

トリン 「カイくん・・・本当に友達なの？」

俺 「親友」

ツアン 「・・・アミン、お前騙されてるんじゃないの」
エルメス 「騙されてはないよ。カイが異常なだけ」

俺 「まあ、そうだな」

トリン 「認めるんだ・・・ていうか、アミンはそれでいいんだ」

俺 「いいに決まってるんだろ」

ツアン 「なんでカイが答えんの？ ああ、限度って言葉知ってる？」

エルメス 「まあ、ちょっとくらいなら死なないから」

トリン 「そう言う問題？」

死ななきゃいいってもんじゃないよね、とオシドリ夫婦は首を傾げるが、エルメスは終始ニコニコしてた。

コイツの寛容さはもはや寛容とは言わねえ。ただのバカだ。撃つた俺が言うんだから間違いない。

俺 「それを水に流しても有り余るほど助けてやってるからな」

エルメス 「そうだけど、カイがソレ言う？」

俺 「言う」

エルメス 「バカじゃないの？」

俺 「バカはお前。全く、クソ生意気なバカ娘だな」

トリン 「ヒド・・・カイくん、本当に友達なの？」

俺 「大親友」

ツアン 「ウソつけ！」

俺 「マジで。世界で二番目に大事にしてやってっから」

ツアン 「なんか胡散臭い上にいかがわしいんだけど」

トリン 「ちなみに一番は？」

俺 「二番と圧倒的に差をつけて、俺」

エルメス 「私が一番じゃなかったの？」

俺 「日によってごく稀に一番だ。喜べ」
エルメス「そつか。ありがとう」
ツアン 「アミン、飼い馴らされてんな・・・」

そーだよ！ 本来俺が飼い馴らすべきだ。ていうか、本来俺がこの駄犬を飼い馴らしてたんだった。

じゃあなんで俺貢がされてんだよ。意味わかんねえし。やっぱガルフたちの勘違いか。そうだな。そうに決まってる。俺がエルメスにいい様に使われるはずがねえ。

大体見てみる、このバカを。終始ヘラヘラ笑ってるだけのバカ娘じゃねーか。コイツの取り柄つつたらバカと巨乳以外にはねーだろ。そんなバカに俺が操作されるはずはねえ。

つーか何回バカを連発させる気だ。いい加減ゲシュタルト崩壊してくるぞ。つーかアーサー本当によくこんなバカに惚れたな。マジで理解できん。

しかし、アーサーと言ひ、クリシュナさんと言ひ、ランスと言ひ、アジメールと言ひ、まあガイドは別格だが、アタマおかしいんじやねーの。俺には全く理解出来ねえ。

いや、もしかして、俺がアタマおかしいのか？ いや、そんなはずはねえ。まあ確かにちよつと異常なところはあると自覚してるけど、俺はおかしくねえ。

つーか、なーんで俺は今日こんなにイライラしてんだ。多分エルメスに対するストレスがかなり溜ってるんだな。それはそれでムカ

つくな。エルメスごときの為にストレスため込むなんてバカみてーじゃん。

「ツァン、マイケルさんとはどう?」

「義父さんは、さすがだよ。超やり手。基本的にいい人だし、さすがに元マフィアだけあってコネクション作るの上手いんだよ。見ててすごい勉強になる」

「へえー! でも、確かにそうかもね!」

「ツァンとお父さんが仲良く上手くやってくれるから、あたしも安心だよ」

「本当だね! そう言えば子供は?」

「実は今5か月!」

「マジで!? すごーい! おめでとう!」

「えへへ、ありがとう」

トリンとツァンは本当に幸せそうで、そんな二人ののろけ話を聞きながらエルメスも嬉しそうだ。エルメスは本当にこの二人の幸せな姿が嬉しいんだろうな。

エルメスは、幸せじゃないのに。

夫は死んで、子供だって作れない。主人もいなくなって家族も死んだ。エルメスはもう人並みの幸せを手にする事は出来ないのに、なんで、笑って聞いていられるんだよ。

なんで俺はこんなに、この二人に、エルメスに腹を立ててるんだろう。

エルメスはこの二人の幸せな姿を見て喜んでるじゃねえか。二人の幸せを羨んだり妬んだりしてねえじゃねえか。エルメスが笑ってるなら、それでいいじゃねえか。

エルメスは前のエルメスみたいに、幸せそうな笑顔で笑ってる。この二人の存在が、エルメスを元に戻しつつある。それで、充分だろ。

なんだ？ 俺は、どうしたんだ。どうしたって言うんだ。エルメスが笑ってるのが、許せないなんて。

あり得ない。今日の俺は明らかにおかしい。この二人に妙に腹を立ててる。二人と笑いあうエルメスに腹を立ててる。何故？

わからない。俺は、どうしたいんだ。どうなれば満足するんだ。

エルメスの笑顔を取り戻したいんじゃないのか？ エルメスが幸せになれば、それでいいんじゃないのか？ アーサーが帰ってきて、エルメスが安心できればそれでいいんじゃないのか？

この二人が来たことでそれに近づいているのに、俺はそれを不満に思ってる。自分が、わからない。

アーサー、俺は、どうしたんだ。何に囚われてるんだ。俺はどう
したいんだ。俺はどうなれば満足するんだ。

俺は自分が、わからない。

以上

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

報告

この安心は、一体どこからやってくるのか。この不安は、一体どこからやってくるのか。

俺は何を心配しているんだろう。何を懸念してるんだ。

「もうそろそろベトナムに着いた頃かなあ」

「多分な。わかんねーけど」

あの二人が帰ったことに、安心してる。

「寂しいー！ 今度私達もベトナムに遊びに行こうよ！」
「そのうちな」

寂しがるエルメスにイラついでる。

「もー、カイどうしたの？ なんか最近冷たい」

「俺はいつも優しい」

「・・・どこが？」

「全部。俺はお前にはいつも優しい」

「まあ、そうと言えばそうだけど。でもなんかおかしい」

「お前ほどじゃねえ」

やっぱり俺はおかしい。

一週間ほどインドに滞在していたトリンとツァンは今日、帰って行った。二人を空港まで見送りに行って、飛び立つ鉄の鳥を見て、俺は心底安心した。

ああ、よかった。これであの二人にはしばらく会う事はないだろう。これで、エルメスは今までどおり
今まで
どおり・・・なんだ？

なんで俺はあの二人が気に入らないんだ。シャンティ達やシュヴァリエ達に、あそこまで腹を立てたことはない。あの二人とシャンティ達とシュヴァリエ達と何が違う？

イラつきすぎて、思わずエルメスに冷たく当たってしまっ。なぜ？ エルメスは何もしてないだろ。俺が勝手にイラついてるだけだ。ただの、八つ当たり。俺らしくもない。

いや、エルメスにもイラついてた。エルメスの笑顔に、イラついてた。なぜ？

わからない、わからない。

不安

なにが？ 何度考えても、わからない。

もう、考えるのは辞めよう。どうせわからない。分からないことをいつまでも考え続けるのは、面倒くせえ。

今回の事は、忘れよう。きっと、たまたま虫の居所が悪かっただけ。そうに決まってる。

「カイ、煙草吸い過ぎ！」

最近イラついてたせいか、明らかに本数が増えてた。空港からの往復だけで、もう既にひと箱空になった。

「うるせーよ。吸血鬼なんだから別に病気になったりしねえよ」

「それはそうだけど。私に煙草の匂いが移っちゃうじゃない」

その言葉に、強烈に感じた

幸福感。

「別にいいじゃねーか」

「まあ、よくないよ。髪についちゃってるもん。ホラ」

エルメスのサラサラとした長い髪から漂う煙草の香り。「俺の煙草の香り。」

漂う香りは、まるで、マーキングでもしたように。証拠。エルメスが、俺の物であるという、証拠のよう。

感じた不安、幸福感、行きついた結果。

執着、依存、嫉妬、独占、支配
スを、征服したい。

俺はエルメ

強烈な、征服欲。異常な、独占欲。
俺はエルメスを、自分の「所有物」だと思ってる

いっそのこと、これが愛情ならよかったのに。

俺は自分の都合で、自分の好きなように、自分の望むように、俺だけのエルメスを作り出そうとしている。

俺の理想。

エルメスが幸せになって、アーサーが帰ってきて、エルメスを幸せにする。それまでは、エルメスはアーサーを思って、俺の保護の下で、俺の管理下で、俺の手によって笑顔でいなければ気が済まない。

俺以外の他人が、俺とアーサー以外の他人が、エルメスを笑顔にすることが許せない。俺の手で生み出されるものでなければ気が済まない。

これは愛情なんかじゃない。異常な、所有欲。異常な、支配欲。異常な、管理欲。

愛情だったなら、エルメスがただ笑顔でいれば、幸せだと言っなら、それで満足できたはずなのに。エルメスの幸せだけを願えたはずなのに。

切望するのは、俺に支配されたエルメスの幸福。

その為に、エルメスの我儘を何でも受け入れて、片時も離れず傍にいて、エルメスに近づくと他者を排除する。

エルメスの独占支配。強烈な嫉妬と執着と依存。まるで、ジュリ才様の妄執を引き継いだようだ。

異常な、妄執。

異常

ああ、俺は、異常だ。

LETTER - 4 Cruel 「邪険」

拝啓 アーサーさん

どうしよう、どうしよう。私カイを怒らせちゃったのかな。嫌われちゃったのかな。アーサーさん、私はどうしたらいいんですか？

この前からカイの態度がおかしくて、ずっとなんか冷たい感じがしてたんですけど、最近明らかに避けられると言っか、冷たくされます。

もしかしたら、我儘を言って調子に乗りすぎて呆れられちゃったのかもしれないし、すぐにケンカになったり、トラブル起こしたりするのを怒ってるのかもしれない。

お金を盗んできたのを怒ってるのかもしれないし、トリンとツァンが遊びに来てた時に、仲間外れにしたみたいに思われて、怒ってるのかもしれないし、全部かもしれない。

トリンとツァンが帰って行った後くらいからますます私を避けるようになって、私が話しかけても適当にしか返事をしてくれないし、私が近づくと逃げられちゃいます。

私はカイに嫌われちゃったんでしょうか。どうしよう、どうした

らしいんですか。

私、カイに嫌われちゃったら、生きていきません。ずっとあんな風に冷たくされるなんて、耐えられません。

シャンティと、ガロードとランスに相談してみても、そんなはずないよって、カイは私を大事に思ってるよって、気のせいだって言ってくるけど、気のせいのはずない。

謝った方がいいのかもしれないけど、何に怒ってるのかわからないし、そんな状態で謝っても適当に謝ってるみたいに思われて、余計に嫌われちゃうかもしれないし。

それになにより、面と向かって嫌いになったって言われたら、私もう生きていけない。辛くて辛くて、今だって死んじやいたい。

私、カイがいなきゃ生きていけないのに、カイに嫌いって、いらないうって言われたら、どうしたらいいのかわかりません。生きる気力なんて失くしてしまいます。

みんなが、カイがいるからアーサーさんを待てるのに、カイがいてくれたからちよつとずつ元気になれたのに、私がバカだから嫌われちゃったんでしょうか。

私、カイに甘えすぎてたのかもしれない。カイに頼りすぎてた

のかもしれない。カイは前から鬱陶しいの嫌いって言ってたし、私のそう言うところに嫌気がさしたのかもしれない。

カイが頼っていいって、甘えていいって言ってくれた言葉を真に受けて、調子に乗りすぎてたのかな。

アーサーさんにも調子に乗って怒らせたりしたこといっぱいありましたもんね。私は、そういうダメな女なのかもしれない。

アーサーさん、もしアーサーさんが同じ理由で怒ったら、私がごめんなさいって、これからはちゃんとするからって言ったら許してくださいますか？

ちゃんと言う事聞くから、我儘言わないからって謝ったら許してくれると思いますか？

ガードとランスとシャンティは、カイが私を嫌いになるなんて絶対にあり得ないって言うてくれるし、私もそうだと思いたいです。

だから頑張って謝ってみようと思うけど、本当にカイが嫌いになってたらどうしよう。そう思うと、怖くて、辛くて、悲しい。勇気ができません。

こんな時アーサーさんが居てくれたら、私もカイも怒ってくれて仲直りできたかもしれないのに、アーサーさんが居ないと私一人じゃ、自分のことも解決できない。

アーサーさん、お願い、助けて。帰ってきて。私、どっいたらいいのかわかりません。怖い、怖い。

カインに嫌われたら、生きていけない。

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

筆頭にあるまじき思想に対する反省文

あれから俺も、かなり考えてかなり悩んだ。

とりあえず、なんで俺がそこまで異常者なのかという事から考えてみた。で、出た結果。

異常な男に異常な環境で育てられ、加えてこの異常な状況。正常でいられるわけねえだろ！ あの日以前から精神崩壊してたっつーの！ つーか既に10代の頃に「正常」なんてなくなってるじゃん、俺！ それどころか、ガキの頃からおかしかったかもしねえ。よし、これはジュリオ様のせいだ。全責任はジュリオ様にある。

次に、なんでエルメスにそこまで執着するのか。で、出た結果。

エルメスは俺にとって友達で、家族みたいに思ってた、俺の主人で、俺のアイコンで、俺の神で。俺の神なら俺の物で、俺だけの為に・
・いやいや、落ち着け、俺。

とにかく、度が過ぎた。友情とか忠誠とか通り越して、これはもはや信仰、いや狂信だ。

アイツはいつも俺という時は本当に楽しそうに笑ってた、よく怒るし、泣くし、俺を何度も救ってくれて。だから、アイツのその全てが俺に向いてなきや嫌だと思っようになった。

今こんなことになって、マジ大変なことになったと思っただけど、心のどこかでヤツタ と思っただ節がある。

アイツにはもう頼れる相手は俺しかいないから、俺が支えてやらなきやって、俺がアイツを助けるんだって、俺が、俺が・・・俺はダチヨウ倶楽部か！

ハア、まあとにかく、俺の手の届かない神々しいエルメス様が地上に、地獄に突き落とされてきて狂喜したわけだ。うわー俺って最低。

で、結果は散々。俺にはエルメスは救えない。俺にはエルメスを幸せにできないという現実に向き合ってしまった。だから、他人がエルメスを笑顔にしていることがものすごく許せなかった。

その中で、なんでアーサーはいいのかっていうと、俺のエルメス
幸せプランにアーサーが最初から組み込まれていたこと、それと実
に癪だが、アーサーが俺より圧倒的上位のオスだということもある。

シャンティ達を許せたのもそこだ。幸せプランの一員だったから。
何より屋敷で共同生活してても、俺がほとんど寄せ付けねえしな。
だけどトリンとツァンは俺にとってはイレギュラー以外の何物でも
なかったわけだ。だからあんなだけ、帰れ！とか思ってたわけだ。

シュヴァリエの奴らなんて、説明する必要もねえ。俺の管理下に
あるから。

要するに、全て俺が管理できてりゃそれでいいわけだ。マジ・・・
俺とんだけ管理好きなのよ。管理職も職業病とかあんのか。職業病
で管理したがつてんのか。

ああ、本当に異常だよ、俺。本物の異常者じゃねえか。あの時ラ
ンスが言った言葉の意味が、今はよく理解できる。

「いずれ俺なしでは生きられないようにしてやる。それがエルメス
の幸せ」

俺はヘンタイか！・・・ヘンタイかもな。ランスの場合、それ

が恋愛感情から来てるだけまだマシだ。まだ救いようがある。

でも俺違うじゃん！ 別に愛してねーもん！ ただ所有したい！ 独占したい！ 支配したい！ エルメスは俺の物だ！ 俺のエルメスに近寄るな！

イカンイカン、思わず興奮してしまった。つーか、俺のじゃねえだろ。アーサーのじゃん。なのにさー、なのにさー、もっかい前に書いた報告書読み直して気づいたんだけどさー。

俺今まで何度かさー、エルメスをアーサーにくれてやるだの、プレゼントしてやるだの書いてたじゃん。完全に俺のもんだと思ってるよねコレ。完全に俺の所有物だと思ってるよねコレ。

「俺のだけど、やるよ」

みたいなさー。もう、俺なんなの本当。もう俺本当ヤバいわ。ランスもヤベエけど、俺の方がよっぽどイカレてる。ランス、アイツ本当に俺に似てたんだな・・・もうイヤ。

ハア、もう、コレもある意味裏切りだよな。アイツは俺を家族だと、親友だと思ってんのに、俺の中にあるのはただの支配欲だ。

トリンとツァンの言った通り、友達だなんて思ってたんだ。本当に俺は最低だ。

エルメスは俺の信仰の対象そのもので、エルメスは俺の前ではい

つも笑ってなきやいけなくて、俺の前でだけ泣いて、俺だけに怒って、俺だけを救う。

それこそが俺のエルメスであって、俺に向けられるものと同じものが、俺以外の「友達」に向くのが死ぬほど嫌だ。

エルメスを笑わせていいのは俺だけ、エルメスを泣かせていいのは俺だけ、エルメスを怒らせていいのは俺だけ。エルメスを助けて守って、保護し、管理し、支配し、征服していいのは俺だけ。

もう、マジで他の奴らなんか死に絶えればいい。飛行機落ちろって本気で思った。

異常な執着と異常な嫉妬。

俺はなんて異常なんだ。怖ええー、俺。マジ変なところばっかジュリオ様に似てしまった。本当、ここに至って初めてジュリオ様を殺してよかったとすら思える。マジあの人のせいだ、全部。

ジュリオ様に奪われた俺の人生。普通の家庭、普通の家族、普通の友達、普通の環境、普通の人生。

エルメスに出会うまで、俺は異常な環境で異常な人生を歩んできた。でも、エルメスと出会って、俺の苦悩も呪いも何もかも、アイツが払拭してくれた。

アイツが友達になってくれて、普通の友達みてえに助けて、助け合って、ケンカして笑い合って。

吸血鬼だけど、アイツは俺の理想を、俺の憧れを再現して、俺の願いをすべて叶えてくれた。

エルメスを俺の神と言わず何と呼べばいい。

エルメスが幸せになるなら、俺は何だってやる、何にだってなつてやる。アイツが本当の、本来の神の姿に戻るのなら、俺は何でもする。

アイツは俺の、俺だけの神じゃなきゃいけない。

っあー！ また暴走した。本当、なんなの俺。そう言えば前にエルメスが、俺の理性のリミッター壊れてるとか言ってたな・・・確かにブツ壊れてっかも。マジ修理出そう・・・どこにだよ。

もう本当にさ、こればかりは完全に隠蔽する必要があると判断した。ていうか、頑張っつて健全者になる必要がある。

動機としては別にやましいところはないし、いや、やましいと言えばやましいか。そこはおいといて、エルメスが結果的に幸せになるなら、むしろ俺に任せとけっつて感じではある。でも、人としてどうなのよっつていう。人じゃねえけどよ。

もしエルメスにこの事を感じられたら、間違いなく軽蔑される。間違いなく嫌われる。そんなことになったら、俺シヨツク死。本当、冗談抜きで死ぬ。マジで、冗談じゃねえ。

あ、ちなみにこれに関してはアーサーに見せる気はねえからな。コレ、ただの懺悔だから。

なら別に書く必要ねえだろってなるかもしれないけど、どっかに吐き出しとかなきゃ頭バーンなるからな。一層異常になるぞ。

これ以上エスカレートしたら、エルメス連れ出して逃亡するぞ・
・いや、ウソ、冗談。これは本当に冗談。

とにかくそういうわけで、俺は考えを纏めるのに必死だったこともあって、隠蔽&健常者な俺に生まれ変わろうと、とりあえずエルメスを避けてた。

エルメスと離れて、俺にとってもエルメスにとってもお互いが「一番」でない状況を作り出すことが先決だと思ったから。

でも、その俺の行動が思わぬ結果を呼んだ。

今日バルコニーに出て煙草吸ってたら、突然、本当に突然ガラードとランスとシャンティに飛び蹴りされた。3人がかりで。

俺 「うお!？ 何!？ お前ら何すんだ!」

ガラード 「何すんだはこっちのセリフだ!」

俺 「は!？」

シャンティ「アンタ、ミナ様が一番大事なんじゃなかったのかよ!」
ランス 「エルメス様、泣いてるんだよ! カイが無視するから

!」
ガラード 「なんで急にエルメスに冷たくすんの!? 理由を言え!」

ああ、どうしよう、状況は分かったけど理由は絶対誰にも言えねえぞ。という逡巡と動揺を上回る歓喜。俺は状況を察した瞬間に、大喜びした。わーい、ヤッター。マジ最低。でも喜んでる場合じゃねえ。

俺 「え? 理由? えー・・・別にないけど」

シャンティ「理由もなくあの態度!？」

ランス 「自由にも程があるよ! エルメス様の気持ちも考えろ!」

ガラード 「エルメス、泣いてたんだよ? カイに嫌われたらどうしようって。カイに嫌われたら生きていけないって。エルメスに謝れ」

もう、俺にはコイツらが天使に見えた。エルメスが俺に嫌われることを恐怖してる、俺の存在に依存してる。その事をもたらしたコイツらに好きなだけ褒美をくれてやりたい。

あー、俺超幸せ。超嬉しい。ヤッター!

つてのを面に出すわけにもいかねえから、大人しくわかったって

頷いてエルメスの所に行った。で、エルメスの隣に座って、ゴメン
なって謝った。

「私の事、怒ってる？」

「いや、なんでもねえ。ゴメン、悪いのは俺だから」

「カイ、私の事嫌いになった？」

「そんなわけねえだろ。俺はお前が一番大事だから」

訪れる、最高の、至福の瞬間。エルメスは俺にすがりたいに抱
き着いて、泣き出した。

「本当に？ 本当に？」

「本当に」

「ごめんなさい。もう我儘言わないから、カイのいう事ちゃんと聞
くから、私を嫌いにならないで」

「バカ、俺がお前を嫌いになるはずないだろ」

「よかった、私カイに嫌われたと思って、嫌われたらどうしようっ
て思って、私、カイに嫌われたら生きていけないから」

多分、俺は笑ってたと思う。俺のしたことはエルメスの俺への依
存度を急激に高めて、エルメスの中での俺の重要度は生死を左右す
るほどになった。

その事に俺は幸福を感じて、笑いそうになるのをこらえるのに必
死だった。

ああ、エルメスは健気だな。たまに同じことをやってやるうか。それとも、嫌いになるぞって脅迫したら、エルメスは俺に服従するかも。

いや、落ち着け俺！ 俺って悪魔！ 最低！ 健常者になるんじやなかったのかよ！ ここで喜んだらお終いだっての！ ここは反省するところ！

なんか妙な葛藤に苛まれた。ハア、健常者への道のりは、程遠いな。

俺は異常で、最高に、歪んでる。俺は、悪魔だ。

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの管理

報告

思えば、俺は昔からそうだった。

普段は誰にも関心を持たない。自分のことしか興味はない。だ
ど、特定の人物や感情、現象には異常なほど執着して盲信した。あ
まりにも執着して、盲信しすぎて、自分をどうでもいいと思っ
まう程に。

ある時は神に、ある時はシュヴァリエ達に、ある時は栄誉や仕事

に、ある時はジュリオ様に、そして今はエルメスに。

多分、それは俺にとっての現実逃避の一環なんだと思う。辛い現実から目を背けたくて、異常なほど特定の人や物事に執着する。それしか見えないように自分を固執させる。

この異常な本性は、俺の弱さそのものだ。

なーんで、こんな摩訶不思議なイケメンになったかなーと言う俺の悩みも知らず、エルメスはキ口と遊んでる。

いつそ能天気なアイツが羨ましいよ、全く。俺がおかしいわけだが、半分はお前のせいだぞコノヤロー。

気分的には俺はこんな本性に気付きたくはなかったけど、このままほっといたらヤバイことになってた気がしなくもない。

下手したら俺より先にエルメスや他の奴らに感付かれてた可能性もなきにしもあらず。今、この段階でブレーキかけられんなら、それに越したことはねえ。

俺の狂信の対象が他に移れば楽なんだけど。俺もなんかペットでも飼おうかな
ペットを溺愛する俺、気持ち悪っ

！ダメだ、らしくねえ。向いてねえ。ペットはやめよう。

いやあ、しかしこれが愛情なら本当によかったっていうか、まだマシだったんだけど。残念ながら俺にはそれが理解できない。ただ、だからこそ最悪のパターンは回避できる。

今の俺に後から愛情なんて厄介なものが付属されたら、それこそ最悪だ。想像するだけで恐ろしい。もしその時アーサーがいなきゃ俺の天下、アーサーがいれば殺されて終わり。

そう考えると、マジで俺そう言うの理解できない人で本当に良かった。そこは異常でよかった。いや、良くねえ、良くねえよ。現状で妥協してんじゃねーよ。

いつからこんなカンジになっちまったのかはつきりわかんねえけど、少なくとも最初の内は単純に友達だと思ってたはずだ。

その頃に、戻りたい。

今、俺はエルメスを裏切ってる。エルメスを騙して、ウソをついてる。エルメスが友達だと思ってる俺は、こんな俺じゃない。

そつだ、本当の俺はこんな奴じゃない。こんな弱い奴じゃない。戻るんだ、強い俺に。エルメスの友達に、戻るんだ。

そこで俺は色々考えた結果、手っ取り早く元に戻る方法を発見

した。そうだ、催眠術師を探そう。

この超面倒くせえ本性を消し去って戴こう。金と他人の力で俺の悩みは一発解消。うん、いいな、この方法は。

しかし、俺の面倒くさがりが意外な展開に発展した。

「エルメス、俺ちょっと出かけてくる」

「え？ どこいくの？」

「あー・・・人探し」

「クライドさん達探しに行くの!？」

「え、いや、えーと」

「私もいく!」

「え、ええー・・・」

なぜかクライドさんとボニーさんを探しに行くことになった。

「でも、どこから探せばいいかな？」

「え、あ、そうだな。とりあえず城に一旦行ってみるか？ 何か手がかりがあるかもしれないしねえし、もうそろそろ調査も済んだかもしれないし、ミラーカさんの事もあるし」

「うん！ そうだね！ そうしよう!」

元氣よく返事をしたエルメスが俺の手を握ると、気が付いたら目の前にはあの巨大な城。

「……お前、行くなら行くって言えよ。すげえビックリしたじゃねーか」

「あ、ゴメン」

一応周囲を警戒。人影、人の気配はなし。調査は終わったのか、今日はもう終わったのか。とにかく誰もいなくて安心した。

エルメスと改めてあの巨大な城を見上げる。石灰質の白い城壁は焼けて黒くなってるし、天守閣の辺りは爆発のせいで崩壊してる。

あれだけエルメスが手を入れていた庭も踏み荒らされて、花壇や噴水、石像にもおびただしい数の弾痕。

城の有り様は、荒廃、この一言に尽きる。

3年近くもエルメス達とここで過ごした。楽しく、過ごしてた。3年かけて作り上げた城も庭も関係も信頼も、ジュリオ様に一夜にして滅ぼされた。

エルメスはかつて青いバラが権勢を誇っていた、今では枯れて荒れ果てた花壇の前に座り込んで、枯れたバラを一つ手に取った。

「青いバラは、ジュリオさんだったんだね」

「どういうことだ？」

「他人の都合で、勝手に作り替えられた。バラは青い色なんてきつ

と望んでなかったんだね。赤いまま、枯れたいと思つてたんだね」

アーサーによつて恋人を奪われ、自らも吸血鬼になったジュリオ様は、せめて人間に戻りたいと渴望してた。

人間の手前勝手な夢のために赤を奪われ、青を組み込まれたこのバラも、ジュリオ様と同じことを考えてたんだらうか。

エルメスの隣にしゃがんでバラに手を触れると、かさり、と音を立てる。その中に茶色い蕾のようなものをみつけた。バラの、種子。

「そーかもな。でも、このバラから採れた種子は、んなこと思つてねえよ」

俺は最近になつてやつと受け入れられたけど、他の奴らは切り替えが早かったからなー。リオに至つては鉛玉で撃たれても怪我もしないつて逆に喜んでたくらいだ。

今更、人間に戻るうとは思わねえ。むしろ人間に戻つたら、エルメスの傍にいられなくなる。そつちのが願ひ下げ。

枯れたバラから見つけた種子をエルメスの手に渡すと、エルメスはその種子をぎゅっと握つてそつか、と笑つた。

城に入ると中はもつと荒れてた。真つ黒で、焼け焦げた家財が散乱してた。

本当に戦争が起きたんだな、俺達は何もかも失ったんだな。
あの楽しかった日々も、使用人達も、エルメスの家族も、ジュリ
才様も。

荒れた城内の静寂さが、一層寂しさを引き立てる。穴だらけでボ
ロボロになったテーブルに目をやると、近くにはアンナさんが旦那
さんの快気祝いにくれた花瓶が割れて転がっている。

ふと、エルメスが再び俺の手を取ったかと思うと、次の瞬間には
インドの屋敷の自分の部屋に戻っていた。

「エルメス？」

「カイ、ごめん・・・私、まだ・・・」

エルメスは俺の手を握ったまま俯いて泣き出した。あの日、あの
場所で真実を知らされて、あの瞬間から裏切られた。あの瞬間から、
同居人が敵になった。いつまでも、裏切られたトラウマはエルメス
に着いて回る。

あの城で3年も過ごして、3年分の楽しかった思い出は、あの一
夜に塗り替えられた。あの城での思い出は、ほとんどが黒く塗りつ
ぶされた。

「どうして、どうして私はあの瞬間まで気づけなかったの…」

あの瞬間まで気付かせなかったのは、アーサーと俺たちの責任だ。仮に事前に知らせていたとしても、あの戦争を止めることは不可能だった。

きっと、アーサーとジュリオ様が再会した時点で、こうなる運命だったんだ。そうでも思ってたなきゃ、この状況に耐えられない。

しばらく泣きすがっていたエルメスは、少ししてポツリと言った。

「ボニーさんとクライドさんの結婚式、楽しみにしてたのにな……」

拳式当日に起きた戦争。あの二人が恐らく一番残念だったに違いない。あの時

思い出した。

あの時、二人はサルーンに姿を現すことはなかった。呼びに行っただけのシュヴァリエ達も何の報告もなかった。

でも、確かあの時シュヴァリエ達には呼びに行く振りをしてあの二人を殺害しろ、と命令が下りてたはずだ。

まさか、シュヴァリエたちが殺したのか？ いや、それはあり得ない。じゃあ、既にあの二人も殺害されていたのか？ いや、でも直前までミラーカさんとアーサーが二人に着付けをしていたと言っていたし、何よりいくら城が広いからって銃声に気づかないはずはない。ならばサイレンサーを使ったのか？

でも、あの後シュヴァリエ達は何も言っていなかった。生きてるとも、死んでも。あの状況なら仕方がないといえなくもないし、何よりあの後もバタバタしてそれどころじゃなかったし。

今思うと、戦争が終わって逃走の準備をしているときも、俺はエルメスのことで頭がいっぱいでそこまで余裕がなかったけど、誰一人その話題を持ち出さなかったことが不思議で仕方がない。

これは、何か裏があるような気がするな。元々シュヴァリエ達はアーサーの命令でスパイ行為をしていたんなら、俺の知らない事実がまだあったとしても不思議じゃない。

絶対何かある。これはアーサーから俺への挑戦と見た。絶対暴く！

以上

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

報告

エルメスが落ち着いてから、あの時の状況をガライドに聞きに行
った。

「あの時、呼びに行っただろ。あの二人は？」

「実は俺達はアーサー様から二人を呼びに行く振りをして逃げろっ
て言われてたんだ。でも、どうせならあの二人も一緒になって思っ
て部屋に入ったんだけど・・・」

「・・・けど？」

「いなかった。どこを探しても、どこにもいなかった。姿も砂もなくて、生きてるのか死んでるのかも、俺にはわかんない」

「そうか、わかった。完全に生死不明か・・・いや、待て、呼びに行く「振り」？ アーサーがそう言ったのか？」

「そうだよ。で、そのまま逃げろって」

「どういうことだ、それはおかしい。「呼びに行きそのまま逃げろ」じゃなくて「振りをしてそのまま」？」

「本当に呼びに行く必要はない、そういうことか。なぜ、必要がない？ アーサーは、あの二人がいないことを知ってたのか？」

「いや、待て、よく思い出せ。いつからあの二人を見なかった？ いると思いついて、思い込まされていただけで、実は既にいなかったとしたら？」

「いつから・・・戦争の3日前から前日にかけて、アーサーとユアンも見かけなかった。」

まさか、まさか！

「いてもたってもいられなくて、ガラードの部屋を飛び出してすぐさまユアンの部屋に飛び込んだ。」

「コルア！ てめえ何隠してやがる！」

「は！？ いきなりなんだよ！」

「てめえ、アーサーに口止めされてんだろ」

「は？ 何を？」

「とぼけても無駄だ。ボニーさんとクライドさんを逃がしたんだろ」

「いや、俺知らねーし！」

「とぼけても無駄だつったろ。俺はもうわかつちまったからな」

言いながら銃を取り出してユアンの眉間に突きつけた。

「オラ、吐け」

「マジ！ マジ知らないから！」

「俺が撃たねえとも思ってたのか？ 死にたくなけりゃ、吐け」

「マジ副長勘弁しろよ！ 俺は本当に…ギヤアア！」

いつまでも口を割らねえもんだから耳を撃った。耳から血を流して悶絶するユアンに再び銃を向ける。

「次は左だ。吐け」

「マジ副長、最悪だよ。無理だつて、アーサー様が一生誰にも言うなって言ってたんだぞ」

「心配すんな、俺も共犯になってやる。誰にも、エルメスにも言わねえ。お前一人で秘密を抱えんのは辛ねえだろ」

「副長……」

「なるほどなー。つーか、実はエルメスと二人の捜索に行ったんだよ。いずれはまた探しに行きたいって言い出すぞ」

「そうなんだよ。エルメスに限らずみんなだって言い出しかねないよな」

「どーすっかなー。その捜索が不毛だなんて俺らにはわかりきってるし、見つからなくて憔悴していくのを見るのもちよっとな」

「いつそ死んだことにしちゃうとか」

「それでエルメスが泣いたら、お前の言う彼女の前でお前のケツに操縦桿ブチ込むぞ」

「いつそ殺せよ。あ、じゃあ、こう言うのは？ 例えば……」

「あ、それでいいな。それで行こう」

というわけで、エルメスとシュヴァリエ及びシャンティファミリも召集。

シャンティファミリーの奴らは仕方ないが、シュヴァリエの奴らは全員遊んでる暇なくせしてブーブーうるせえ。

「黙れてめえら。今日は重大なお知らせだ。その機能不全な脳と耳をフル稼働してよく聞け」

「いーから勿体つけてねーでさっさと話せ」

「よし、パーシーは後で射殺な。私語厳禁。喋った奴から射殺する」

「・・・」

やっと静かになった。さすが威厳の男、俺。ミスター管理職。

俺 「質問は後で受け付けるからとりあえず聞け。話はボニさんとクライドさんについてだ」

ガロード「なんか手がかり掴めたの!？」

ガルフ 「二人はどこに!？」

俺 「あの日シユヴァリ工達で呼びに行ったときは既にもぬけの殻で、二人は生死不明だった。それもそのはず」

ガルフ 「シカトかよ・・・」

俺 「あの二人はとつくに城から逃走してた」

エルメス「ウソ! でも衣装合わせとか打ち合わせとかしてたよ!」

俺 「そーだな。二人の代理としてミラーカさんがな」

エルメス「あ、そういえば・・・」

俺 「あの二人はアーサーの手引きでミラーカさんの協力の元、逃亡した」

シヤンティ「じゃあ、お二人は・・・」

俺 「ああ、生きてるはずだ」

二人が生きている、その事に屋敷は歓喜に沸き立った。こんなにみんながみんな喜ぶのって初めてだな、と感慨に浸ったのも束の間、歓喜の波は質問の津波になって押し寄せてきた。

ガロード「つーかなんで副長知ってんの?」

ガルフ 「さては以前から知ってやがったな!」

俺 「や、俺もさつき知った」

そう言っつてユアンを前に引き立てると、全員がユアンに視線を注いだ。

リオ 「え？ ユアン、知ってたのか？」

ユアン 「いや、俺もよく知らない」

ディナ 「は？ 全然意味わかんないんだけど」

俺 「だからとりあえず聞けつて。ユアンは当事者だ。でもよく知らない、これは本当だ」

トリス 「いや、だから意味わかんないつて」

俺 「アーサーの不思議能力の一つ、魔眼に最近までヤラれた」

エルメス 「え！？ そうだったの!？」

俺 「そ。コイツはアーサーに操られてあの二人の逃走を手伝った。その事だけを最近思い出したが、その内容はスツポリ抜けたみたいに覚えてなくて、どこにいるのかもわかんねえらしい。な？」

ユアン 「そう。あの日の数日前に、アーサー様とミラーカさんに呼ばれて部屋に入ったところまでは覚えてる。気付いたら車を運転して城に帰つてるところで、その間の事は断片的にほんの少ししか思い出せない」

ベディ 「なんでわざわざそんなことまでして・・・」

俺 「さーな。アーサーが何考えてるかわかんねえのは、今に始まったことじゃねえだろ」

エルメス 「確かにね・・・」

アーサーが何考えてるかわかんねえ、てのはものすごく説得力あ

るな。みんな納得して一気に質問の数が減った。

パーシー「覚えてることって？ 例えば？」

ユアン「二人の入った棺を運んでるとこ、飛行機を操縦してるとこ・・・くらいかな」

ランス「逃がしたことしか本当にわからないんですね。飛行機という事は、イタリアや近隣国ではないんでしょうね」

ユアン「多分。でもそこがどこかは覚えてないな」

エルメス「うーん、だとしたらアメリカかなあ。でもアーサーさん世界中うるついでたみたいだし、わかんないや」

ユアン「一つ大事なことを覚えてるよ」
ガラード「なに？」

ユアン「アーサー様はあの二人に「待ってる」って言ってた。きつと帰ってきてから、アーサー様がちゃんと迎えに行くつもりなんだよ」

エルメス「アーサーさん、人を待たせるの好きだな・・・」

俺「全くだ。でも、わざわざ二人にもそう言ったって事は、ほぼ確実に帰ってくるって事だ。今あの二人をやみくもに探しても世界は広いし、見つからねえだろ。あの二人の無事が分かっているなら、大人しくアーサーの帰りを待とう」

エルメス「そっかあ。でも、生きてるんだね、良かった。本当に、本当に・・・良かった」

ユアンと俺の話聞いて安堵したのか、エルメスは嬉しそうにしながら泣きはじめた。普通の泣き顔とは違う、エルメスの嬉し泣きは何度見てもいいもんだ。

クライドさんとボニーさんが生きていることが、どれほどエルメスの救いになったか計り知れない。アーサーが確実に戻ってくるという事が、どれほどエルメスを救ったか知れない。

アーサーは本当にムカつくな。

ちなみに、この召集に至るまでの裏話。

俺の脅迫と甘言に、渋々ユアンは口を開いた。

「クリスマススイブの3日前、あの二人を連れて、逃がした」

「じゃあ、あの二人は生きてるんだな」

「ああ、生きてる」

「二人はどこだ？」

「それも言わなきゃダメ？」

「当然」

「わわわかった、言うから銃を下ろしてください。あの二人は、日本だよ」

「日本!？」

「そ。アーサー様のご友人の方に預けてある」

「日本・・・なるほど。日本なら吸血鬼は気軽に出入りできねえもんな。それでお前だったわけか。飛行機操縦できるから」

「そういうこと。二人は何も知らねえよ。何も知らされずに彼女の元へ連れてって、アーサー様が戻っていらしてから迎えに行くことになってる」

「つーことはお前、アーサーがほぼ確実に帰ってくることも知ってたんだな」

「・・・ま、そういうことになるかな」

アーサー、俺らはどんだけアンタに踊らされてりゃいいんですか。アンタはあと何個策を立ててんだ！　なんだコレは、謎解きはデイナーのあとにしろ！

「そか、わかった。撃って悪かったな」

「いいけど、マジで黙っててよ」

「わかってるって。で、その彼女つーのは信用できんのか」

「できるよ！　アーサー様の友達なんだぞ！　それにあの方はいい人だ！　綺麗だし！」

「うお、びっくりした。急に興奮すんな。つーか信用に顔は関係ねーだろ」

「でも彼女はいい人だ！」

「ハイハイ、わかった。お前がそこまで言うなら信用する」

俺の失言に異常に興奮するユアン。知らねえ間にその彼女とフラグが立っていたようだ。

それは置いていて、マジでアーサー・・・アンタはわざとやってんのか。俺らとエルメスがアンタの掌で躍り狂ってんのがそんなに楽しいか。

俺も異常だけど、アンタの秘密主義と悪巧みと性格の悪さは群を抜いて異常だ。

つーことは、だ。この事を知ってんのは俺とユアンだけ。エルメスは勿論皆にも秘密。なぜ秘密にする必要があるのかはわからない。エルメスの事を思えばすぐにも話して日本に迎えに行きたいが、残念ながら複雑な山道だったせいでユアンは場所を覚えてねえ。それにアーサーがいない状態で海を渡ることに不安がないわけでもない。

どうせ行けないなら下手に話さない方がいいか。下手に話して探して見つからなかったら余計にエルメスの不安を煽りかねないし、日本だとエルメスの時効だのなんだのしがらみも多いから厄介なことになりかねない。

ん、もしかしてそれで日本を選んだのか。そりゃ、日本ならキリスト教国じゃねえからヴァチカンの人間だって気安くは入れない。吸血鬼も簡単に入れるような国じゃない。潜伏先ならトリンとツァンという選択肢もあるのに、それを差し置いて日本にしたのはその為か？

何より探し出せたとしても、アーサーのいない状態で「宿敵の身内」である俺らがエルメスの傍に居ることを、あの二人と例の彼女がすんなり納得するかが疑問だ。アーサーの説明がなきゃ俺らがどれほど説得しても、策略だと疑われても仕方がない。

あ、それで秘密なのか。なるほど。さすがアーサー、ムカつくぜ。

ていう結果にたどり着いて、真実は闇に葬って生きてることだけを伝えることにした。本当ならすぐにも二人を迎えに行つてエルメスを安心させてやりたい。

でも、エルメスは日本でのこともあるし、ヴァチカンの奴らが日本に近寄る外国人を警戒していないという保証もない。アーサーみたいに魔眼で操れるわけでもねえしな。

だけど、二人が生きているというだけでエルメスはメチャクチャ喜んでたし、俺もすげえ安心した。

つくづくアーサーの策略に躍らせられんのはものすげえムカつくし腹が立つけど、今回ばかりは、感謝だ。

以上

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

報告

時計の針と同じように時間も動かせたらいいと思うのは、不毛な願いだ。

「バレンタインおめでとう」

そう言ったエルメスとシャンティにプレゼントをもらった。二人

はそう言いながら全員にプレゼントを配っている。

それに首を傾げる俺ら。おめでとうつておかしくねーか？ それになんでバレンタインで？ いや、確かに今日はバレンタインだが。

「なんでお前らが贈るんだよ？」

「あのねー、日本では女の子が男の子にチョコと一緒に愛を伝える日なの。外国では逆だって日本を出てから初めて知ったよ。みんなには本当にお世話になってるから、日頃の感謝を込めてみた！」

「ふーん、なんでチョコ？」

「さあ？ 日本人は企業戦略に騙されやすいんだと思う」

「っーかコレ、中身チョコなら受け取り拒否」

「拒否しないでよ！ チョコなわけないでしょ！ もう！」

「冗談だつて」

正直、エルメスから貰ったもんなら中身がセミの抜け殻でもいいんだが、いや、よくねえか。

とりあえず、エルメスを虐めておかないと気が済まない。笑いながら箱を開けてみると、中からはシルバーの腕時計が出てきた。

「お、カツコイイ」

「カツコイイ？ 気に入ってくれた？」

「ああ」

「えへへ、シュヴァリエはシルバーで、シャンティファミリーはゴールドで、みんなお揃いなもの！」

「い、いい年こいてお揃いかよ・・・」

「みんな仲良し！ ちゃんと使つてね！」

周りを見てみると、まんまとお揃い。ガロードとランス以外はみんなアラフォーだったのに、全員お揃いとか嫌がらせか。

まあ、エルメスだしなあ、せつかくくれたんだし、しょうがねえよなあ、と渋々時計を装着。そしたら、ガルフが覗き込んできた。

「あれ？ カイだけフェースの色違うじゃん」

「あ？ お前の見して」

「ホラ」

俺のフェースの色は黒で、よく見るとガルフや他の奴らは白だった。

「カイは筆頭だし、リーダーってわかりやすいように！」

「誰にわかりやすくする必要が？」

「・・・それもそっか」

思わずツツコんでしまったが、俺超嬉しい。俺だけ特別扱い！

ヒヤッホウ！ なんとかバンザイしたい衝動を抑えてエルメスに向き直った。

「エルメス、ありがとう」

「やっとお礼言ってくれた！ 遅いよ！」

「ああ、ワリーワリー」

むくれるエルメスに思わずニヤケて謝ったら、またバカどもが騒ぎ出す。

パーシー「ちょっと、御覧なさい。副長ったらあのニヤケ面」

トリス「ありゃ嬉しくて仕方がないんですわよ」

キルシュ「そうですね。なんてったって、自分だけ特別ですものね」

リオ「大好きなエルちゃんからの特別に愛のこもったプレゼント、そりゃニヤケもしますわよ」

マジ、アイツら・・・という怒りを通り越して、俺は戦々恐々。何故バレた！？ いつの間に俺の本心は白日の下に晒されたんだ！？ 大喜びから一瞬で目が覚めた。

ディナ「シスコンのお兄様にとっては至上の喜びでしょうよ」

あ、そつちか。じゃあいいや。いや、よくねえけど。でもバレるくらいなら、シスコンだと思われた方がまだマシだ。

いや、良く考えたら全部シスコンでなんとか通りそつな気がする。いざとなったら、もうそれで行こう。

いや、もしかして本当にシスコンの思想なのか。そうと言われればそんな気もする。いや、ていうかそもそも妹じゃねえけど。友達なんだけど。つーか、シスコンて何？ んん？ なんかワケわかんなくなってきた。

俺 「君たち、ちよつといいかい？」

リオ 「あら、エルメスのお兄様、なにかしら？」

俺 「とりあえずその貴婦人キヤラはよせ」

ディナ 「面白いじゃん」

俺 「全然。不快にして不愉快。つーかそもそもシスコンってなんだっけ」

俺の質問にみんなは、ん？ と首をひねりながら考え始めた。よく考えたら俺らみんな男兄弟みたいなもんだし、シスコンなんて概念がよくわかんねえ。

ガルフ 「とりあえず、妹大好きでー」

キルシュ 「妹を独占したくてー」

パーシー 「妹にベツタリ」

ユアン 「妹に寄りつく奴が許せなくてー」

ペレアス 「でも北都はクリシュナさん許してたから、認めた相手はいいんだろうな」

ベディ 「てことは、妹の相手は自分より上位ならいいのか」

トリス 「えつとねー、シスターコンプレックスは、特に「姉妹に対する恋愛的感情」や「自分のものにしたいたい独占欲」のある兄弟、と言う図式で捉えられる。byウィキペディア」

ガラード 「へえ、そうなんだ。え、ていうか恋愛的感情？」

ディナ 「つーか「的」ってなに？」

俺 「的もなにも、それはねえんだけど」

ランス 「けど？ それ以外ならあるの？」

俺 「………ねえよ」

ガルフ 「何、その間」

え、ちよつと待て、ちよつと待て。全部該当するんだけど。俺ってシスコンだったの？ これってシスコンだったの？

いやでも、エルメス妹じゃねえし。兄妹みたいとは言われるけど、妹じゃねえし。友達だし。じゃあ、なんだ。

ペレアス「アラアラ、悩んじゃってるよ」

ガルフ 「誰がどう見たってシスコンだったの。そうじゃなきゃただの異常者だよな」

さすがガルフ、俺の副官だけあつて的確な事言いやがる！ 俺思わず冷や汗かいたやつだ！ あー、いつそのことホントに兄妹ならシスコンで済んだものを！ 結局俺はただの異常者じゃねえか！ そうだ、もう認めよう。それを認めて楽になろう。そうしよう。

俺 「ひ、百歩譲ってシスコンだとしても、俺は別に異常じゃねえから」

ガルフ「は？ シスコンな時点で異常者だ」

俺 「な！ ちよ、じゃあ北都も異常じゃねえか！」

ガルフ「北都は開き直ってたからいいんじゃないの」

ランス「ていうか、北都くんも、って言った時点で認めちゃってるよね」

ベディ「確かに。副長も開き直れば？」

開き直れば・・・うわあ、なんて誘惑だ。開き直ったら楽だろうな。開き直りてえー！

でも、俺は明らかに常軌を逸してる。女にすら嫉妬してる位だ。北都の比じゃねえ。完全に開き直ったら、俺は多分エルメスを監禁する。やっぱりシスコンなんてレベルじゃねえ。開き直りは、マズイ。

ガルフ「おやおや、また悩みだしたよ」

デイナ「しょうがない兄ちゃんだねえ」

ベディ「こりやエルメスも大変・・・あれ？ エルメスは？」

トリス「あれ？ ついさっきまでいたのに」

俺が悩んでると言うのに、エルメスは俺を置いてどこかへ行ってしまった。本当ヒドイ、あの子。俺もコイツらもほったらかしかよ。勝手にやってるってか。なんかすげえム力つくんだけど！

「チクショー！ エルメエエス！ どこだあああ！」

「やっぱりシスコンじゃねえか」

「うるせー！」

一言エルメスに文句を言ってやろうと、エルメスを探し回ってみたものの、屋敷の中にはいない。

まさか一人で城に行ったのか！？ いや、さすがにそんな暴挙は

いくらアイツでも・・・やりかねねえ！

一抹の不安を抱えつつ屋敷の外も探し回ってみると、いた。

いつもの様にクリシュナさんの墓に花を供えて、プラス今日は小さな箱も添えてあつて。その前にエルメスがしゃがみこんでいた。そうか、今日はバレンタインだ。日本では女が男にチョコと一緒に愛を伝える日なんだから、さっき言ってたな。

すっかりイライラが収まってしまった俺は、エルメスの隣に座った。

「クリシュナさん、きっと今頃天使にメチャクチャ自慢してんじやねーの」

「アハハ、なにそれ」

「愛妻家にとっちゃ、嫁からのプレゼントは至上の喜びだろ」

「だったら私も嬉しいな」

「間違いねーよ」

少しの間笑ってたエルメスは、段々悲しそうな表情になって涙を零した。

「クリシュナがね、最後に言ったの。幸せになつてって、愛してるよつて。でも、それって残酷じゃない？ クリシュナがいなくて、愛する人がいなくて、どうやったら幸せになれるんだろうね」

クリシユナさんはエルメスにとって幸せの象徴そのもの。愛の象徴そのもの。どちらもその愛情の全てを注いでいたのに、あの日に断絶させられた。アーサーとエルメスを守るために、自分の命が削られるとわかっていて、その命を使い果たした。

クリシユナさんが命を使い果たしてでも、守りたいと思った女。その女が泣いているのを見て、きつとさっきまで有頂天だっただろうクリシユナさんも、今は悲しい顔をしているんだろう。

「クリシユナさんは、本当にお前を愛してたんだなあ」

「でも、死んじやつたら意味ない、傍にいてくれなきゃ意味ないよ。・・・」

「んなこと言うな。意味ならちゃんとある」

「え？ なに？」

「クリシユナさんはお前を本当に愛してたから、幸せになってほし
いって思ってたんだろ。生きてなきゃ幸せにはなれねえだろ。だから
お前をアーサーに託した。アーサーもお前を愛してたから、俺らに
お前を託した。クリシユナさんの願いがあったから、それが今繋が
ってるんだろ。クリシユナさんはいなくなっちゃったけど、クリシ
ユナさんの愛が生きてるから、お前が生きてるんだろ」

「うん、そうだね・・・だけど、やっぱり寂しいよ。私はいつま
で、こんな思いをするのかな」

さすがにこれ以上はもう、俺には無理だ。それはどうしてもエル
メス自身が乗り越えなきゃいけないことだ。

エルメスがクリシユナさんの死と向き合って想い続ける覚悟をす

るか、新しく恋をするか、クリシュナさんを忘れるか。

早くアーサーが帰ってきて、エルメスの傍にいてくれればいいのに。いや、この際エルメスが愛した相手なら誰でもいい、ランスでもガロードでもアジメルでも。エルメスを愛して、エルメスが愛した人が隣にいてくれたら、幸せになれるのに。

こんな別れ方をしたら、ジュリオ様やアーサーの様に100年や200年では忘れられないかもしれないな。それほど長い月日を、エルメスは苦しみ続けなきゃいけないかもしれない。

そこに至るまで、一体どれほどの時を刻まなきゃいけないんだろう。時間は、戻すことはもちろん、進める事も出来ない。時間は時計と同じ動きをしてはくれないんだな。

「お前はきつと、クリシュナさんの事で長い時間をかけて、悩んで苦しむんだろうな」

「・・・そうだね。ずっとずっとこんな思いをするんだろうね」

「でも、場合によっちゃそれもあつという間だ」

「どうして？」

「お前がそのまま足踏みしてたら時間は大して進まねえだろうけど、お前が進んだらその分時間も早く過ぎるんじゃないかねえの」

そう言ったらなんでか知らんがエルメスは驚いた顔をして、笑い出した。

「なに？　なんか俺変なこと言った？」

「アハハ、違うの。クリシュナと同じようなこと言うんだなんて
て」

「クリシュナさんが前なんか言ったのか？」

「うん。いつまでも苦しいって言ってちゃダメだよって。前に進みなさいって。カイにまで言われると思わなくてびっくりしちゃったよ」

「そりやお前、俺が正しいって事だな」

「そうかもね。カイはそう言うところクリシュナに似てるね」

「・・・アーサーに似てるっつたり、ジュリオ様だったり、クリシュナさんだったり。俺は何者だよ」

「二重人格かと思ってたけど、多重人格だったんだ」

「お前そんなこと思ってたの」

「思ってた」

どうやら俺は既に異常者だと思われていたらしい。軽くショックなんだけど。折角人が慰めてるっつーのに、本当にこのお嬢ちゃん
はヒドイ子だ。

ま、でも、結果的に涙が止まって今笑ってくれてるから、まあ、
いっか。

以上

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

報告

もうそろそろ延滞料金100万超えるぞ。早く戻ってこねえと借金地獄だぞ。ご利用は計画的に。

「まさかの3か月経過」

「もう春だね・・・どうしよう」

「つか俺今日で45じゃん！ 怖！」

「え？ カイ今日が誕生日なの？ 45歳？」

「あ、しまった」

「別に隠すことでもないじゃん」

「いや、ミステリアスな方がいいだろ、なんか」

「別に？ あ、誕生日おめでとう」

「ハア、この歳になると嬉しくねえ・・・」

ウソです。エルメスに祝ってもらえたら嬉しいです。超嬉しいです。フィーと溜息を吐きながらエルメスと未だ帰らぬアーサーに思いを馳せてたら、急にシユヴァリエ達が笑い出した。

「マジウケる！ これ見て！」

そう言ってトリスが見せてきたパソコンの画面。

3月25日生まれ 牡羊座の基本性格

ポジティブキャラクター

- ・ 開拓精神、あらゆることに関するパイオニアに成り得る人物。
- ・ 新しい事を始めるエネルギーに満ちている。
- ・ 人々を牽引していく力、リーダーシップを発揮することができる。
- ・ パワフルでダイナミックな実行力。
- ・ 旺盛な競争心、負けず嫌い。
- ・ どんな分野においても自分が一番になろうとする。勝つまで戦う。
- ・ 瞬発力、素早く機敏に行動する。
- ・ 判断が早い。
- ・ 勇敢、多少の危険や障害はものともしないで行動することができる。

- ・ 独立的、人に頼る事は考えない。自分で考え自分で行動する。
- ・ スポーツマンとしての才能。
- ・ 現実主義者。いざという時に冷静に行動できる。

「おお、まさしくじゃねえか。つーか俺牡羊座だったのか」

「自分の星座位把握してないの？」

「興味ねえ」

「それより、ネガティブの方見てよ」

ネガティブイメージ

- ・ 独善的、自分の行動は常に正しいと信じている。
- ・ おせっかい。
- ・ せっかちで、早く結果を出そうとする。むやみに他人を急がせる。
- ・ あわてもの、判断も行動も素早いが、そそっかしい。
- ・ 勘違いなことをしでかしがち。
- ・ 衝動的、粗野、短気。すぐにカッとなる傾向。
- ・ 尊大。自分はこの世で一番偉いと思っていることがある。
- ・ 自己中心的、宇宙は自分を中心にまわっていると考えている。
- ・ 他人の気持ちを考えられない。無愛想でぶっきらぼう。
- ・ 中途半端、飽きっぽい。
- ・ やりかけたままの事がそのままになりがち。すぐにやめてしまう。

「.....」

「アハハハハ！ すごい！ まるっきりこれだよね！」
「星座占いバカにした！ マジウケるんだけど！」

全員大爆笑しやがってムカつく・・・微妙に思い当たるところがあるから余計ムカつく。チクショイ。大体占いなんで、60億いる人間をたったの12種類やそこらで大別しようとする事自体がナンセンスなんだよ！

「くっくだらねえ。バカじゃねーの。こんな誰にでもあてはまるようにできてんだよ」

「出た、独善的」

「うるせえよ！」

「出た、短気」

「・・・ムカツク。じゃあホラ、エルメスの見せてみる。お前何？」

「あ、見たい見たいーい！」

「だから何座だよ」

「出た、せつかち」

「黙れ！」

「私てんびん座！」

「ハイハイ、てんびん座ね」

天秤座のポジティブキャラクター

- ・協調性、あらゆる人々との調和を大切にする。
- ・説得力がある。信用されやすい人物。友人が多い。
- ・友愛的、平和主義。人々との良好な人間関係を築く。

- ・外見には気を使う。洗練されたセンスの良いファッション。
- ・正義、フェアプレイの精神を持つ。
- ・芸術的センスがある。ロマンチスト。
- ・如才のなさ、知的で上品な印象を人に与える。
- ・コミュニケーション能力が高く、社交的、外交的。
- ・優しさ、共感的。機転がきく。
- ・なにごと人も人とわかちあうことができる。
- ・常に強いパートナーシップを必要としている。

「微妙じゃねーか？ 知的で上品？ 外見に気を遣って、ソレ？」
「ヒドイ！ 私だって色々勉強してるもん！ カイより絶対物知り！」

「知識と知性は別モンだろ」
「ムカつく・・・」
「じゃあ、ネガティブみてみよう」

天秤座のネガティブキャラクター

- ・気紛れ。
- ・策略的な愛情、人に媚びる傾向。
- ・論争好き。自分を正当化する傾向。
- ・平和至上主義、面倒なことや不快なことには向かっていかない。
- ・波風をたてるのを嫌う。問題をためこむ。
- ・怠け者。警沢好き。
- ・優柔不断、決断が遅い。諦めやすさ。
- ・ナルシスト、虚栄心から自己陶醉に陥る傾向。

・孤独には耐えられない。

「あー、わかるわかる。お前媚びるよな。気紛れだし、面倒事から逃げたがるし、優柔不断で金もかかる」

「えー？ 媚びてるわけじゃないよ！ 少なくともナルシストじゃない！」

「必死にアーサーに媚びてご機嫌取ってたじゃねえか。電波がナルシストのいい証拠」

「電波じゃないもん！ でも、孤独には耐えられないカモ！ ねえ、これってネガティブなことなの？」

「少なくとも無理やり同室を強いられてる俺にしてみれば、ネガティブ以外の何物でもねーな」

「いい加減それは諦めてよ！ ケチ！」
「我儘に大人しく従ってやってんだから文句位言わせるよ。お前が贅沢言うな」

「むきー！ ムカつく！ なんでネガティブの時だけ食いつくのよ！」
「あー、うるせえ。キャンキャン言うな」

なんだかんだで合ってるっちゃあ、合ってるか。俺のは合ってるけど。

それからしばらくみんなの占いを見てワァワァ騒いでたら、エルメスがアーサーのを見たいと言い出した。

「アーサーの誕生日知ってるのか？」

「確かこの前調べた時に見たような・・・えーと確かさそり座だっ

たよ！」

「じゃあさそり座見てみるね」

さそり座のポジティブキャラクター

- ・公正で誠実な性質をもつ。
- ・深くて激しい感情の持ち主。
- ・内面的なエネルギーが人一倍強い。驚くべき精神力。
- ・カリスマ的な存在感。強い意志、信念を持つ。
- ・実行力がある。約束は必ず履行する人物。
- ・決断的、合理的、内向的、情熱的、優れたセックスアピール。
- ・神秘的で魅力的。
- ・鋭い洞察力、直感的、気付き、第六感が冴えている。
- ・高い潜在能力。負けず嫌い。
- ・困難、苦境にあっても、かならず這い上がる。
- ・経営的手腕がある。

「うーん、合ってるっちゃあ合ってるか」

「公正で誠実・・・？」

「元王様なら経営手腕もありそうだよね」

「約束守るしね」

「情は深いかもな」

「神秘的で魅力的だな」

「アーサーさんちって美形の家系らしいよ」

「マジか」

「カリスマと言えばカリスマだ」

「情熱的で、セックスアピールってエロオヤジって意味？」

「それは違・・・いや、そうかも」
「フーかポジティブ要素がいいトコ取り過ぎじゃね？」
「ではお待ちかね。ネガティブ見てみよう」

さそり座のネガティブキャラクター

- ・ 執念深い。復讐心を燃やす。
- ・ 良い事も悪い事もいつまでも覚えている。
- ・ 妥協しない。
- ・ 支配的、独断的人物。権力を好む。
- ・ なかなか他人と親しくなれない。
- ・ なかなか他人を信用しない。
- ・ 不寛容、神経質、秘密主義。
- ・ 向こう見ず、暴力的。
- ・ 戦略的、疑い深さ、嫉妬深い。
- ・ 自己抑制がいきすぎることがある。

「あー、確かに。わかるわかる。戦略的、懐疑的、嫉妬深いなんてドンピシャじゃねえか」

「支配的で独断的もだよ。いつも勝手に決めて決定押し付けるし」

「不寛容で秘密主義だし暴力的だよな」

「親しくなれないっつーか、なるうとしないよな」

「自己抑制？・・・ああ、エルメスに関しては抑制してたか。しなくていいのに」

「・・・私は有難かったけどね。執念深い、これもだよ。あの人すーごい根に持つから」

「あー、良くも悪くも妥協しねーよな。神経質で完璧主義」

アーサーも例にもれず、ネガティブキャラクターをいじくられて悪口大会になった。怒るなよ、全部事実だ。星座占い、あなどりがたし。俺のは合ってねえけど。

アーサーがさっさと帰ってこねえから、みんなで占いなんかやって陰口をたたく羽目になるんだぞ。自業自得だ。

トリス達の思いつきのせいで、一時的に占いが大流行したぞ。占いなんて良いとこだけ信じて悪いとこ忘れちまえば良い気もするけど。つーか、見てもすぐ忘れるし、あんまり意味のあるもんじゃねえよな。

ま、でも、どの占いにしてもアンタのが一番盛り上がった。アンタが謎の男過ぎて、みんなアンタの本質に興味津々だったぞ。

いない間に、どんどん暴かれてくな。ご愁傷様。それが嫌ならさっさと帰ってこい。あ、金も忘れんなよ。

「あはははは！ カイ見て！ 牡羊座の人が12星座中一番占いの結果が合っていないって反論するんだって！」

アーサーのみならず占いにまで踊らされてる俺って一体・・・

以上

拝啓 アーサーさん

んもう！ 3か月ですよ！ もう春じゃないですか！ 待つって決めたけど、正直いつまで待てばいいのかも全然わかんなくて、漠然と待つって決めたもんだから段々不安になってきましたよ。

そう言えば、今日はカイの誕生日でした。別にお祝いとかしなかったけど。それで、トリスが星座占いを見つけてカイの基本性格みたいなのを見たらあまりにもピッタリで、みんなで大笑いしました。

良いところは、パワフルでリーダーシップがあって決断力があって、独立心があって勇敢とか。で、悪い所がそそっかしくて、無愛想で、自己中で、短気。ね、ピッタリですよ。本人は絶対間違ってるって言い張ってましたけど。

それで、牡羊座の人は12星座中一番占い結果が合っていないって反発するんだって教えてあげたらすごく悔しそうな顔してました。本当あの人面白いですよ。

私も占い見てもらったんですけど、いいところに常にパートナーシップを必要としてるって書いてて、悪い所に孤独に耐えられないって書いてました。これは本当に、正解だと思いました。

よくよく思い返してみると、最初の頃はアーサーさんに頼って、クリシュナと出会ってからは、クリシュナにベツタリで、今はカイにまわりついてます。

本当に私って、誰かが傍にいなきゃ生きていけないんですね。なんか妙に実感しちゃいました。

ていうか私、本当にウザいのかも・・・この前カイが私を避けるって書きましたけど、その後仲直りできたけど理由は教えてくれなかったんですね。なんでもないとか言って。

この占いを見て思ったけど、もしかしてウザいのが嫌だったのかも。よく考えたら、孤独に耐えられない私と、孤独を愛するカイじや相性最悪じゃないですか。カイにしてみたら相当ウザいのかも・・・まあ、でもいいですよ、別に。私は寂しいんだもん。

でね、でね、アーサーさんのも見ちゃいました。アーサーさんは11月10日生まれだからさそり座でした。

で、さそり座のいいところは情が深くて、約束守って、精神力が強くて、何事からも逃げなくて、神秘的なカリスマ。悪い所は、独断的で、支配的で、策略家で、暴力的で、秘密主義で、妥協しなくて、嫉妬深くて、執念深い。

アーサーさんのもピツタリでみんなで超盛り上がりました。

アーサーさんの占いを見て、思いました。あの戦いするとき、私が逃げまじょうって言ったら、アーサーさんは言いましたよね。それは許されない、それはまるで敗北主義者のようだって。

あれほど大変で辛い状況なのに、そこから一步も逃げようとして立ち向かうなんて、アーサーさんは本当に強い人ですね。

なのに、なのに！ ボニーさんとクライドさんを逃がしたでしょ！ なんて教えてくれなかったんですか！ もう、ヒドイ！ 秘密主義も大概にしてくださいよ！ もう！

しかもユアンを魔眼で操ったりなんかして！ もう、本当アーサーさんのやることには着いて行けませんよお・・・

でも、すつごく嬉しかった。二人が生きてるってカイとユアンから聞いたとき、本当に光明が見えました。本当、アーサーさんでかした！ って思いました。

アーサーさん、あの二人を逃がしてくれて、本当に、本当に、ありがとうございます。

どこにいるのかわからないし、いつ会えるのかもわからないけど、生きてればそのうちきつと会える。アーサーさんが帰ってきたら、二人にも会える。

ますますアーサーさんが恋しくなりました。ますますアーサーさ

んの帰りが待ち遠しくなりました。嬉しいのに余計ソワソワしちゃって、正直複雑な気分です。

でも、アーサーさんが教えてくれてなかったから、カイと二人で城まで探しに行ったんですからね！

それで城の有様があまりにも酷くて、あの日の事を思い出して辛くなってすぐ帰っちゃって。泣いちゃったじゃないですか。

これが本当のくたびれもうけの骨折り損ですよ。全くもう。

カイも言ってたけど、本当にアーサーさんの企みには振り回されっぱなしです。踊らされっぱなしです。もう本当、いい加減にしてください。一喜一憂するのも疲れるんですからね！

さすがにもう、これ以上の事はないだろうと思うけど、もう本当勘弁してください。

でも、本当に一喜一憂のふり幅がこれほど大きい事ってなかったと思います。二人が生死不明なことにすぐ落ち込んだのに、二人が生きてるってわかっただけで大ジャンプですよ。

人を絶望にも陥れて、人をこれほど歓喜させることって人の生き死に位なものですよね。

先月、バレンタインの時にクリシュナのお墓詣りついでに、クリシュナにもプレゼントあげてたんです。いつも毎年クリシュナが私にくれたり、愛してるって言うてくれたから、今年は私から。

その時カイが来て、一緒にお墓参りしてたらあの日の事を思い出して悲しくなって泣いちゃって。その時にカイが言うてくれました。

クリシュナは私を愛してたから幸せになってほしくて、生きてなきゃ幸せにはなれなくて、だから私をアーサーさんに託して、アーサーさんも同じように思ってたから俺らに託したんだぞって。

クリシュナの愛が生きてるから、それが繋がって私が生きてるんだって。

その時は悲しくて素直にその言葉を聞けなかったけど、いつまでも足踏みしないで、お前が進めば時間もその分早く過ぎるって言うてくれて、なんか無愛想なクリシュナと話してるみたいでおかしくなっちゃいました。

それでちょっと元気が出て、頑張らなきゃって思いました。クリシュナの、今でも生きている愛を、それほどの愛を無駄にしちゃいけないなって。頑張って幸せになれる様に私も努力しなきゃって思いました。

今はまだやっぱり私の心の中は、あの日の事で、悲しみの青で染まっています。

でも、ボニーさんとクライドさんが生きてた。アーサーさんが帰

つてきてくれるってわかった。カイやシャンティ達が傍にいてくれるから、安心できる。

ちよつとずつだけど、心の中は青ばつかりじゃなくなってきました。私がつと頑張つて元気になったら、もつと青は薄くなるんじゃないかなって思えます。

私の色は、やっぱり青なんだと思います。カイは、黒かな。ガードは白。ランスは・・・バイオレット。シャンティはオレンジっぽい。アーサーさんは、やっぱり赤でしょ。

みんなが傍にいてくれて、ゆっくり平和に過ごしていけたら、きっと私の心の中は万華鏡ですよ。

でも、アーサーさんが帰ってきたら全部真っ赤になっちゃうかも。それはそれでコワイ。

でも、帰つてこなくて今みたいにずっとカイに引つ付けていたら真っ黒になるかも。それもそれでコワイ。

赤が加わつたらそれだけですごく明るく華やかになります。赤が入ったらボニーさんの黄色とクライドさんはブラウンかな。それも加わると思うと楽しみ。

早く帰つてきて、色を添えてください。

敬具

宣誓書

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

何がそんなに面白いのか、エルメスは食い入るように見つめている。ランスも一緒に。

「相変わらず手際良いねえ」

「さすがに唯一の取り柄なだけあるね」

「ランス、撃ち殺されてえのか」

「やだなー、冗談じゃん」

エルメスとランスは俺が愛用してる銃「フロントム」を整備するのずっと眺めてる。俺的には何がそんなに面白いのかわからんけども、二人はずっと人形劇でも見る子供みてえにガン見してる。

「私に組立させて!」

「ヤダ、お前絶対壊す」

「壊さないよ!」

「信用ならん。それに俺はコイツを他人に触られんのがヤなの」

「ちえっ、ケチ」

「ケチじゃねえ」

コイツに触らせて銃が暴発でもしたらコトだ。エルメスならそう言う事をやりかねない。俺はまだマシだけど、ランスは確実に死ぬ。そこまで発想のおよばねえ残念な脳のエルメスには、とてもじゃねえけど触らせるわけにはいかん。

エルメスの我儘を突っぱねて溜息を吐く俺に、興味津々の目を向けてランスが尋ねてきた。

「ねーねー、その銃何年くらい使ってるの?」

「確かまだ2年くらいか。コイツで7代目」

「そんなに壊れるもんなの?」

「使用頻度がハンパなかったからな」

「ふーん。それお気に入り?」

「俺には使い勝手がいいからな。名前も俺に似合ってるし」

「ああ、確かにカイは怪人だよな」

「お前が言うな」

「言つよ」

ム力つくガキだ。いつか撃つてやる。イラつく俺の気を知ってか知らずか、俺とランスの会話を見てエルメスは異様にニコニコしてやがる。まあ、エルメスの事だ。何考えてるか想像はつく。

「カイとランスは仲良し親子みたいだね」

ホラ来た。絶対そう来ると思った。ある程度想像のつく言葉に、盛大に溜息を吐く俺とは対照的にランスは文句を並べたてる。

「エルメス様、冗談じゃありませんよ。こんな野蛮な男と僕のどこをどう見たら仲良しに見えると言うんですか」

「丸見えだよ」

「見えませんよ！ 失敬な！」

「お前の発言の方が失敬だろうが」

「ハン、カイに敬意を払う義理なんてないもんね！」

「お前ね、一応俺上司なんだけど？」

「以前はね！ 今は違うじゃん！ 僕はカイの部下じゃなくてエルメス様の部下だから！ 勘違いすんな！」

「このクソガキが・・・喰われてえのか」

「これだから野蛮な男は嫌いなんだよ。ねえ？ エルメス様？」

「そつだよ。カイ、あんまりランスを怖がらせるような事言つちやダメじゃん」

「お前な・・・」

このクソガキのどろがビビってるように見えるんだ。

「へへーんだ、喰えるもんなら喰ってみろ！ エルメス様に嫌われなくても知らないよ！」

って顔に書いてんぞ。ったく、どんな教育を施したらこんなクソガキに育つんだ。親の顔が見てみた・・・こいつを育てたの、俺じやん。じゃあ、俺のせいじゃねえ。コイツが勝手にこうなったんだ。そうだ、そうに決まってる。

しかし、なんでエルメスはコイツの腹黒さに一切気付かねえんだよ。どこまでバカなんだ。それとも気付いててほっといてるのか。

「私には優しいから別にいいや！」

とか思ってたそうだな。あ、それだ。絶対それだ。エルメスは変なところで計算高いところがあるから間違いないえ。

溜息を吐きながら銃を磨く俺に、再びランスが質問してきた。

「ねーねー、何歳から銃使ったの？」

「最初は10歳」

「え！？ そんな子供の時から？」

「まあ、ガキの頃から仕込んで一流の兵器に育て上げるのが、ジュリオ様の目論見だったからな」

「嫌じゃなかったの？」
「銃を使うこと自体は、別に」
「人を殺すのはやだった？」
「最初はな。もう、慣れた」
「慣れたのは、いいこと？」
「さあな」

マセガキが。微妙に嫌な質問してきやがる。つーか、そんなこと聞かれる俺の気持ちも考えろつての。第一、んなこと聞いてどうすんだよ。

と、思ってたら一つの可能性を見出した。

「ランス、お前はダメだ」

「・・・なにがさ」

「お前には一生銃を触らせねえし、教えねえ」

「なんで！」

「お前は銃を使えるようになってエルメスを守りたい、とか思ってるんだろうけど、これじゃエルメスは守れねえぞ」

「守れるよ！ 僕が強くなって守るもん！」

「お前が強くなるのはいい。でも、銃はダメ」

「だからなんでだよ！」

「これは人殺しの道具だからだ。人を殺すもので、人を守るうなんて滑稽だな」

「・・・・・・」

「お前はいずれエルメスに吸血鬼化してもらうんだろ。実際それで十分すぎるほど強くなれるし、後はガルフやエルメスにでも格闘訓練つけてもらえ」

「・・・・・・ケチ」

「ケチじゃねえ」

ランスにまでケチ呼ばわり。なんだ、俺はそんなにケチか。いや、ケチじゃねえ。このバカ二人が我儘なだけだ。俺とランスの会話を聞いてエルメスはまたニコニコしてる。何考えてニコニコしてるのか今回もある程度は想像つく。

俺とエルメスの飯を取りに行くつつって部屋からランスが出て行ったあと、エルメスは嬉しそうに言った。

「カイは優しいね」

ホラ来たー。またしても的外れな感想で勝手に悦に浸りやがって。エルメスの中で俺は一体どんなキャラクターを構成してんだ。

「優しくねえし、優しさで言っただけじゃねえよ」

「でも、ランスに銃を使って欲しくないっていうのは、ランスに悩んだり苦しんだりしてほしくなかったからでしょ？」

「違う。銃に慣れたら、撃つことに慣れたら、その内人殺しにも慣れる。俺はそれが嫌だっただけだ」

「それはランスの為にでしょ？」

「いや、俺の為。俺の理想をランスに押し付けてるだけだ」

「でも、結果的にそれがランスの為になるなら、やっぱりそれは優しさだよ」

なんて平和な脳してやがる。コイツに掛ければある程度の奴は善人扱いだ。ある意味恐ろしい。

多分コイツは

「私って周りに恵まれてる！ 私の周りっていい人ばかり！」

とか、幸せなことを思ってるんだらうけど、実際そんな事ねえ。そんな事じゃその内また誰かに騙されたり裏切られるぞ。エルメスのこついうところも非常に危険だ。

ジュリオ様の事も、トリンの時も、エルメスは人を信じすぎて傷ついた。それが悪い事だとは思わないけど、そのせいでエルメスを傷つけるなら、もう少し人を疑う事も知らなきゃいけない気もするんだけど。

「お前さあ、その誰でもいい人に見えるのは何とかならねえの」

「ならない！ だっていい人だよ、カイは」

「いい人じゃねえし、仮にいい人だとしてもお前にだけだ」

「じゃあいいじゃん」

「.....」

ダメだ、反論すら思いつかねえ。つーか呆れて物も言えねえんだけど。結局エルメスは自分に優しくしてくれるなら、その本質がどうであれ全然構わねえのか。それってどうなんだ。

エルメスは周りの人間をみんな大事にするけど、それは周りがエルメスに優しくするからだ。もし、今誰かがエルメスに優しくしなくなつて、他人みたいになつたらエルメスはどうするんだらう。

「なあ、お前はさ、人殺しに慣れたか？」

「慣れたね」

「でも最初は嫌だったろ」

「最初は嫌だったよ。でも、慣れちゃった。その事はすごく残念に思うけど、仕方ないよね。だって全然知らない人の命は、重く感じないんだもん。それは誰だってそうじゃない？」

「・・・そうだな。俺も、そうだ」

変わってしまったのは、俺だけじゃなかったらしい。エルメスの性格からして、最初はすごく嫌だったはずだ。その為にアーサーとケンカしたって聞いたことがある。それなのに、今は笑って慣れたと言う。

銃が殺すのは他人だけじゃなくて、使う人の心も殺してしまうんだな。つか、俺はそれを知ってたけど。

もしあの戦争が起きなくて、エルメスがずっと俺らの隊長として人殺しを続けてたら、いずれはエルメスも俺みたいになってたのか。

狂った化け物は、俺とアーサーで十分だ。今ならまだエルメスは引き返せる。これから戦いのない世界で生きて行けば、エルメスは昔のエルメスに戻るんじゃないかと思う。

エルメスの博愛主義は、広く、浅い。きっと昔は今よりもっと深かった。そのせいで傷ついてきたこともあっただろう。でも、俺はそっちの方がいいと思う。もし、今後そう言うことが起きそうになったら、俺が守ればいいだけの話だ。

俺の心は化け物だ。俺には「ファントム」が似合う。でも、ラン
スやエルメスに「ファントム」は似合わねえ。

アーサーに一方的に約束しよう。俺はエルメスを化け物にはしな
い。アイツを俺やアーサーのような化け物にはしない。アイツの博
愛主義を本物にしてやる。

アイツの心は、俺が守るから。

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

報告
シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

連戦連敗。ただいま10連敗中。どんだけだよ。

「チエツクメイト」

「イヤー！ また負けた！」

「エルメス様、相変わらずチエス弱過ぎです」

「ランスが強いんだよ」

「確かにそうですが、僕も手加減してるんですけど」

「そんな真実聞きたくなかった・・・」

11歳のガキにチエスで全敗と言う結果に打ちひしがれるエルメス。今まで何度も挑んで一度も勝てたことがないらしい。やっぱバカだ。

チエスは知恵を図るゲーム。正直エルメスに一番向いてないゲームと言える。エルメスにはジェンガあたりがお似合いだ。

「お前向いてねーんだよ。諦めろ」

「だって1回くらい勝ちたいじゃん」

「手加減してもらって負けてる奴がよく言うよ。お前にはムリムリ」

「じゃあカイなら勝てるの？」

エルメスの言葉にランスはギツと俺を睨みつける。なんだそれは、やる気満々か。

「ランスごときに俺が負けるわけねえだろ」

「じゃあ私の代わりにやって！」

「いいけど、圧倒的に勝ったりしたらランス泣くかもしんねえしなあ」

「誰が！ 絶対勝つ！」

「言っとくけど手加減しねえぞ」

「望むところだ！」

というわけで、なんか俺とランスで対決することになった。

ランスは11歳にしてエルメスを全敗させるだけあって、なかなかやりこんでいるらしい。まあ、エルメスが弱いだけだけで、

結果。

「チエツクメイト」

「うわー！ ウソだ！」

「ハハハハ、俺に勝とうなんて100年早ええ」

「カイすごい！ 強いね！」

「いや、ランスもなかなか強い。でも、俺の方がもつと強い」

「マジあり得ない・・・こんな野蛮人に・・・」

「言つとくが俺は頭脳派だ。お前はやる方だけど、狡猾さに欠けるな。まだまだガキだ」

「くっそー！」

「親子対決はやっぱりパパの勝ちだな」

「親子対決」？ 親子じゃねえ。ふざけんな。でも悔しがるランス、いいもの見れた。

俺とランスのチエス勝負を面白がっていたの間にかシュヴァリエの奴らやシャンティ達も観戦してた。

「ていうか、カイは大人げないな。ランス相手に本気出して」
「うるせえ。俺はウサギを狩るのにも全力を尽くす獅子のような男なの」

「場合によってはそれってバカだよ」

「うるせえな！ バカ女に言われる筋合いねえんだよ！」

「自分だってバカのくせに！ ミナ様の命令だってロクに聞けないバカじゃん！」

「聞いてるよ！　つーかエルメスのは命令じゃなくてただの我儘じゃねえか！　俺は十分に聞いてますけど！」

「全然足りない。ミナ様の前に跪いて靴舐めろ」

「舐めるか！　ふざけんな！」

「俺らは靴以外ならどこでも舐めるよ」

「うわ！　やめろ、お前ら！　エルメスを変な目で見るな！」

「アンタの部下も最低だね」

「も”じゃねえ、”は”だろ！」

「も”だよ”

全く、ムカつくバカ女とバカなシュヴァリエのせいで勝利の余韻はどっか行っちゃまったよ。エルメスは突然のセクハラ発言に困ってるし。可哀想に。

エルメスをディフェンスしながらシュヴァリエ達に向いた。とりあえず、コイツらにもう一度釘を刺しておかねば。

「テメエら、俺のエルメスに指一本でも触れたらブツ殺すぞ」

「副長のじゃねえじゃん」

「あ、間違えた。アーサーのエルメスに・・・」

「今更言い直しても遅ええよ」

痛恨のミス！　一番言っではいけないことを公然と言い放ってしまった俺、残念！　一瞬激しく動揺したけど、今後の展開は予想できた。次のコイツらの言葉に期待。

「極度のシスコンだな」

ホラ来た！ よっしゃ！ 神様ありがとう！ 思わずガッツポーズしそうになる俺。

シユヴァリエ達は一齐にシスコンコールを送り始めるけど、今回はばかりは全許し。敢えてその言葉を飲み込もう。

「カイ、もう否定しないの？」

シスコン呼ばわりされて安心する俺に、微妙に痛いところを突いてきやがる俺のエルメス。が、そこも計算済みだ。

「いや、認めてねえけど。いい加減反論するのに疲れたから、もう好きにさせる。勝手に言ってるやいいんじゃないね」

「ああ、そうだね」

クリアー！ さっすが俺！ なんで俺こんなに機転がきくんだろ、本当。マジ俺の脳は完璧だな。本当神はスゲエな。俺のような完璧な存在を作り出すなんて、本当俺スゲエ。

しかし、エルメスは俺の脳を凌駕するほどの爆弾を投下する。

「ねえ、私カイのなの？」

「え！ い、え、えー・・・いや、違ええよ。お前はアーサーのだ」
「でもさっき俺のつて言った」

「あー・・・それはお前アレだよ。俺の友達ってことだ」

「そうなの？」

「そうだ。つーかそれ以外に何があるわけ？」

「・・・まあ、そうですね」

「そうですねよ」

うつわ、微妙。エルメスは「なんつか釈然としないなあ」みたいな納得できないみたい顔してやがる。

チクシヨー、俺はまだ修行が足りないのか。人生経験と言う名の修行が足りないのか。もう45だというのにまだ足りてねえのか。つーか、良く考えたら今までこんなトラブルなかったからなあ。しようがねえ。俺は悪くねえ。ジュリオ様のせいだ。

困ったことが起きたら全部ジュリオ様のせいだ。これでオツケイ。

とりあえず、場の空気を入れ替える為に以前から気になってたことをシャンティに相談してみることにした。

「つーかお前らさあ、いつまでミナって呼ぶ気だよ。もう今はエルメスなんだからエルメスって呼べ。アーサーも」

「なんでアンタにそんな事言われなきゃいけないわけ？ ミナ様はミナ様じゃん」

「そりゃそうだけど。状況的に見てそれがマスそうだから言ってるの」

「なんでマズイの？」

「今俺らは逃亡中の身。エルメス達がインドにいた頃の事は調査でわかってる。一応死んだことにしてるし、城を焼いてきたから報告書なんかも燃えちまつてると思うが、逃亡したことが発覚しないともし言い切れない。もし逃亡先としてここが怪しいってことになって、

そんな時調査員たちが俺達とアーサーやエルメスの名を聞いたら、お前らごと抹殺だ」

「それはいくらなんでも心配しすぎじゃないの？」

「しすぎるに越したことはねえ。一応データも消したらしいし、その可能性は低いとは思うけど念のためだ。イスラムの奴らの事もあ
るし、こっちは生死がかかってんだからな」

「うーん、そつか。それもそうだな、わかった」

何とかシャンティが納得してくれた。ずっとこの事は気にかかってたけど、アイツらはミナと伯爵を崇拜してたわけだし、その気持ち
を無下にするのも可哀想な気はしたからな。

でも、命には代えられねえし、何よりシャンティ達まで死ぬようなことになつたら大変どころの騒ぎじゃねえ。

とりあえず、納得してくれてよかった、と思ってたらシャンティが何か思いついたような顔をしてもう一度俺に振り向いた。

「でもさ、いくら名前変えたって、顔変えなきゃ見つかったらアウトじゃん？」

「そう、確かにそうなんだよな。でもこん中で顔変えられんのはエルメスとリオしかいねえからなあ」

「え？ リオ顔変えられたの？」

「エルメス知らなかったっけ？ なんか知らんけどアイツはそれができたから、潜入とかさせてただけだ」

「あー、そうだったんだ。知らなかった」

「それよりどうすつかなあ。うーん、なんとか頑張つて変身能力を開発するか・・・難しいな。じゃあ整形？ いや、俺の美しい顔に傷をつけるなんざ許せん。大体手術中に元に戻りそうだな」

「何言ってるんのアンタ・・・ていうか、アンタら目立つんだよ」
「だろうな。主に俺が美しいから」
「違ええよ！ 全員金髪だからだよ！」
「ああ、そういえば。じゃあとりあええ髪色を変えよう」

というわけで、何色がいいかそれぞれアンケートを取ることになった。エルメスとリオは除外。ランスもまだ子供だし除外。俺を含め、残りの10人の意見を紙に書かせた。

俺 「黒が1人、ブラウン1人、ライトブラウン3人、ベージュ2人、アツシユ？ こいつは却下」

トリス 「なんで!？」

俺 「俺とカブるからダメ。それともお前俺に憧れてんの？」

トリス 「違ええし！ もう、じゃあベージュでいい！」

俺 「じゃあベージュ3人・・・オイ、ブリーチって書いた奴誰だ」

パーシー 「俺俺！ プラチナブロンド目指す！」

俺 「テメエ相変わらずクリシユナさん目指してんのか。身の程を知れつつたのを忘れたか」

パーシー 「ええ!？ 違うのに・・・じゃあもう黒でいい」

俺 「えれえ極端だな。じゃ、黒が2と。とりあえずこれで全員だな」

ペレアス 「ん？ 数が合わねえぞ？ あと一人足りなくないか？」

俺 「ああ、俺は現状維持。俺はこの髪の色気に入ってるからキルシユ「ええ!？ 自分ばかりブルーイ！」

俺 「うるせえ。俺は筆頭だからいいんだよ。さて、じゃあ明日にでも買いに行くとするか。オイ、チャラ男3兄弟、お前ら暇だろ。明日行って来い」

キルシュ「自分だってヒマなくせに・・・」

シュヴァリエ達はなんかブーブー言ってたが知ったこっちゃねえ。一人くらい現状維持がいても問題ねえ。それが俺なら尚更問題ねえ。でも、この3人に行かせたのは俺の大失策だった。

翌日、屋敷に立ち込める異臭から逃げるように部屋から出てエルメスと二人リビングでテレビを見てみると、急にチャラ男3兄弟が全速力で降りてきた。

キルシュ「敵を補足！ 確保！」

パーシー「ヤー！」

リオ「神妙にお縄に着きやがれ！」

俺「は！？ うわ、離せええええ！」

3兄弟に強制連行されてキルシュの部屋に連れ込まれた俺は、パーシーとリオに床に組み伏せられるという無残な姿に。

「てめーら何すんだ！ 離せ！」

「フハハハ、副長殿、そろそろ年貢の納め時ですよ」

そう言ったキルシュがプラスチックの容器を一生懸命シャカシャカ振っている。

「え、ちょ、マジ、マジやめる」
「さーてコレは何色でしょう？ 当てたらやめてもいいけど」
「ブラウン！」
「残念！」
「ギヤアアアア！」

答えを外した俺の頭の上にキルシュはそりやもう嬉しそうに笑いながら、ドバドバとカラーリング剤をブツかけた。

ああ、これがついてしまったら染めねえわけにいかねえじゃねえか。チクシヨ、クツソー！ くせえええ！

そして放置すること30分後。

キルシュ「さあ、カイくんお風呂いこつかあ」
パーシー「お兄ちゃん達がキレーキレーしてあげるからねー」
俺「テメエらマジ覚えてるよ、マジぶっ殺す」

相変わらず捕まったまま今度は風呂場に強制連行。浴室に入ると、そのままシャワーをぶっかけられる。

リオ「ちよっと、俺にも水が飛ぶんだけど」
俺「つーか普通頭にだけかけるだろ！ 服ビショビショじゃねえか！ 着替え持って来い！」
キルシュ「自分で取りに行けば？」
俺「マジ殺す・・・って、あー！ 服に色移ってんじゃねー

か！ 俺のアルマーニ・・・テムエらマジ・・・マジ殺す！」
パーシー「ハイハイ、シャンプーするからじっとして。お客様お
ゆいところございませんかー？」

俺 「お前らの存在が歯がゆいわ！」

捕まったまま頭まで洗われた上にドライヤーまでご丁寧に掛け
られた。ドライヤーの風になびく前髪を見て俺超シヨックを受ける。

俺 「マジ・・・黒？」

リオ 「カツコいいよ」

キルシュ「似合ってる似合ってる」

パーシー「すげえ副長っぽい。超ロツク」

俺 「あり得ねえ・・・黒とかマジあり得ねえ。確かに俺は口
ツクでニヒルなイケメンだけど、黒はねえよ。黒はねえ」

キルシュ「イヤイヤ、俺の見立てに狂いはなかったね」

俺 「主犯はお前か。覚えとけよ」

で、そのまま引きずられて再びリビングへ。未だテレビに夢中な
エルメスの隣に放り投げて、3兄弟は全力でその場から逃走した。

「クソ！ アイツらブツ殺す！」

すぐに追いかけてようとして起き上がると、エルメスに腕を掴まれ
た。

「カイも髪染めたの？」

「アイツらに染められたんだよ！」

「カッコいいよ」

「そりゃ俺は何してもカッコいいけど！でも黒は俺の中では想定外だ！黒はねえ！」

「そんなことないよ。似合ってるよ、カッコいいよ」

「・・・そーか？」

「うん。こっちの方がカイツぽくて好き」

俺、撃沈。さすが媚びる女。男の喜びポイントをよくわかってる。あ、なるほど。アーサーはこの手管にやられたな。なるほど、良くわかった。

とりあえず、エルメスに免じて3バカトリオは許してやることにした。で、服を着替えて再びリビングに降りると、他の染めた奴らもエルメスに報告していたようだ。

「みんなカッコイイ！ ガラードはブラウンの方が似合うよー」

「そう？ ありがとう」

あのアマ！ 誰にでも言いやがってムカつく！ なんて打算的でズルい女だ！

瞬間的に相当キレて階段の手すりをボコボコにしてたら、後ろからランスが下りてきた。

「あれ？ カイも染めたの？」

「不本意ながらな！」

「ふーん、似合ってるよ。超ダーク」

「ダーク!?」

「うん、すごい悪者っぽい」

なんだろう、今日は本当になんなんだろう。なんで俺はこんなにイライラさせられるんだろう。

微妙に反論する気力も起きなくて、ランスに手を引かれてリビン
グに降りると、シユヴァリ工達からもダークだの悪人だの怖いだの
言われる始末。しかも最終的にそれが

「副長似合っー！」

どういうことだよ。悪人ぽいのが似合っってどういうことだよ。
俺は天使だぞ。ふざけんな。

「まあ、カイ、そんなに落ち込むことないじゃない」

「落ち込んでねえよ！ 怒ってんだよ！」

「ちゃんと似合ってるよ？」

「それがムカつくんだよ！」

「なんで？ ちょいワルっぽくてカッコイイよ」

「・・・ん？」

「なんか黒の方がミステリアスっぽくて、カッコイイ」

「まあ、俺は何してもカッコいいからな」

さすがエルメス。物は言いようとはこの事か。

悪人？　　ちょいワル　○

という図式が俺の中で確立してしまった。

キルシュ「ププ、見るよ。あれ照れてんだぜ」

リオ　「俺らのお陰で大好きな妹ちゃんにカッコいいって言うてもらえたわけだし」

パーシー「むしろ俺らご褒美貰わなきゃいけないんじゃないんじゃん」

俺　　「そーだな。礼はキツチり返してやる」

3兄弟　「ギヤアアアア！」

やっぱ許せなかったからとりあえず殴った。次はコイツらピンクとかにしてやる。

「これでみんな変身完了だね。でも、くさい」

顔の前でパタパタ手を振るエルメスに、リアルに落ち込んだ。

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

報告

バルコニーで煙草を吸いながら、春の夜長に花壇の手入れをする
エルメスを眺める俺。

「春になったら植えてみようと思ってたの！」

そう言って、城に行った時に俺が渡したあの青い薔薇の種子を握

って、外に飛び出していった。

空いたスペースを見つけてせつせと種を植えていくエルメス。種
の数はそう多くはない。元々弱い品種だし芽が出るかもわからない
けど、エルメスが一生懸命作業する姿を見ると、芽が出て欲しいな
と思う。

煙草を消して、再び火をつけようとすると火が見当たらない。あ
れ？ どこやったっけ？ とポケットをパタパタ叩いていたら、ハ
イ、と目の間に火が出てきた。それに俺超ビックリ。

目の前には、蝶のような羽根を背中に生やして、指先から炎を出
すエルメスがバルコニーの手すりに腰かけて微笑んでいた。

「こんの、化け物が！ ビックリすんじゃねーか！」

「ヒ、ヒドイ……」

「あ、でも火は貰う。お前便利だな」

「もう本当ヒドイ！」

そう言っでエルメスが手を引つ込めようとしたから引つ掴んで火
をつけると、エルメスは悔しそうな顔をした。

「もう！ 私は親切でやってるのに！ 文句ばかり！ 便利とか

ヒドイ！」

「あーワリーワリー」

「……謝る気ないよね」

「んなことねえよ。その羽根、綺麗だな」
「そう？　ありがとう」

一瞬でご機嫌を回復したおバカなエルメス。エルメスの体を反転させて羽根をよく見ると、黒地に青と黄色の模様。

「揚羽蝶か？」

「そうだよ。私は青が似合うって言ってもらえたし、でも北都の黄色の羽根も捨てがたいし、クリシュナの黒い羽根もカッコよかったし。どうしよっかなって思ってたら、さっき目の前を蝶々が飛んでっつて、これだ！　と思っつて」

「ふーん、でもアーサーは羽根なくても飛べたじゃねえか。お前はソレできねえの？」

「できるよ。斥力を発生させて後はサイコネシス応用で。でも、羽根に慣れてるから」

「ふーん、意味わからん」

「あはは、カイのバーカ」

「お前ほどじゃねえよ、バーカ。あ、飛んできるとこ見せる」

「きやあぁー！」

ふと、飛んでる姿が見てみたいと思っつて、手すりに腰かけてたエルメスを突き飛ばすと、そのまま地面まで落ちていった。

ええー、なんで落ちるんだよ。意味わかんねえ。何のために羽根生やしたんだよ。

なかば呆れながら地面を覗くと、ムクリと起き上ったエルメスは怒った顔をしてヒラヒラと戻ってきた。

「ヒドイ！ なにすんのよ！」
「つーか何で落ちてんだよ。飛べばいいだろ」
「急に突き落すからビツクリしたんじゃない！」
「その羽根いらなくね？」
「いるよ！ もう、バカ！」
「お前がな」

エルメスはパタパタと滞空しながらキャンキャン吠えている。とりあえず、飛んでる姿を見れたからそれで満足。でもそんなエルメスを見て、飛びながら怒ってるエルメスがなんか面白くて、思わず笑ってしまった。

「何笑ってんのよ」
「いや、綺麗だなと思って」
「ウソばかり！ 明らかにそう言う笑い方じゃなかったよ！」
「イヤイヤ、ホント」
「もう、絶対ウソ！」

怒ったエルメスはそのまま再び花壇にヒラヒラと戻って行った。春の月の下、ひらりと舞うように飛んでいるエルメスを見て、思わず口にした。

「綺麗だな」
「そうだね」

「うお!？」

まさか返事が返ってくると思わずに、超ビックリして横を見るといつの間にかシャンティが隣にいて、ニヤニヤ笑ってた。

「おま・・・心臓から口が飛び出るかと思ったじゃねーか」

「ソレ逆ね」

「そんぐれえビックリしたんだよ」

「ははは、だろうね。綺麗なエルメス様に釘づけだったもんね」

「うるせえ。つーかなんか用か。エルメスならまだ作業中だ」

「いや、さっきエルメス様が落ちてきたから何事かと思って」

「ああ・・・なんか落ちてたな」

「カイがなんかしたんだろ」

「俺が？ まさか。何か知らねえけど勝手に落ちてた」

「いくらエルメス様でも勝手には落ちねえだろ」

全く猜疑心の強い女だ。俺がこれほど知らねえつつってんのに。

まあ、俺が突き落としたんだけど。

疑惑のまなざしを向けていたシャンティは少しすると諦めたのか、エルメスに視線を向けた。

「エルメス様、よく笑うようになったな」

「そうだな」

「よく怒るようにもなったし」

「そうだな」

「今は泣いてる？」

「たまにな」
「そう。アンタの前では泣くんだな」
「お前の前でも泣くだろ」
「最近泣かない」
「ふーん」
「だからアタシ、アンタがムカつく」
「はあ？」
「お休み」
「は？」

よし、シャンティの二つ名は「インドの嵐」だ。全然意味わからん。突然話を振ってきて俺を混乱に陥れてさっさと消えやがった。なんなんだあの女は。一方的にムカつくって言い捨てて、理由も言わずさっさといなくなりやがって。

でも、シャンティと話して俺はスゲエ嬉しかった。エルメスが俺の前でしか泣かないことが。確実に本当のエルメスを独占しているという事が。

こういう事で喜ぶべきじゃないって自制心ブレーキが機能しない。エルメスにとって俺が特別であるという事が、俺にとってはそれほど重要なことなんだろう。

さっきのシャンティとの話を思い起こして、突然安堵した。

ああ、良かった。俺は異常者じゃなかったんだ。

シャンティはエルメスが俺の前でしか泣かないから、俺にムカついたりって言った。それは、俺と同じなんじゃないか。自分がしたい

事を自分にできなくて、他人に先を越された。シャンティのは俺に
対する嫉妬だ。

そう思い至って安堵する。良かった、俺だけじゃなくて。シャン
ティもそうだって事は世の中の他人にもそういう奴らがいるに違
い。良かった、俺は異常者じゃないんだ。

「っーことはシャンティはナカーマ！でも、俺の方がランキング
は上！イヤッホウ！」

風呂から上がって血を飲み終わって、くわえ煙草しながら廊下を
歩いてたら、同じく風呂上りのエルメスに遭遇。

「なんかちょっとカラーリング剥落ちっちゃった？」

「ああ、頭洗うたびに黒い汁が出るな」

「真つ黒の方がいいのにー」

「鴉の濡れ羽色と言え」

「なんか気持ち悪い」

「うるせえ」

エルメスのせいでさっきまでのウキウキ気分はちよつと消沈。ま
あ、いつものことだけど。

寝室に入る前にもつかいバルコニーで寝る前ラスト煙草を吸いに
出た。一応これはエルメスとランスとアーサーへの配慮だ。アーサ
ーが帰ってきて煙草くせえつって殺されないように、というのが一
番の理由だが。

火をつけて微妙に紺色になった空を見つめてたら、エルメスも外に出てきた。

「さつきシャンティと何話してたの？」

「ああ、お前が落ちてきたのにビックリしたとか何とか」

「それでなんて言ったの？」

「俺は知らねえつつた」

「よくそんな平然とウソを・・・」

「エルメスが勝手に落ちたとも言った」

「・・・ヒドイ」

俺に蔑みの視線をぶつけてくれるこのお嬢ちゃんを虐めるのはマジ楽しい。俺の日課の一つでもある。エルメス虐めに始まり、エルメス虐めに終わる日常、素晴らしい。そして素敵な俺は最後にこう来る。

「それと、ひらひら飛んでるエルメスが綺麗だとも言った」

そう言うてにっこり。するとさつきまで俺を侮蔑の眼差しで見ていたエルメスは、嬉しそうに笑った。マジバカ！ 単純！ コイツ面白っ！

心の中で大爆笑する俺の顔を覗き込んできて、ホントに？ ホントに？ と、エルメスはウザい。

「本当だって。シャンティに聞いてみるよ」

「じゃあ聞いてくるー！」

「バカ、今頃寝てんだから邪魔すんな」
「あ、そっか」

走り出そうとするエルメスの首根っこを？まえて諭すと、すぐに引き下がった。そのままエルメスを寝室まで引きずって行くとうとすると、エルメス大暴れ。

「もー！ 私猫じゃないよ！」

「ああ、犬だっけ」

「もう！ 違うよ！ 私が主人でしょ！ ご主人様に無礼は許さないわよ！・・・わっ！」

カッコつけて俺に背を向けた瞬間に、半開きになっていた寝室のドアに激しく頭をぶつけるエルメス。マジ最高、何なのコイツ。さすがはバカの象徴、やる事が違う。

「ああ、お前はなんて可愛い奴なんだ」

「それって、褒めてんの？」

「当たり前だろ。エルメス、なんでお前はいつも俺のハートを鷲掴みにするんだ」

「くっ・・・ムカつく」

「エルメス、俺はもうお前の虜だよ。お前は最高だ。最高にラブリーなバカだ」

「むきー！ ムカつくー！」

悔しそつに顔を真っ赤にするエルメスと対照的に俺メチャクチャ上機嫌。ああ、楽しい、楽しすぎる。今日の俺最高にハッピー。

「お静かに。ランスが起きてしまいました」

「むう・・・ていうか、何そのキャラ」

「ご主人様に忠誠を尽くすのがシュヴァリエの役目ですから」

「ムカつく・・・」

「あまり興奮なさると寝つきが悪くなりますよ。さあ、今日は私と一緒に寝ましようか」

「え？ いいの？」

「勿論です。今日はご主人様のお陰ですこぶる機嫌がいいので、私の機嫌を損ねないうちに言う事を聞いた方がよろしいかと思ひますが」

「え？ う、うん。ありがとう」

「結構です。本当に今日は最高に上機嫌ですので、一晩中可愛がつて差し上げますよ」

「なんかヤダ！」

「冗談に決まってるだろ。うるせえな。棺で寝ろ」

「あ、ウソウソ！ ゴメン！」

「ハハハ。はー、やっぱお前面白れえ、最高」

「やっぱムカつく・・・」

「お休み」

「・・・お休み」

ここまで大満足して寝たのはインド来て初だ。いや、人生初と言つても過言じゃない。素晴らしい。さすがは俺のエルメスだ。

不死の王 アーサー・ペンドラゴン様

エルメスプランセ

ス シュヴァリエ筆頭

カイ・ペンドラゴン

シュヴァリエの活動報告及びエルメスの行動

報告

昨夜は大変ご機嫌麗しく速攻就寝した俺だったが、目覚めた瞬間から意気消沈。

「なにその手。どけるよ」

寝てる間にいつの間にか腕枕してエルメスを抱っこしてたらしい。ランスは俺のベッドの脇に仁王立ちして、その手をグイッと払いのける。

「何って言われても、寝てる間の事まで責任持てるかよ」

「折角、最近時々だけどエルメス様が棺でお休みになれるようになったのに、カイが過保護にするとまた逆戻りじゃんか」

「お前嫉妬だけのくせにそんだけ正論吐けるなんて大したガキだな」

エルメスを起こさないようにそうつと腕を抜く俺を見て、ランスは怒ったように顔を歪めた。

「前から思ってたけどさ、カイってなんなの？」

「は？ なにが？」

「友達にしては度が過ぎると思うけど」

「んなこと言われてもなあ。友達なのは事実だし」

「じゃあ、この前の“俺のエルメス”ってなんだよ」

「うーん、微妙だけどシスコンのようなもんだ」

「そう言われて、その時安心してたよね」

「あ？」

「その言葉を隠れ蓑にしてるだけじゃないの？」

「何が言いてえんだよ」

内心、ランスの観察力と鋭さに冷や汗の俺。本当にコイツ11歳？ まさか見抜かれてんのか！？

ランスの返事を戦々恐々として待つ俺に、ランスは俺を睨みつけ

た。

「本当は、エルメス様が好きなんじゃないの？」

「……は？」

「でも、筆頭だから、立場上隠してるだけじゃないの？」

「違うけど」

「隠さなくたってみんなもそう思ってるよ」

「それはない」

「じゃあなんでエルメス様を自分の物にしたいの？」

「え、いや、それはそういうアレじゃなくて……」

俺が素直にウンと言う筈がない。だって好きじゃねえし。でも否定する割には言葉に詰まる俺にランスは更にキレた。

「カイは裏切り者だ」

「裏切つてねえよ」

「アーサー様への忠誠を裏切ってる！」

「裏切つてねえつて」

「なんでカイが裏切るんだよ！」

「いや、だから……」

「カイなんて嫌いだ！ 死ね！ バカ！」

「あつ、オイ！」

全く人の話を聞かないランスはこの俺に向かって罵声を浴びせて、勢いよく部屋から出て行った。激しくドアの閉まる音に、エルメスも目を覚ましてしまった。

「おはよー。なんかうるさいよ」

「ああ、おはよう。なんだろうな、知らん」

ランスの言葉に自分でも疑問を感じた。確かに俺は友達としては度が過ぎると思う。もしかして、俺がエルメスを独占したいと思ってるのは、本当に恋愛感情から来てるのか？

そう思って寝起きエルメスをガン見してみる。象牙色の肌、黒く大きな瞳、紅く小さな唇、サラサラの長い茶髪、細く小さい躰、それと巨乳。

まあ見た目は悪くねえ。コイツは面白いし、一緒にいるのは楽しい。なんたつて俺の神と信仰するほどだ。一般的に考えてこれほど一緒にいて惚れる要素がないわけではない。

でも、どう考えても、どれほど冷静に分析しても、それはない。検索してもそんなファイルは見つかりません。微塵もそう言う感情が湧き上がってこない。やっぱり違うな。やっぱり俺はそう言うのが分からない奴らしい。

ランスはまだ子供だから、人の中に自分が思ってる以上にいろんな感情があることを知らないんだな。自分がそうだから、俺もそうだと思うただけか。でも、直接俺に言ってくるくらいだ。その内大騒ぎしかねえな。一回ちゃんと話すか。

そう決めて、着替えた俺は早速シュヴァリエ幹部会と、シャンテイ・スニル・レヴィも招集した。

「今日集まってもらったのは、俺にかけられる不当な嫌疑を晴らすためだ」

そう言っつてランスを見ると、ランスは俺を睨み返す。

「不当？ 正当だろ」

「残念ながら不当だ。それはあり得ん」

「じゃあ証明しろよ」

「ああ、いいぜ。ガルフ、俺の女性遍歴を覚えてるだけ述べる」

「は？ 自分で言えよ」

「いや、俺覚えてねえから」

「相変わらず最低だな」

「まーな。よろしく」

ハア、全く、と溜息を吐いたガルフは俺の昔を知らない奴らに視線を向けた。

ガルフ 「えーと、カイが女を作ったのはラルフが死んでからガードが3歳になるまでの約4年間の間だけ」

レヴィ 「え？ その期間だけ？ ていうか聖職者じゃなかったの？」

ガルフ 「吸血鬼になつてはつちやけた。それは俺らもだつたけど。4年で辞めたのは、まあ、飽きたらしい」

ガラード「飽きたのか・・・」

ガルフ 「で、最初の2年の間に作った女の数は約500人」

シャンティ「ご、500人!？」

ガルフ 「俺の知ってる限りはな。仕事のない日は毎晩とつかえひつかえ。勿論水商売とかのプロじゃなくその辺の女。すさまじくコイツはモテてた」

スニル 「ああ、なんか口が上手そう」

ガラード「副長、スゲエ。最低じゃん」

俺 「若エ頃に作った女なんか大概が性欲処理の道具だろうが」
シャンティ「本当に最低なんだけど」

スニル 「微妙に否定は出来んけど偉そうに言う事でもねえよ」

ガルフ 「で、残り2年で思い直したのか、ちゃんと付き合うようにした。それがさらに最低だった」

ランス 「なんで？」

ガルフ 「その2年で付き合った女の数は約50人、それでも異常な数だ。それもそのはず。彼女なのに一切興味もたねえのこイツ。連絡はいつも相手から、相手から誘いがなきゃ会いにもいかない上に大概断る。会つてもやることやったら彼女シカト。5股6股は当たり前。そんなんで毎回ついていけないってフラれる。その繰り返し」

レヴィ 「そりゃ、そうなるだろうな」

ガルフ 「女たちがどれほど尽しても泣いても縋つても、来るもの拒まず去る者追わず。屋敷にまで女が押しかけてきて大騒ぎになったこともある」

キルシュ「あ、懐かしいな、それ。副長その女うぜえつってビンタしてたよな」

シャンティ「最低・・・」

ガルフ 「で、とうとうこイツは悟つた。飽きたんじゃないな、あ

れは間違いだ」

ランス 「悟ったって？」

ガルフ 「自分は人を愛せないってことを。最初からその感情が欠如してるってことに気付いて、女遊びをやめた」

ガラード 「え？ じゃあ今まで一度も人を好きになったことないの？」

俺 「いや、そんなことはねえけど、愛だの恋だの言うレベルまでは到達しなかったな。興味とか好意どまり」

ガルフ 「そう。カイはこういう奴だから、心配しなくてもエルメスを好きになるなんてことは、あり得ない」

俺 「そう言う事だ。ガルフ、ご苦労。お前スゲエな。よく覚えててんな」

ガルフ 「普通こんな強烈な女性遍歴忘れねえよ。完全に忘れてるお前もスゲエよ」

俺 「そりゃ忘れんだろ。どうでもいいからな」

ガルフの話聞いた俺の昔を知らない奴らは啞然。あ、違うな。この視線は軽蔑だ。こういつつまらん話を他人に聞かせるのは気分が悪いが、この話を持ち出さなきゃ俺がなんて言っても納得しないだろう。

事の発端、問題児ランスも例にもれず引いてるが、多分納得してくれただろうと思ったら。

「人を愛する感情がないなんてあり得ないだろ」

「あり得るだろ。そんな奴世の中にいっぱいいるじゃねえか」

「でも、人としての根源だろ」

「一応俺には家族愛とか兄弟愛はある。所謂友愛は存在する。ただ、女に対する恋愛だけがない。理解ができない」

「そんなわけ・・・」

「ある。世の中には自分の子供を虐待する親もいるだろう。それは俺にしてみればあり得ねえ。でも、実際にあることだ。お前が知らないだけで、知らないことを存在しないと決めつけるのはよくねえな」

「・・・カイは、異常だよ」

「ああ、そうだな。知ってる」

「カイはそれでいいの？」

「少なくとも今この状況では、かえって好都合としか思えねえけど？」

「それはそうかもしれないけど・・・」

「俺にとっては、邪魔だ。無駄、無意味、余計なものだ。必要ない」

なんか知らんが、ランスの目は悲しみを帯びてくる。もしかして同情してんのか、俺が可哀想な奴だとも思ってたんのか。余計なお世話だコノヤロー。

俺を見つめていたランスは俯くと、少ししたら再び顔を上げた。

「じゃあ、今はなんなの？　なんでエルメス様にあそこまで尽くすの？」

「アイツが俺の親友で、家族で、大事な人で、俺の生きる理由だからだ」

「それは、愛じゃないの？」

「違うな。似て非なる物、依存と信仰だ」

「依存と、信仰？」

「そ。アイツは俺を何度も助けてくれて、俺の願いを叶えてくれた。」

その事にスゲエ感謝してるし恩を感じてる。それは信仰だ。今まで色々あって、ありすぎて、俺の心はとづくにブツ壊れてる。それはアイツも同じ。俺とエルメスは相互に依存し合って、お互いの傷をなめ合ってるだけの間柄だ。それでもお互いがいなきゃ生きていけないから、依存する。エルメスは強烈に他人を求めるし、俺もアイツがいなきゃマトモじゃいらねえから、傍にいて信仰の為に尽くす。それだけ」

「じゃあ、俺のって言ったのは・・・」

「俺以外の奴に頼る様になって、俺がお払い箱になったら困るだろ」

「じゃあ、恋愛でもシスコンでもないんだ」

「そうだな。恋人でも兄妹でも、下手したら友達とすら呼べねえかもな。俺とエルメスは、そういう可哀想な関係だ」

半ば嘲笑的にそう言うてはみたものの、内心イライラがバースト寸前だ。

チクショー、クソガキが、ここまで言わせやがって。あークソ、ここまで俺の本心を白日の下に晒すのは屈辱だ。ここまで言ったんだから納得しねえとブチ殺すぞ。

イライラかつハラハラしながらランスを見下ろしていると、ランスは驚くべき行動に出た。

「ごめんなさい」

「・・・あ？」

「エルメス様がカイは特別だつて言つてた意味が今ようやくわかった。カイにとってエルメス様が崇める人であるように、エルメス様にはカイは導く人なんだ。自分を引っ張って違う世界に連れて行ってくれる人、アリスの白兔」

「アリスの白兔ねえ・・・ま、そうかもな」

「白兔がいなきゃ、アリスは不思議の国を渡れない」

「そうだな。俺が導いて、お前らナイトがエルメス守ってりゃ、その内ジャバウオック倒して、職務放棄してるハートの女王も戻ってきて、アイツは元いた平和な世界に戻るんじゃないかねえの」

「うん・・・ごめん」

アリスの白兔とは上手い事言うじゃねえか。ウサギなんて可愛い代物じゃねえけど。つーか内心俺は自分がジャバウオックなんじゃねえかとすら思っただけ。まあ、ランスが納得したならいいや。

つーかここまで話したら全員納得すんだろ。上手くすればシスコン疑惑すら払拭。さすがは俺だ。

あとは、アリスを導かなきゃな。国が大変な時にバカンスに行っちゃまった、ハートの女王の帰りを待ちながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8837w/>

インモラルティ・コントロール

2011年10月11日09時55分発行